Socially

No. 28　March 2020

Sociology and Social Work

明治学院大学　社会学・社会福祉学会

Socially

第 28 号　　March 2020

目　次

〈巻頭言〉
震災・原発事故を伝えることについて考える
……柘　植　あづみ

〈講演会〉
明治学院大学社会学・社会福祉学会講演会
シリーズ：メディアの達人vol.1 「メディアの終焉？」
……戸　川　貴　詞　中　川　綾太郎…（ 1 ）
明治学院大学社会学・社会福祉学会特別講演会
誰がパイプラインをつなぐのか……坂　口　　緑…（ 13 ）

〈エッセイ〉
学生のキリスト教活動と『チャペル週報』の変遷……丸　山　義　王…（ 31 ）

〈卒業生インタビュー〉
何事にも全力で取り組む
―社会調査士資格を取得した岩本菜穂さんにお話を伺う―
……木　島　夏　海　石　原　英　樹…（ 37 ）
非日常をプロデュースする
―ホテルスタッフとして旅行事業を見つめる関留奈さんにお話を伺う―
……伊　藤　小　春　石　岡　里佳子…（ 46 ）
興味があることは挑戦してみる
―お笑い芸人として活躍する横井あかりさんを訪ねて―
……石　岡　里佳子　大　川　恭　子…（ 50 ）

学生時代の経験が大切
—旅行会社に勤務している谷川まりのさんを訪ねて—
……赤　木　小百合
佐　俣　朱　理…（55）
AIにはできない、人にしかできない仕事
—報道ディレクターとして奔走する小﨑亮輔さんを訪ねて—
……佐　俣　朱　理
西　岡　晴　菜…（58）
挑戦してみることの大切さ
—社会調査士資格を取得した青木海さんにお話を伺う—
……木　島　夏　海
石　岡　里佳子…（65）
手当たり次第に飛び込んでみる
—留学生の日本語教育事業に携わる吉村悠さんを訪ねて—
……石　岡　里佳子
石　川　真　衣…（69）
福祉の現場からジャズシンガーへ
—シンガー結城章子さんに大学時代とお仕事について伺う—
……佐　俣　朱　理
伊　藤　小　春…（78）

2019年度社会学部卒業論文タイトル一覧

編集後記

〈巻頭言〉

震災・原発事故を伝えることについて考える

柘　植　あづみ*

東日本大震災から９年経った。大学の教職員にとっての９年前は然程過去のことではないものの、大学生にとってはいまや小学生のころの経験であり、甚大な被害があった地域以外の出身者に震災とそれをめぐる社会の諸課題について伝えるのは難しい。まず、当時の映像や文字記録などの資料を示さないと、考えることも始められない。私自身、敗戦から14年半経て生まれたが、学生時代には戦争は歴史上のできごととしか受け止められなかったことから、仕方がない、とは思う。

それでも、震災と原発事故後に本社会学部の教員たちが何人も、そして何度も、被災地や避難先に足を運び、ボランティアや調査など、それぞれが行ってきたことを、社会学部の教育に活かすべきだと考える。震災･原発事故後に生じたこと、復興をめぐる政治･経済の動き、それらによって引き起こされた社会の変化、人々の苦しみ、それらを乗り越えよう、支えようとする人の奮闘などを、教育の現場で伝えることは、何をどうやって伝えるかも含めて、課題であり続けている。2013年度から17年度までの５年間、社会学特講・社会福祉学特講として「震災と社会」の授業を両学科の複数の教員で担うオムニバス形式で開いてきたのも、それぞれの教員が伝える必要性を共有していたからだろう。

社会学部付属研究所においても、2010年からはじまっていた特別推進プロジェクト「現代日本の地域社会における〈つながり〉の位相」の一環として、被災地の地域社会における〈つながり〉を記録する調査研究が行われてきた。また、2016年度みなと区民大学講座（白金キャンパス）では、社会学部付属研究所が企画した「災害に備える―多様性のある社会で互いを尊重するコミュニティをめざして―」というテーマで、６回の連続講座が開催された。

そういったささやかな努力を重ねてきたが、震災からの年月が経つにつれて、学生側からの手ごたえが弱まり、何をどうやって伝えるのかに工夫が必要になった。2019年の６月には、社会学

＊　社会学部長　教授（社会学科）
社会学・社会福祉学会会長

部講演会の一環として「震災の経験を撮り語り継ぐ―フォトボイス（PhotoVoice、写真と声）―」のパネル展示と講座を開催した。被災者が自分の日々の暮らしのなかで撮った写真に、その気持ちを「声」として添えたパネルを数十枚、パレットゾーンの２階に展示したが、その近くにいた学生の多くはパネルを見ようともしなかった。東日本大震災の被災者２名の講演を聴いた学生の多くが関心をもったものの、パネル展示に足を運んだ学生は少なかった。

教員として、伝え方がまずいというのは大いに反省し、工夫すべきではあるが、パネル展示が被災者のこころの痛みや、喜びを表現した貴重なものだけに残念だった。

先日、福島県双葉郡富岡町を訪ねる機会を得た。富岡町は福島第一原発から20キロ圏内にあり、2011年３月11日の大震災に続いて発生した福島第一原発の大事故と放射能漏れによって町全体が警戒区域に指定され、住民すべてが町外に避難した。2013年３月に警戒区域の指定が解除され、「帰還困難区域」、「居住制限区域」、「避難指示解除準備区域」の３区域に再編された。2017年４月に一部地域は帰還困難区域のままだが、町の大部分が避難指示解除された。そして「帰還宣言」が出され、郡山市にあった町役場が富岡町に戻って２年８ヶ月が過ぎた。

私は2012年に郡山市にある富岡町の方が入居されている仮設住宅を訪問した。そのときにお目にかかった方が富岡町に戻られたので、今回、初めて富岡町を訪れた。富岡町は「夜ノ森（よのもり）」の桜並木が有名だが、夜ノ森地区は福島第一原発に近く、いまも帰還困難区域に指定されている。町の住民（住民票を届けている人）は１万３千人弱いるが、居住者数（居住届けを出している人）は帰還が始まって２年７ヶ月後の統計では千百人余と、１割に満たない。そして帰還したのは高齢者が多い。昼間は復興関係、行政関係の人が多く、ショッピングセンターもにぎわっているが、夜は閑散とする。

私と共同研究者の二人が富岡駅にJR代行バスで着いたのは、夕方６時少し前だった。駅とその隣の売店・食堂以外は霧と闇に隠れて、街の様子はまったくわからないままに駅前のビジネスホテルに到着した。震災後に全町避難をしたために、建物の多くが帰還後に解体され新築されている。そのためにホテルは真新しい建物で、フロント脇にウォーターサーバーとコーヒーサーバーが置かれていた。「サービスいいなあ」と思っていたら、水道水が飲めるようになってまだ日が浅いことを知った。

翌朝、町を歩くと、新しい災害公営住宅、災害公営団地、新築や一部改築した家が目立つ一方で、人が住んでいない様子の家や、入り口が閉ざされたまま時を経た店舗、解体中の家屋などが目に付く。公園では環境省と書かれたバスが停められ、住民か復興作業員か、その両方なのか、十数人が並んで放射線の体内被曝測定をしていた。

その近くに東京電力の旧原発PR館が「廃炉資料館」としてリニューアル開館していた。約１時間かけて（じっくり観ると３、４時間はかかる内容らしい）見学し、最新の投影や展示設備によって東電のお詫びと反省、廃炉に向けての努力が繰り返されるのを視聴しながら、なぜ「私たち」はこの事故を防げなかったのか、と思った。６年間も町外へと追いやられ、いまだ帰還できない、あるいは帰還しないことを決めた人たち、迷い続けている人たちの怒りとやるせなさを思った。実際にお話を伺った地元のお一人は、この資料館を見学して怒りがわいてきたと話していたが、それでも、事故の経緯と廃炉作業の進捗を伝える（どこまで事実かという疑念はあるだろうが）東電の姿勢は悪くはない、と思った。

この巻頭言で述べたかったのは、震災・原発事故について学生に伝えることの重要さはわかりながらも、それが次第に難しくなっていくこと、そのためには教員の側の研鑽が必要で、教員にとっても現場を見て学ぶ、フィールドワークの必要性を改めて考えたという単純なものである。久し振りのフィールドワークによって、自然災害や原発事故という「人災」とそれが引き起こしたコミュニティの変化は、生活のすべての側面、社会学や社会福祉学で学ぶあらゆる課題がかかわっているのだということを学生に伝えることをあきらめてはいけない、という想いを新たにした。

講演会

明治学院大学社会学・社会福祉学会講演会
シリーズ：メディアの達人vol.1
「メディアの終焉?」……戸川　貴詞／中川綾太郎
明治学院大学社会学・社会福祉学会特別講演会
誰がパイプラインをつなぐのか……坂口　　緑

講演会

明治学院大学社会学・社会福祉学会講演会
シリーズ：メディアの達人vol.1「メディアの終焉?」

日　時　2019年6月7日
講演者　戸　川　貴　詞
　　中　川　綾太郎
会　場　明治学院大学2号館2401

司会（島田）：これより学内学会講演「メディアの終焉？」を開会します。講演中、質問がありましたら＃mgtogawaまでツイートしてください。

初めに講師の戸川貴詞さんと特別ゲスト中川綾太郎さんの紹介をさせていただきます。戸川さんは長崎県出身の1967年生まれ。本学を卒業し2001年にカエルム株式会社を設立。2004年には『NYLON JAPAN』を創刊し、現在は『NYLON JAPAN』と『SHEL'TTER』の編集長を務めています。

中川綾太郎さんは兵庫県出身の1988年生まれ。2012年に株式会社ペロリを創業。女性向けメディア『MERY』を立ち上げ2014年に株式会社DeNAに売却。現在は株式会社newnの代表取締役社長でありエンジェル投資家としても活躍されています。それではご登壇いただきましょう。（拍手）

●はじめに

戸川：皆さん、今日は雨の中お集まりいただきありがとうございます。戸川と申します。ご紹介いただいたとおり、僕は皆さんと同じ明治学院大学の社会学部社会学科を卒業しました。そのあと日之出出版という出版社に入社して、７年半ぐらい勤めました。次に独立準備を兼ねて２年半ぐらいトランスワールドという別の会社を経て、カエルムを立ち上げました。

学生時代は、今やっているようなジャンルの仕事には手を出していなかったのですが、ファッションをやりたいというより、本を作りたいとずっと考えていました。その後、ビジネスをしていくなかで、ファッションやカルチャーに繋がってきて、それが今のメインの仕事になっています。今日は１時間半よろしくお願いします。

中川：改めまして、僕は中川綾太郎と言います。早稲田大学卒で、今は早稲田でも起業講座とかを起業家の友達と持っています。大学3年くらいの時に仲のいい友達が学生起業したこともあって、アートをネットに投稿できるサービスをつくれたら面白いと考えました。それがきっかけで、いろんなクリエーターが作品をネットに投稿できるプラットフォームを作ったんですね。それがアトコレっていう会社で、その後上場してクラウドワークスっていう会社を作ったんです。

ただ、そうしたらびっくりするくらい失敗した。派手に失敗して、次どうしようって思った時に、ただ負けたまま終わるのもつまんないなとなり、もう一回他の会社を作りました。その時に作ったサービスが『MERY』っていう女性向けのスマートフォンメディアです。そしたら、ユーザーの方にたくさん使っていただくことができました。

はじめは本当にウェブサービスというノリで始めたんですけど、どんどんメディアっぽくなっていって。けれど大学生の時に会社を作ったので

お金がなかった。いろんな人から投資資金を集めるかたち、ベンチャーキャピタルと言われる投資家からお金を集めて、会社を成長させました。その流れでDeNAに売却することになり、２年半グループ会社として経営していました。その中で、多分知っている方もいるでしょうけど、サービスの運営に問題があり、一時的に苦労することになって、その後小学館と作り直して、もう一度再開して今１年になります。

僕自身はもう『MERY』の運営には携わってなくて、今は自分でnewnという会社をやっています。読み方的には「にゅーん」って言って欲しい（笑）。そういう会社をやっているんですけど、そこではアパレルとか、簡単に言うと新しい形のメディアをやっています。今日はよろしくお願いします。

●戸川さんと中川さんの出会い～『MERY』というメディア

戸川：僕はずっと雑誌作りをメインでやってきて、その過程でデジタルのコンテンツも作り始めて、中川さんとともに『MERY』というメディアで、新たなビジネススキームを考えました。この話が皆さんにはわかりやすい部分だと思うので、今日は最初に『MERY』の話をします。この『MERY』のプロジェクトを始めるきっかけが、どっちだったのかは覚えてないんですけど…。

中川：一緒にやるようになったきっかけは、共通の知り合いの中村香織さん（編集者）がいたから。元々僕らはウェブで始まった会社だったんですけど、本当に良いコンテンツやクオリティーの高いものを作るために 出版社で働いていた人の採用を進めていて、その時に中村さんがいた。大手のほぼ全部の会社と話すなかで、戸川さんと一番シンパシーがあった。

戸川：雑誌メディアをどのようにデジタルにしていこうかと考えていた頃、デジタルのコンテンツで上手くいっているところは出版社のメディアでは一つもなかったんですね。雑誌ありきでデジタルコンテンツを作るという動きは15、6年前からあったんですけど、『NYLON』でデジタルのこと

をいろいろやってはいたものの、そもそも考え方を全部変えないと、デジタルでは上手くいかないだろうなとは思っていました。

僕らはずっとブランディング重視でメディアを育てていたのですが、そうじゃなくてまずプラットフォーム自体をきちんと確立した上で多くのユーザーを獲得してという流れを、当時勢いがあった『MERY』と一緒にできると面白いなと思って、それで彼と会うことになったんです。

その時、２億PV（ページビュー：ウェブページが開かれた回数）以上いったんでしたっけ。

中川：PVで言うと、月間４億PVくらい。

戸川：４億までいったんだ！

中川：僕たちが一番重要視した指標は、DAU（デイリーアクティブユーザー：１日にサービスを利用したユーザー）なんですよね。おそらくこれからいろんなネットの話を聞くとき、PVだとカサ増しできてしまうと覚えておいてください。僕らの数え方は超控えめなんですよ、４億PVって。他がやっているようなカウントのしかたをすると、余裕で10億PVとか超えてました。僕らが重視していたDAUでいうと、だいたい200数十万DAUくらいなので、毎日200万人くらい見にきてるって感じでしたね。

戸川：その数字が皆さんにどれくらいピンとくるかわからないけど、日本の人口、さらに20代女性は（人口の10分の１ぐらい。日本の女性人口が6000万人ちょっとだから）500～600万人くらい。これをユーザーとすると、毎月ほとんどの20代の女性が目にしていたってことになります。

それって驚異的な話。『NYLON』ブランドを一

生懸命作ってはきたものの、やっぱりもっといろんな人に見せて、どんどん桁を上げていかないと本当に影響力を持つメディアとしては育っていかないと思った。雑誌自体はどんどん売れなくなっていっていますが、かといってなくなるわけではない。なので『NYLON』っていうブランドをどう作っていくかに注力すべきだなと。逆に言うと、ウェブですでにそれだけ影響力を持っていた『MERY』が、紙の雑誌を作るという発想が僕のなかでは新鮮だった。

●ブランディングと規模感

中川：あの時、僕的には絶対作った方がいいと思ってた。作ったものは世の中的には、ニュースになったり、出版社の方にもめちゃくちゃ注目してもらえる。僕の視点で言うと、あの時のインターネットって規模を出すのに最適のサービスの領域だった。でもインターネットは、いわゆるGoogle、Facebook、Instagramのような、グローバルな統一プラットフォームが圧倒的に勝ちやすい構造なので、国内で人数がいっぱいいても２ちゃんねるとかと変わらないんですよね、ブランドができないと。

やっぱり２ちゃんまとめとか、ユーザーが体験をともなわないようなコンテンツが、何に帰属していくのかわかりにくい。その点、世界観を創造できるのって雑誌メディアの得意分野だと思う。特に『NYLON』は「これって『NYLON』っぽいよね」という共通認識があるじゃないですか。僕らは『MERY』というウェブサービスを、出版というリアルな体験を通して、その世界観を作っているのはどういうものかということを、すごく分かりやすい形で世の中に浸透させていこうと考えました。

戸川：これがメディア論かわからないですけど、雑誌という媒体では、要はブランドを作らないと生き残れないと思っていました。規模感ではなくて、ブランド力をどれだけ強めるかっていうところにビジネスのポイントをイメージして、ずっと作ってきました。それは今でもそう。

とはいえ、規模感も必要となった時に、その両方を兼ね備えられないと決めつけるのもおかしな話。そういう意味で、雑誌のブランディング力を意識していた当時の代表の中川君と『MERY』を一緒にやるっていうのは、本当に刺激的な話でした。雑誌がウェブメディアの台頭によってどうなりますか、といつも聞かれるんですけど、問題はそこじゃない。両者はまったく体験が違うものです。本質的には、その「体験が違うもの」をどのように結びつけるかが大事。そういう意味で言うと、先に規模感ありきでさらにブランド力を上げていこうとした中川君の発想が、僕にとっては初めてのことで新鮮でした。もちろんIT系でそういう発想をしている人もいますが、ことごとくダサい（笑）。でも彼の発想はそういう人たちとは違っていたし、なによりセンスが良かった。これはすごいことができるんじゃないかなって思いました。実際うまくいってたんですよね。

中川：そうですね。いい感じでしたね。

戸川；雑誌は５冊、３か月に１回くらい出しました。創刊号の時に当時の編集長の方がいろいろ発案して、例えばウェブで付録の内容を投票して決めようとか。そこに『MERY』っていう巨大なプラットフォームがあったので、たくさんのユーザーが意見を出してくれて。もし付録になったら(自分の意見が通ったら)、意見を出した人たちがその付録を買うだろう、とか新しい実験をしました。結果、発売初日に売り切れてましたよね、あらゆる書店で。

中川：当時意識していたのは、ネットでいっぱいファンがいるサービスが、どうリアルな雑誌と連携できるか、どういう風にファンがコミュニティになって購買活動に移るかみたいなところ。２社で進めるってどうしても難しいんですけど、きちんと話し合いながらやっていきました。

●メディアは終わらない… だが単体ではありえない

戸川：僕は雑誌中心にビジネスをやってきたので、雑誌メディアは終わってる…というか、基本的には出版は斜陽産業なので、そのことをずっと言われてきました。でも、そもそもいろんなビジ

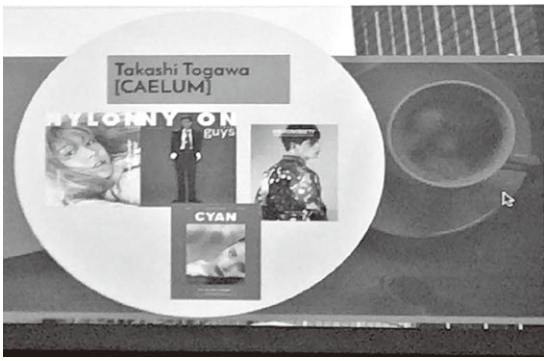
ネスにおいて、雑誌も洋服もそうですし、飲食であろうが何だろうが、単体で何かを行うっていうのはありえなくなっている。いろいろな要素を組み合わせて一つのものを作っていくことが当然の時代に、なぜいつまでも、雑誌がなくなるとか書店がつぶれるとか、若い人たちは本を読まないとか買わないとか言うんだろう、つまらない発想だなあと思います。テレビを見なくなっている、新聞も買わなくなって読まなくなっている、ラジオも聴かなくなっているとか、相対的な捉え方でインターネットに負けているって言われるけど、本来問題はそういうことじゃない。

「メディア」と言えば、皆さんもテレビ、ラジオ、新聞、雑誌、インターネットって言い方をする。でも僕はそれぞれ単体では考えない、そもそもメディアっていう概念自体がすでに崩壊していると思ったので、今回「メディアの終焉？」というタイトルを付けました。

中川：今、戸川さんの話で面白いなって思ったのが、単独では成り立ちにくくなっているなかで、環境変化によるメディアフォーマットの再定義みたいなものが進んでいると思います。例えば『MERY』って普通の雑誌より情報量が少ないんですね、表紙とか。さっき戸川さんの話でもあったんですけど、元々ネットで『MERY』を見ている人からすると、もうすでに媒体のことを知っている前提で雑誌を買うわけなので、この媒体にはどういう企画があるかっていう見せ方は、あんまりいらないんですよね。

昔と違ってネットで本を買う人が増えているので、いわゆるジャケ買いみたいなものでも、ジャケットの意味合いが変わってくる。それこそ戸川さんに、『NYLON』（本）ってどうやって売ってるんですか？ってよく聞いていました。『NYLON』でやっている、表紙をウェブと通常書店でカバーを入れ替えたりとかも、ネットがあるからこそ試せる戦い方ですよね。

戸川：表紙パターンをいくつか作ってインスタグラムで投票してもらい、「いいね！」が多いものを実際に採用する、とかもできちゃう。あとは中川君が言ったように、今でも表紙にコンテンツ情報



（○○のコーディネイト～とか）がたくさん書いてある雑誌は多いけど、『NYLON』はデザインタイトルだけにして、他のコンテンツ情報を載せるのをやめたんです。１年くらい前からそうしたんですけど。それは、書店行けば立ち読みできちゃいますし、ネットではコンテンツとして横に文字要素が入っているので、わざわざ表紙を汚すというか、せっかくいい写真なのに雑味を入れる必要はないんじゃないかなと思ってやめました。

その試み自体は凄く功を奏して、今だとアマゾンとか楽天ブックスとかで、『NYLON』はありがたいことにここ１年間で８回くらい雑誌総合ランキングトップになっている。環境の変化によって、メディアやいろんな商品をどういうアプローチでユーザーにリーチさせるか、昔とはだいぶ変わってきていると思うので、同時にいろんなアプローチをするっていうのはやっぱり面白い。雑誌作って、アプリ作って、CMやって、みたいな流れで結構伸びてましたね、本当に。

中川：もともと僕らが会社始めた時は本当にお金がなくて、アプリの正式リリースが2015年なんですけど、サービス開始は2012年の末、春にウェブ版だけをリリースしました。その頃はみんなアプリをどんどん作っているタイミングで、グノシーとかスマートニュースとかがありました。当時はウェブとアプリが共存するって考える人が少なくて、すべてがアプリになるって言われてたんです。アプリが絶対大事みたいな。ただアプリって広告をけっこう踏まないとインストールできなくて、勝手に伸びないんですよね。

当時僕らはウェブから始めて、ウェブでユー

ザーがいっぱい集まってからアプリを出して、ファンの人にアプリを使ってもらって、そこから広告を踏んでいくという戦略でした。ネットの広告だけだと取れない層が一定数いたので、テレビCMを２回やりました。今でこそウェブがCMをやるのは普通ですけど、当時メルカリかグノシーかうち（MERY）しかなかったので、費用対効果が高くめちゃめちゃユーザーが取れてすごく成功しました。

戸川：けっこう話題になりましたもんね。

中川：そうですね。なかなかCMをやるウェブ会社もなかったので、CMをやること自体話題になった。それこそ戸川さんと雑誌を作らせてもらって変わっていったのは、ネットだけのものから新しいコンテンツに本気で挑戦しているというスタンスが、芸能事務所などを含めた業界各社のコンテンツを一緒にやらせてもらう会社に伝わったことで、よりやりやすくなったことですね。

戸川：キュレーション（既存の情報を選定し、まとめ直して公開すること）メディアと総称されていたのですが、『MERY』は当時からすべてがキュレーションではなかったんです。僕らがやっている雑誌ってオールオリジナルコンテンツなので、そのコンテンツをウェブに転載するというよりは、最初からウェブと雑誌のコンテンツを一緒に考えて作るみたいな部分がありました。一緒にやらせてもらってみて、他のキュレーションメディアと呼ばれていた女性向けのメディアと比べると、圧倒的にオリジナルの質が高くなっていてそれがすごく面白かった。

中川：後発的にそういう会社が出てこなくて、むしろ出てもいいのになって思うんですけど。

●戸川さんの現況～映画、CYAN、HIGHSNOBIETY

戸川：ここから、現状とこれからについてのことをお話しさせていただきます。

会社を2001年につくって、ライセンスビジネスを軸に『NYLON JAPAN』を2004年に創刊して、ちょうど今年で15周年になりました。さきほど話したようにいろいろなウェブの仕事やSNS、イベント、商品開発、時にはカフェを作ったりと、

『NYLON』というブランド力を高めるためにいろんなことをやってきました。

今年は15周年記念で映画も作ります。ついに来月（講演時）から撮影予定です。映画も斜陽産業と言われているエンターテインメントビジネスなんですけど、ある部分を見ると伸びている部分もあって。単に「映画」だけでなく一つの大きなコンテンツとして捉え直して、ウェブでもSNSでも商品開発でも、新たにいろんなことができるかなって。

中川：楽しみにしています。

戸川：映画館で上映するだけじゃないことを考えています。でも、かなりの低予算でやっています。

中川：普通のコストのかけ方と、どの辺が一番変わるんですか。

戸川：正直まだよくわかってない。とりあえずトータルのお金を決めて、エクセルでざっと計算して、ここまでだったら予算がかけられるなっていうのが見えた。この夏くらいからクラウドファンディングもやります。NYLONの15周年記念で作るということもあって舞台は渋谷です。渋谷で全部撮れちゃうのでスタッフ全員の宿泊費や交通費がかからない。

中川：主演はNYLONにゆかりのある人で？

戸川：キャスティングの面でいうと、NYLONに出ていただいた方の多くが、今回映画に出たいと言ってくれて。それだけでも僕は間違ってなかったんだなと思ったし嬉しかったです。スケジュー

ルなどもあり、出たいっていうだけで本当にすべてが叶うわけではないのですが、本人たちが出たいっていうモチベーションを持ってくれているのは、15年やってきたことが間違ってなかったんだなと実感する出来事でした。

（スライドを見せながら）

ちょっと話を進めると、ここに出ているのは『CYAN（シアン）』っていうメディアと去年始めたメンズメディアの『HIGHSNOBIETY（ハイスノバイエティ）』です。

『HIGHSNOBIETY』はベルリンがベースのメンズメディアで、メンズのファッション、カルチャー系でいうと世界３位くらいのスタッズを持っています。それこそ『MERY』でやったような発想で組ませてもらって、元々本国も年に２回雑誌をやっていたので、日本版の雑誌も２冊発行しました。ちょうど１年前くらいにウェブローンチ（公開）して全然まだまだなんですけど、ちょっとずつ成長してきて。ローンチしてから去年の秋ぐらいに１号目を出して、この春の２号目にONE OK ROCKのTAKAさんに出演していただきました。やはり雑誌を作るっていうので出てくれたという流れだったのですが、その後ウェブの方でもブランディングが整ってきてコンテンツが充実してきました。もちろん『MERY』ほどの規模感はまだないんですけど、順調にグロースしています。『CYAN（シアン）』でもやっていることは一緒です。ヘアビューティーの女性向けの雑誌と並行して、ウェブマガジンも創刊して、というモデルの一つです。

中川：これは、これからウェブを強化していく感じですかね。

戸川：そうですね。特に『NYLON』に関しては、そこが一番力を入れるべきところって感じですね。その辺りは中川君に相談したいと思っていたのですが（笑）。まだまだコンテンツを作って発信して、というところから先に行けていないっていうのがあるので、最初から絵を描き直したほうがいいかなって。

中川：なるほど。それを全部受け取ります。

戸川：『MERY』を見ていて、ユーザーとのコミュニケーションの、エンゲージメントの強さが素晴らしいなってずっと思ってました。ここにいる皆さんも同じですけど、一緒に何かをやっていくってとても大事だなと思って。どういう風になるかはわからないですけど、そういうことをぼやっと考えています。

『HIGHSNOBIETY』に関してはもともとがウェブメディアなので、どちらかというとビジネス戦略とコンテンツの中身を今は考えている感じですね。会社としては、雑誌をやってきてブランドを作ってきたので、よりブランド力を高めて、よりそれをどういう風にビジネスに繋げるかにこれから注力したい。

●中川さんの現況～ Empower Doers、エンジェル投資、COHINA、Mr.CHEESECAKE

中川：次に、最近僕がやっていることをお話しできたらと思います。僕は元々ファッションとかインターネットが好きでした。最近、いわゆるブログみたいなものを仕事を始めてから9年間で初めて書きました。そこで、Empower Doers（これから何かしらを動かす力を持てるような人材をじっくり育てるということ）と表現したんですけど、インターネットの本質って、『中抜き』にある、と言われてるんです。昔は何か情報発信をしたいと思った時、出版社に会いにいって、ライターを経て、ひとりで書けるようになったとしても、掲載されるかどうかは紙メディアの制約条件がある。それが今、ブログとかTwitterとかに自分で自由に掲載出来て、それが写真だとInstagramだし、動画だったらYouTubeだし、そういうのがインターネットの本質になったと思っています。

そんな状況のなかで、僕が『MERY』を通してやりたかったのは、コンテンツの「アンバンドル化」です。社内ではそう呼ばれていたんですけれども、レイヤーを分けることで再編集するようなプラットフォームで、個人でもコンテンツは作れる、みたいなそういうものの集合体としてサービスを作ることでした。何かをやりたい人をエンパワーするシステムを作るっていうことが、僕の根本的にやりたいことです。そのひとつの形とし

て、メディアが今の時代に合った形として、どんどん変革していっているなと思っています。

それらの延長で今、起業したい人たちが困った時、（例えば、１年間の運転資金とか２年間の運転資金を銀行が貸してくれない）何年も貯金してお金を貯めてから起業するとなると、人生短いので、若い人がどんどん新しいものを作るのに僕が500万とか1000万とか投資して応援する、いわゆる「エンジェル投資」をやっています。『クラシル』や『LIPS』のような、会社ができてから比較的間もないころにお金を出させてもらって、今となっては投資させてもらったお金というのは本当に一部になっているので大したインパクトはないんですけど、経営アドバイスしたり、マーケティングの提案などのディスカッションを一緒にさせてもらって、応援をさせてもらうことをやっています。

自分の会社でいうと、今、『COHINA』っていう背が小さい人向けのアパレルのブランドがあります。大学を卒業したばかりの女の子２人とブランドを作って、事業責任者として運営しています。純粋に情報としてのメディアではなく、Instagramとかでユーザーさんとコミュニケーションを取って新しいものづくりをする、例えばインスタライブで「こういう新しいワンピースを作ろうとしてるんだけど、これくらいの丈になりそうなんだけどどっちがいいと思うか」みたいなことを話し合ったりして運営しています。また最近は、Mr.CHEESECAKE（ミスターチーズケーキ）というチーズケーキ屋さんをやっていまして、これはある日、料理の上手い人がチーズケーキを作ってネットで公開したらすごい売れたっていうもの。

もう一つは音声のサービスで、みんながラジオのような音声コンテンツを作ったりできるサービスをやったりしています。個人のテーマとしては、ネットができるようになったことで、ブランドの作り方もユーザーとのコミュニケーションも変わるし、音声のプラットフォームのかたちも変わるし、芸能人がYouTubeの動画を作る際のお手伝いとかの制作企画など、個人をエンパワーすることをやっています。

●既存のメディアへの違和感～戸川さん

戸川：今話してきたことと重複するのですが、『NYLON JAPAN』を創刊した時、Facebookがちょうどスタートしたあたりでした。Twitterが多分その2年後、Instagramが2010年くらいだったと思います。中川君が立ち上げた『MERY』が始まって、まだ十数年しか経ってないっていう感じですけど、僕が皆さんと同じ学生だった頃には、テレビ局や出版社に入りたいと言う人ばかりでした。

インターネットは、僕が学生の時（91年卒業）にはまだなかったんですが、ぼんやりですけどテレビや雑誌に違和感はあって。学生時代、ずっと出版社やテレビ局でバイトをしていたので、「何かが違う」となんとなく思ってました。

実際に出版社に入ってみて、インターネットが出てきて、社会が一気に変わってくるだろうなってのは予想がつきました。ずっと同じ環境にいると、いつかそこについていけなくなるだろうなと感じたので、別に会社が嫌いではなかったんですけど、自分で新しく会社を始めました。これからのことを考えていくと、メディアの影響力がどうかとかそういう発想ではなくて、もっと一つ一つの個、そういう小さなところに大事なポイントがあると思います。

●個人メディアに大きな可能性～バーチャルヒューマン

戸川：その一つに“バーチャルヒューマン”が世界中で出てきています。（スクリーンを見せながら）これは『imma』っていう、3DCGと実際の人間とを組み合わせて作っているインフルエンサー。要するに、Instagramなどの登場で個人の影響力がどんどん高まって、億単位のフォロワーを抱えている人の一言が、朝日新聞よりも圧倒的に影響力を持つようになっています。そういうことを、“バーチャルヒューマン”とかのビジネスが体現しようとしています。

ジャンルは色々あるとは思いますが、ファッションやジャーナリズムでそういうことが可能な時代になってきて、彼女らのような“個”の影響力が強くなってくると、やっぱり既存のメディアについて、旧態依然とした捉え方をしないほうがいい。今日この講演に来てくださった皆さんはメディアに興味のある方たちだと思うので、もう少し一つ一つのモノやヒト、そういう部分に注目してほしいなと思います。僕らも、そういうこれからの時代にとって必要なものを作っていきたいなと思っています。

●ネットイノベーションの可能性～女性ファッションコンテンツ

中川：その通りですね。僕がサービスを始めた時って、女性のファッションコンテンツ的なもの、女性誌に掲載されている種類のような情報ってインターネットになかったんですよ。それってなんでないんだっけ？というところから作ったサービスでした。ライフスタイル誌全般でも、紙だとめちゃくちゃ受け入れられているのにネットだとまだない、みたいなものとか、きっとまだ色んなものごとにおいて可能性がある。ポストイノベーションを起こす余地があるというか…。

今ってその一つの形で、どんどんメディアが個人に紐づいて、例えばYouTuberの人ってめちゃくちゃファンの人増えていると思うんです。あれって自分で動画を作るところから全部やっているから、本当に個人の小さなメディアとして、内輪型で成立している。そういう流れが、今後もすごく加速すると思います。

戸川：そういう意味で言えば、それらを「メディア」という括りで言っていいかは僕もわからないですけど、皆さんの生活に影響してくるとすると、やっぱりそれがすごく大事なものだと思う。多分ここにいらっしゃる方たちがこれから働きだして、僕らが想像できていないものとかを、スピードが早いので、５年後には今と全然違うのを生み出していると思うと楽しみです。

中川：ほんと、どうなるんだろうなって思いますね。

戸川：僕は皆さんが考える新しいこと…こういうのがあると面白いなとか、全ては小さなきっかけなんですけど、そういう思いを大切にしてほしいなって思っています。一人ひとりのなかに絶対に答えはあるので、自分の小さな気持ちが大事だと思います。その気持ちを大切にして、新しいものをどんどん作っていってほしいです。綾太郎君が多分支援してくれる。（笑）

中川：すごくいいプランであれば。持ってきてもらえれば、投資をするおじさんなので。（笑）

戸川：ちょっと短い時間でしたけど、こんな感じで締めさせてもらいたいと思います。今日はありがとうございました。（拍手）

●質疑応答

司会（塩原）：戸川さん、中川さん、ありがとうございました。ここから質疑応答に移りたいと思います。

Q1：これからのメディアはどうなっていってほしいですか？

戸川：突き詰めれば、皆さんのためにあるもの、生活を豊かにするためのものであってほしいと思う。

中川：僕は、ネット側の人間という前提で聞いてもらえると嬉しいんですけど、まずインターネットって良質なコンテンツの数ってすごく少ないんですよ。それはコンテンツを作る作業が、複数人でやろうとすると死ぬほどお金がかかるからなんですよね。

それでインターネットの広告ビジネスは、ある程度これくらいまでならビジネスになるという範囲が決まっているんです。出版も数万部で部数これくらいしか売れない、広告はこれくらいしかいれられない、そうすると制作費はこれくらいに抑えないといけないとか、どのビジネスモデルを選ぶかによって規定されているんですね。だからウェブでコンテンツを作るとなった瞬間、広告で儲けるしかないと決まっている瞬間に、100万PVが仮に１記事で出たとしても、10万円までしかお金をかけることができないんです。PVは0.1円って大体相場が決まっているので。

だからこそ、個人の善意に基づいて誰かが何かを作るっていう、YouTuber的な人が成果報酬型コンテンツを作るしかいいコンテンツが生まれにくい。なのでこれからは新しい仕組みが必要で、それが生まれることで今まで構造的に生まれなかった面白いコンテンツが増えてくる。Netflixなどはプラットフォームに月額課金で世界中の人から報酬を得ているからコンテンツに再投資することが出来るわけで。お金がある会社だけがそういうことをできるのではなく、そういうのが回るビジネスモデルを作った会社が、コンテンツに再投資できているという点が新しいですね。それこそ『NYLON』とかは出版ベースで部数が上がったらコンテンツ作れるっていうビジネスモデルから、出版を通して得たネットワークとブランドをどうお金に変えるかということで、コンテンツを作るお金を再投資する元を生み出しているので、同じく新しい面白いことができる点に僕は期待しています。

Q2：ネットメディアが普及している今、紙媒体メディアが存在している意義はなんですか。

戸川：さっき話したことですけど、ネットで何億PV、2000万人のユーザーと数万人の雑誌のユーザーと比べると、雑誌の必要性なんてないと思われがちですけど、やっぱりそもそものものが違うというか、体験が違うものなので、紙対ウェブっていう考え方自体がナンセンスなんじゃないかと思うんです。

紙も使えばいいし、デジタルも使えばいいし、実際のイベントもやればいい、さっき言った映画も結局は同じ軸にある。それらは対ではなくて、どういう風にいろんなものを巻き込むのかというところであって、それが例えばチーズケーキでもいい。そういう意味では存在意義がある。

中川：今戸川さんがおっしゃっていたのは、すごくよくわかります。僕が違う観点で話すとすると、ほんとにどっちがいいとかいうよりも、それらの特性を踏まえてどう一つの体験を生み出していけるかっていうのがとても大事。明確な違いとして言えるのは、例えば写真が紙に大きくプリントされていると、元の写真をすごく小さく見るより綺麗だったり、感動したり、感じ方が違いますよね、保管できたりもするし。でも、紙って結局そもそもあまり人に見られない。ウェブのように２～3000万人に見られたりしないので。

戸川：今10万部の雑誌ってなかなかないです。

中川：実際僕らがやっているブランドとかも、雑誌に掲載されてバカ売れする、みたいなことは全然なくて、例えばある一人のインフルエンサーの方とかが、いい感じのストーリーに沿って紹介してくれた方が売れたりする。つまりそれって純粋に紙だとリーチ（広告の到達率）が悪いから。これに尽きるんですよね。

Q3：中川さんに質問です。学生起業できる分野としてウェブメディアがいいと聞ききまし

たが、実際には飽和しているようです。VRやARなどの分野で、ウェブメディアで学生が起業できる分野があるのか。雑誌のリプレイスで起業できるところがあるのか。

中川：僕の観点で言うと、学生が起業しやすいかっていうのは本筋ではないです。僕が大学生くらいの子に投資をするので。それは例えばサイバーセキュリティ系の会社だったり、いわゆる『LIPS』みたいなサービスだったり、『クックパッド』がこれからインターネットになっていくというのを体現していくクラシルだったり、基本みんな大学生企業なんです。ライブコマースをやろうっていう学生もいて、学生企業だからという制約条件というよりもまず、何をマーケットとしてみて何を提供価値として捉えてやってくのかを考えることの方が必要かなと思っています。その中であえていうとHRとかリクルート系など、ざっくりと「トレンドっぽいもの」でやるとか、現象で追うとか。あるいは大企業がやっていて、そのスマホネイティブ版みたいなものってないじゃんみたいな気づきとか、何かわかりやすいことをトレースしていくとか…。それこそリクルートがやっていることはマーケットがすごく大きくて、まだそういうのは「ありそうでないもの」を埋めていく、既存のものを部分的にトレースしていくっていうのもあるんですけど。でもやっぱり、単純に面白いなって思うものを作っていくのがスタート地点なんじゃないかな。

Q4：インターネットで次にバズるコンテンツがわかったりするんですか。

戸川：どうですかね。バズる…。それがどういうポイントなのかって言う前提にもよるんですけど。

中川：ほとんどわかんないですよね。一つわかるとすれば、いいものがバズりやすくなっているということ。きれいな写真だけでもバズる。今まではネタっぽいものでないとバズりにくかったけれど、最近はクオリティーが高いものがバズりやすくなっていて。学者的視点で何がバズっていたという風に変遷をたどって予測するか、もしくは、説明はできないんだけど、こういう風な要素があったら絶対ウケるっていうプラットフォームの特性を把握した作り手側の立場かで視点が変わってくる。そういう意味で、わかるといえばわかるし、わからないといえばわからない。

Q5：『MERY』とコラボした理由は何ですか？何が他と違っていたのですか？

戸川：要素は色々あって、『MERY』が捉えていたユーザーのイメージが面白かったからです。『MERY』は『MERY』っぽさみたいなものを、そのふわっとした感じの女性像を、きちんと数が多いのに捉えている感じが凄いなと思いました。もちろん中川君と直接会ってみて彼の人柄もあります。自分たちの生み出すものに対する熱量を強く持って雑誌を作ってきた経験上、もし一緒にやるなら、そのような熱量を持っているところとでないと上手くいかないだろうと。当時中川君はペロリっていう会社をやっていて、とても熱量があって凄いなと思いました。

Q6：SEO（検索エンジン最適化をする技術）ライティングをしています。『MERY』は記事の何割をSEOライティングで占めていて、メディアへの影響はありましたか。

中川：ほぼ０％です。メディアって何より重視されるべきはユーザーだからです。ユーザーにとって読みにくいようなものを作ってまで重視されるものはない、っていう前提で事業をやられた方がいいのではないですか。

Q7：成功者の特徴はありますか？

戸川：成功者の定義がよくわからないですが、仕事に限らず嘘つかない人、誠実に向き合っているっていうところは大事だと思っています。

中川：僕も同じことを思っていて、あえていうと

諦めなくてめちゃくちゃ執念深い人が成功すると思う。事業をやっていると多くの人は途中で諦めてしまう。『クラシル』の堀江裕介も『LIPS』の深沢雄太も僕も、いかに成功するかといったらそこなんですよね。１回２回失敗しても周りがついてきてくれる人って誠実で嘘をつかない。嘘つきながらちょろまかしてやっている人には絶対２回目に投資はつかないし、メンバーもついてこないし、諦めない人というのが大事です。

司会（塩原）：本日はお忙しい中、戸川さん中川さん、本当にありがとうございました。

また天気の悪い中ご来場いただきました皆様ありがとうございました。社会学部の学生教員卒業生で構成される「学内学会」の講演、いかがでしたか。私もメディアに興味を持つ人間の一人ですが、学ぶことも多く、また考えを改めさせられることも多かったです。ありがとうございました。（拍手）

講演会

明治学院大学社会学・社会福祉学会特別講演会
誰がパイプラインをつなぐのか

日　時　2019年6月15日
講演者　坂　口　　緑（社会学部　教授）
会　場　明治学院大学本館1255

●はじめに

坂口：こんにちは。坂口と申します。社会学科で生涯学習論を担当しています。着任してかれこれ20年近く経ち、月日の流れを感じます。

今日はデンマークの話をしたいと思います。せっかくの「学会」 ですので、学会らしい話もしながらも、できれば「こういう社会の仕組みがあるんだ」という学びから、日本の社会を考えるというところまで皆さんと共有できればいいなと思っております。

1. 問題の所在

2. 後期中等教育段階の中退者
2-1　日本の場合
2-2　デンマークの場合

3. デンマークの社会的統合

4. 通学制国民学校の機能

5. 結論と考察

スライド01

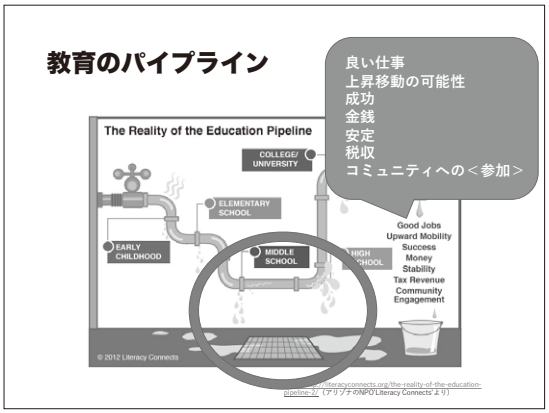
1．問題の所在

●教育のパイプラインにおける「漏れ」

これはパイプラインの写真です（写真01）。

「教育のパイプライン」という言い方があります。教育社会学で「トラッキング」ともいいます。ある人がどのような教育課程を経て社会に出ていくのかというのを、特にアメリカや日本のような単線型と呼ばれる教育制度をもつ社会ではパイプラインという言い方をします。これはアメリカのNPO「Literacy Connects」が作成した図ですが（スライド02）、パイプラインの「漏れ」が問題だ、というのが2000年代以降の先進国で共通した課題になっています。教育支援・学習支援を行っているNPOの図なので、パイプラインからうまく漏れずに通り過ぎれば、「良い仕事」「上昇移動の可能性」「成功」「金銭」「安定」「税収」「コミュニティへの参加」などが可能になるというイメージになっています。

写真01　パイプライン



スライド02　教育のパイプライン

1．問題の所在

・教育のパイプラインにおける「漏れ」…後期中等教育段階の中退者および卒業後の不安定雇用（山田　2004）

・大学ユニバーサル・アクセス段階における「中退者」の問題化

・社会的統合（social integration)の観点からも「漏れ」への対応が重要

・コミュニティへの＜参加＞はどのような政策による対応が可能なのか

スライド03-04　問題の所在

この教育のパイプラインにおける漏れ、ぽたぽたぽたというしずくに関して、社会学者の山田昌弘さんが『希望格差社会』(2004年）という本で大きな課題として示しています。

●大学ユニバーサル・アクセス段階における「中退者」の問題化

2003～04年頃、「ニート」という若年無業者が問題になりました。玄田有史さんがニートを社会問題として取り上げ、それはイギリスで議論されたことの紹介でしたが、新たな概念に照らして日本社会を見てみると「ニート」がたくさんいるではないか、という話になりました。

『希望格差社会』ではパイプライン、特に後期中等教育段階の中退者や卒業後の不安定雇用は、イギリスだけではなく日本でも起こっている問題だと認識されるようになりました。これはある意味普遍的な問題で、マーチン・トロウという教育社会学者は、ある社会における同年齢人口の大学への進学率が50％を超えるとユニバーサル・アクセス段階に入り、どうしても後期中等教育段階や高等教育においても「中退者」「そこに適応できない人」というのが出てくると指摘しています。

日本でどのように議論されてきたのか。2019年の日本の大学進学率ご存じでしょうか？　53.7％になりました。ユニバーサル・アクセス段階を超えたのが2009年といわれています。この頃から「中退者」というのが日本社会でも問題になる可能性が高まっていたと言えるかと思います。

私の関心は後期中等教育の中退者、パイプラインの漏れに対して何ができるのかということです。同時に、そのような状況に置かれざるを得ないような人達というのが、移民だったり、難民だったり、海外ルーツをもつ多文化状況の中で生じているということにも関心を持っています。これらの問題に、外国では生涯学習の枠組みを活用し対応しているという例を見ていきたいと思います。

２．後期中等教育段階の中退者

２－１　日本の場合

日本の話も少しだけしたいと思います。日本の社会もこの間、全く無策だったわけではないです。社会福祉論ではこれまでもずっと議論されていることで、社会福祉学科の新保美香先生に色々教えて頂きました。2004年には「若者自立・

挑戦戦略会議」というのが官邸から立ち上げられ、2005年には日本版デュアルシステムが示されます。さらに若年無業者（ニート）対策としては、若者サポステ事業、若年者雇用対策というのを厚労省が行っており、これは現在も続いています。2007年文科省の『文部科学白書』にも同じようなニート対策、それから若年無業者に対して、教育の分野で何かできないかということが明記されるようなりました。2010年内閣府は「子ども・若者支援推進法」を制定しました。私は生涯学習や社会教育、学校外教育に関心を持ってきたので、この文科省の白書の中で若者の自立支援としてどのあたりが生涯学習支援として想定されているのかというのを読み込んでいました。全くないわけじゃない、でもうっすらとしかないというのがとりあえずの評価です。

2. 後期中等教育段階の中退者
2-1　日本の場合

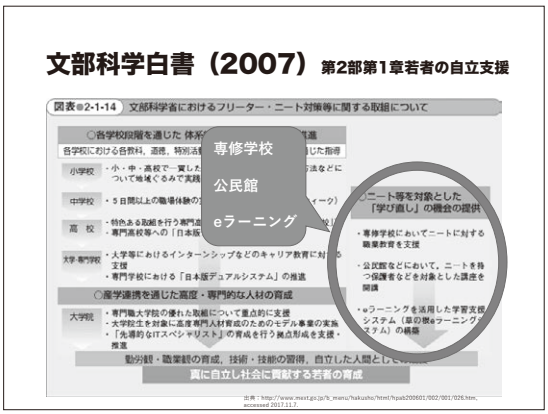
若者自立・挑戦戦略会議（2004）**官邸**

- 日本版デュアルシステムの推進（2005-）
- 若者サポステ事業、若年者雇用対策**厚労省**
- 『文部科学白書』（2007）**文科省**
- 子ども・若者支援推進法（2010）**内閣府**

スライド05　後期中等教育段階の中退者

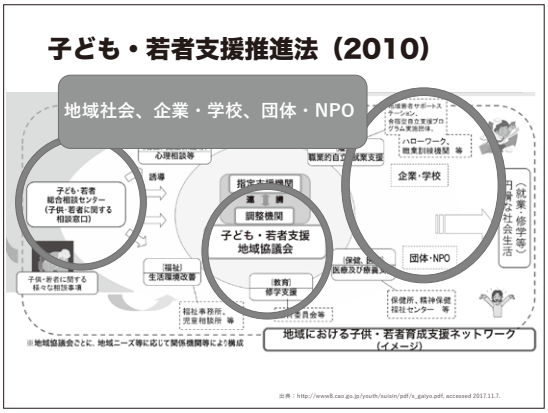
文部科学白書の中では、ニート等を対象とした学び直しの機会の提供というのが記されています。例えば、専修学校に入ったり入りなおしたりする、公民館でキャリア教育する、それからe-learningを活用するなどが、社会教育領域における対策として示されています。実際これが本当にどのようなところで動いているのかというのにも関心があるのですが、正直申し上げて、公民館の実践レベルでは少しは対応されている、けれども大した予算がついていないというのが現状です。

それに対して、「子ども・若者支援推進法」という2010年の法律に基づいて、県単位で動き出して



スライド06　文部科学白書（2007）

いるところもあるというのが一つ最近勉強したことです。これも新保先生に紹介していただいて、特に「佐賀モデル」それから「静岡方式」という二つのモデルが現在動いていることを知りました。どちらも先駆的なもののため、全国に広めようとしている段階ですが、特に若年無業者・ニート・引きこもりなども含めて、高校中退者へのアプローチがどちらも大変丁寧になされているという話です。



スライド07　子ども・若者支援推進法2010

2015年の『子ども・若者白書』には、中退者自体は実は減っていると書かれています。

なぜかというと、通信制の高校が増加したことで、とりあえず高校の中退者数が減少したからです。ただしそれなりに多く、80万人くらいとされています。2017年の白書にあるように、15～39歳

・内閣府『子ども・若者白書』（2015）

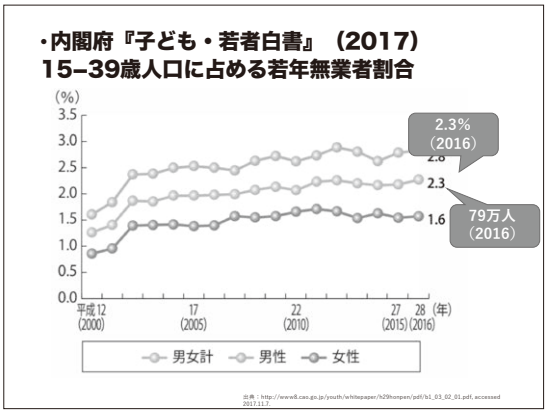
中退者は1990年代半ばに増加した後，2002年以降は減少傾向

→インターネット環境の整備に伴う広域通信制高校の増加

中途退学者数は59,923人，中途退学率は1.7%（2015年）

スライド08　内閣府『子ども・若者白書』(2015)

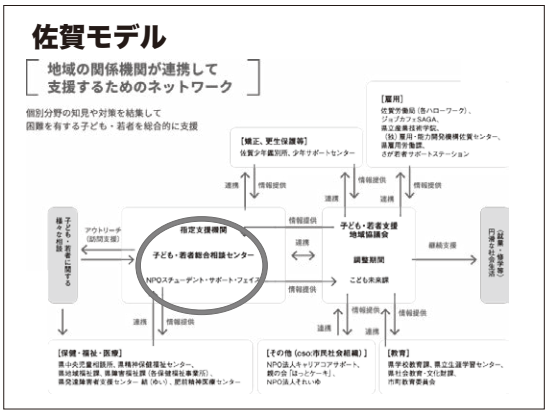
の若年無業者割合というのが同年齢集団のうち2.3%、約80万人です。



スライド09　内閣府『子ども・若者白書』(2017)

実は、ヨーロッパ諸国と比べるとものすごく良い数字です。後ほど見るデンマークの場合、11%です。実に10人に１人が施策のターゲットとなる若年無業者に当てはまります。それに比べると日本の2.3%というのはいい数字です。けれども、今、大学に入学してくる18歳人口がもうすぐ100万人を切るのではないかと言われている時代です。80万人という集団の大きさがわかると思います。

「佐賀モデル」というのはたった一つのNPO、スチューデント・サポート・フェイス（SSF）という、佐賀県武雄市生まれの若者（佐賀大学の教育学部出身者）が仲間と立ち上げたNPOが若者に寄り添う伴走支援を始めた方法のことです。まずは武雄市、次は佐賀市、次は佐賀県…と、後から仕組みや予算を作って支える方法を佐賀モデルといいます。



スライド10　佐賀モデル

SSFを主催する谷口仁史さんはNHKの番組『トップランナー』にも２回出演なさったそうです。新保先生に紹介していただき、2019年２月に視察に行きました。佐賀サポートステーションというところに行きました。国の資料に引用されているし、『トップランナー』でも取り上げられているし、どれだけ立派なところなんだろうと想像して行ってみたら商店街の空き店舗で、こんな感じの所でした。（写真02）

写真02　佐賀サポートステーション

外観は殺風景ではありますが一歩中に入ると温かみのある空間が広がります。若者が自由に集うことができ、そこで必要であればカウンセリン

グや就労支援を受けられて、いろいろな職業に関するガイダンスを受けられる、そのような場所です。佐賀若者サポートステーションには裏口があり、表からなかなか入って来られない人のために駐車場も裏口に用意されていました。この場所はお隣にある有名洋菓子店（デイジー型のおいしいアーモンドパウダーでできたケーキが有名）の店主の方が格安で貸して下さっている物件とのことです。

SSF発祥の地は、TSUTAYAが運営する公立図書館がある町としても有名な武雄市です。武雄市のたけお若者サポートステーションの所長は、谷口仁史さんが卒業した中学校の先生をなさっていた方。若者向けのハローワークではありますが、そうはいっても仕事を紹介してすぐに働きに行ける人たちではないので、働きに行くまでというのを非常に丁寧にサポートし、伴走するという仕事をしています。『トップランナー』で非常に印象的に取り上げられているのは、時には引きこもりの若者の自宅前に車を停めて、スタッフが寝泊まりするそうです。何かあった時、呼ばれた時に、すぐ行けるようにするとのことです。場合によってはDVや自傷行為など緊急性を要するものがあるので、そのような時にすぐに誰かが駆けつけられるようにしているそうです。その段階を経て信頼を得たらここに遊びに来てくれて、ここに来てくれたら次はいろいろな就労体験をしてみる。人前に立つのが苦手な人であれば、旅館のバックヤードでシーツを揃える仕事をしてみるなど、その人に合った仕事を開発しながら支援するとのことです。

これが、日本で最先端の「佐賀モデル」と呼ばれる若年無業者対応です。県の事業として社会福祉の枠組みで動いているので、私の関心領域である社会教育的な取り組みや、生涯教育的な取り組みはあまり見られませんでした。やはり教育委員会と社会福祉行政とは所管が異なるからという話でした。

２－２　デンマークの場合

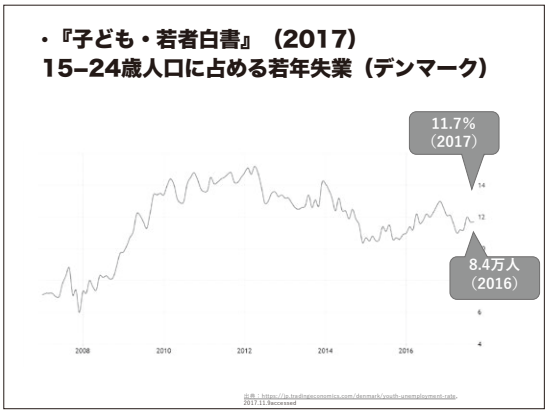
では、デンマークの場合どうなのか。デンマークは、2003年から若者の失業者や高校の中退者が問題になりました。まず彼らが行ったのが「ガイダンス法」という進路指導に関する法律改正です。それまで学校で担当のカウンセラーの人が必要に応じて学生と面談するとしていた進路指導を中規模化しました。全国を８地区に分けて各地区にガイダンスセンターを作り、そこにカウンセラーが所属するようにして、学校に通っている学生も中退して学校に所属しなくなった人も、全員をカウンセリングできる方法に変えました。それまで学校に所属していない中退してしまった人には進路指導というものはありませんでした。自分が手を上げれば誰かが助けてくれたかも知れないけれど、多くの中退を選んだ人たちはそうではありませんでした。市区町村に「地域ガイダンスセンター」をつくり高校中退者の対応を始めたのが2004年です。

2. 後期中等教育段階の中退者
2-2　デンマークの場合

- **ガイダンス法（2003）…職業指導と進路指導の統一化をはかる**
- **若者ガイダンスセンター（2004→2008年-）**
- **地域ガイダンスセンター（2004-）**
- **『生涯学習戦略』（2007）**
- **eガイダンス（2011-）**

スライド11　後期中等教育段階の中退者
～デンマークの場合～

若年失業率はその後も徐々に増加し11.7%です。数としては約８万人です（2016年）。人口は570万人です。日本の規模に換算すると180万人になる計算です。なぜ失業率が高いのかというと、仕事が無いからです。特に男性の非熟練労働が、減っているとも言われています。産業の各過程がIT化し高度になっていくということもあり、それなりの訓練を受けていないとバックヤードの仕事や工場の仕事も難しくなっているというのが背景にあると言われています。特にデンマークは工業国ではないので、製造過程における小ロットの仕事が



スライド12　『子ども・若者白書』2017

『生涯学習戦略』（2007）

- 2007年には80%だった修了率を2015年には90%に、2020年には95%に上げる
- 2008 年に政府は12歳-25歳までの若者の進路に責任をもつ「若者ガイダンスセンター(Youth Guidance Centres;Ungdommens Uddannelsesvejledning:UU)」を設立。「地域ガイダンスセンター(Regional Guidance Centres; Studievalg)」と区別
- 2011年に全年齢層がオンラインで相談できる「eガイダンス(eGuidance: eVejleder)」を開設

スライド13　『生涯学習戦略』2007

スライド14　eガイダンス
〈ウェブ版若者ガイダンスセンター〉

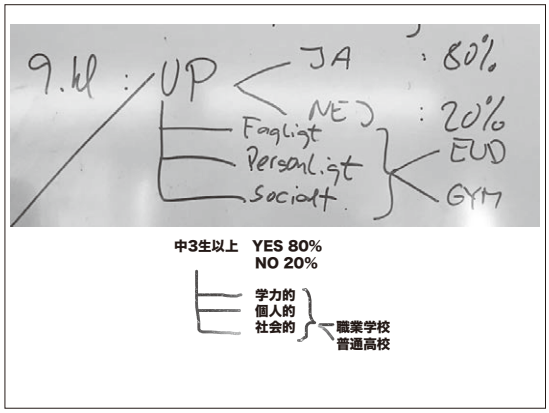
ないと言われています。2007年、デンマークは生涯学習戦略として、この中退者への対応を始めようと決めました。ガイダンスセンターを立ち上げたり、オンラインで相談できるeガイダンスというものを作ったりしました。私がこの構造に着目したのも、2007年のレポートがきっかけでした。なるほど、こういう問題に学校教育や社会福祉ではなく、生涯学習が対応することができるのかと学んだからです。

昨年11月、エスビャー（Esbjerg）市という人口7万5千人の港町のガイダンスセンターを訪問してきました。こんなところです。（写真03）

写真03　ガイダンスセンター

すごく広大な土地があって職業訓練校とガイダンスセンターが一緒になっている。ちょっと町の郊外なんですけども、大変晴れた日で夏は気持ちいいけど冬は寂しいなと思いました。中に入ると様々な職業のパンフレットがたくさん並んでおり、この仕事にはこの教育や単位が必要で、そのためにはエスビャー市のどこを訪ねるべきかが示されたカードでした。建物のなかではカウンセラーが働いています。２名のカウンセラーの方にお話をうかがいました。カウンセラーは１人あたり200人の若者を担当しているそうです。中学から高校へいく段階の若者が対象となります。ただし、９年生（中３生）の80％くらいは自分で何とか進路を見つけていくそうです。友達に聞いたり、親に聞いたり、学校の先生に相談したり自発的に探したりして、大抵の若者は自分はどの方向に行き、どの職業訓練を受け、どんなことをしていくのかよくわかっている。ただし、のこりの20%はどうしても支援が必要だとのことでした。学力の問題が

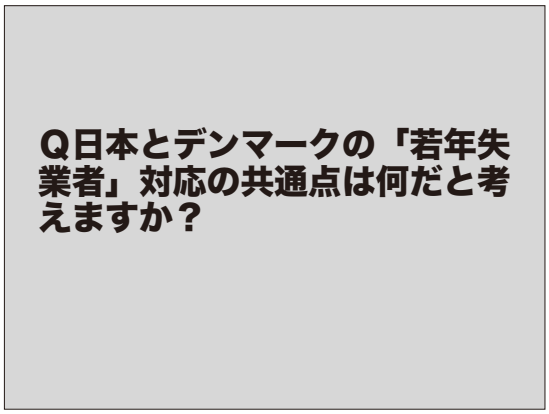
あるかもしれないし、精神的な問題もあるかもしれないし、社会経済的なバックグラウンドのせいかもしれない。なので、この人たちを何とか職業高校か、普通高校か、それともいろんな職業訓練かということを振り分けていく。そのためにトライ＆エラーをしてもらうというのがこのガイダンスセンターの仕事だということでした。



スライド15

どうでしょう？「佐賀モデル」を動かしている熱心なスタッフの人に会いました。デンマークのガイダンスセンターでも同じように熱心に若者に対応する方々に会いました。なにか共通点があるでしょうか。日本とデンマークの若年失業者対策に共通点があるとしたら何だと思いますか？　なぜこのように質問したかというと、デンマークの研究をしているとやっぱり日本と規模が違うからとか、キリスト教の国だから、社会福祉の制度が発達した社会だから、と日本との違いを指摘され、そこで話が途絶えてしまうことが多いからです。

実は、今から30年以上前、私は高校３年生の時に１年デンマークに留学していました。そして2008－09年、１年間子連れで大学の在外研究制度で再びデンマークに留学しました。そのとき思ったのは、デンマークは日本で想像していたよりも遠い国ではないということでした。社会の解像度というか、私の見る目が少し養われてきて、パーツが見えるようになるとこれは既に日本でも取り組んでいることではないか、あの人は日本の○○さんと同じ働きをしているとわかるようになりました。そのように気づいた時、デンマークと日本の社会の差異から考えるのをやめようと思いました。出来るだけ同じことを見つけようと思うようになりました。パーツが変わらないのならば、それを上手く組み替えられる方法を考えられるのではないか、小規模であれば多様な展開が可能なのではないかと考えるようになって今に至ってます。



スライド16　Q日本とデンマークの「若年失業者」対応の共通点

３．デンマークの社会的統合

もう一つ私が関心を持っている領域は、社会的統合です。これは、最近、大学の研究プロジェクト（「内なる国際化」）に関わるようになったのがきっかけで関心を持つようになりました。ご存知のように、ヨーロッパでは、近年、移民問題、難民の受け入れが大きな政治問題になっています。1960年代以降、デンマークも積極的に労働移民、ゲストワーカーを受け入れてきました。主にポーランドからです。他の東ヨーロッパから来た人も多かったです。デンマークは1983年までは家族再統合に寛容で、アフガニスタンとか、イラン、イラクなどからは労働者としてまず男性が単身で移民し、その後、妻、子、それから両親などを呼び寄せて家族で永住することを許可してきました。背景には少子化がありました。

ただし1990年代に入ると移民政策は厳格化します。1994年、今いる労働者をとにかく最大限活用しようという意味もあって、デンマークは「フレキ

シキュリティ（積極的労働市場）」と呼ばれる雇用の流動化を促進させる労働市場を作ってきました。その際、難民や移民が労働者として二級市民扱いを受けるように変わります。70年代80年代までは、デンマークでも工場労働者がとにかく欲しかった。

3. デンマークの社会的統合

- **1960年代から1970年代労働移民（ゲストワーカー）の受け入れ**
- **1983年まで家族再統合に寛容、1992年以降は厳格化** (Andersen 2010)

- **1994年積極的労働市場政策の導入後、労働市場への参加に成功していない公的扶助受給者の扱いが「社会的関心事」となり、移民難民が政治課題に** (加藤2018)
- **1999年統合法施行…基礎自治体が管理主体になり居住地が固定化される**

- **2001年難民移民統合省発足…以降、自由党と社会民主党の政権交代のなかで、移民難民が政争の具に** (Jørgensen 2014)

スライド17-19　デンマークの社会的統合

なのでたくさん労働者を受け入れていたんですけれども、90年代からは、他のEU諸国と同様、知識基盤社会に変化しました。

1999年、統合法が成立します。これは、移民・難民を最初に受け入れた基礎自治体が、まずその移民・難民の管理主体として、統合プログラムを実施し、定住を促すことを義務づける法律でした。どういうことかというと、移住してきた人たちは仕事のある都市に集まってきやすい。けれども都市に移民が集まりすぎると、一部の自治体の負担が大きい。なので、割り当てられた移民の人たちはその地方で受け入れてほしいという法律です。ある意味、働きたくてやってきた経済移民の人たちにとっては、生活することはできるかもしれない、けれどもいつまでも仕事が見つからないかもしれない、いつまでも人生のチャンスが開けないかもしれない、そのような意味をもつ制度変更でした。

皆さん北欧っていうとスウェーデンを思い浮かべるかもしれません。人権を尊重する国で、たくさんの移民を受け入れていることをご存知の方もいるでしょう。けれども、デンマークはそうではありません。移民を排斥しているとまでは言えませんが、できるだけ移民や難民を受け入れない方法をとってきた国です。2019年６月に総選挙があり、社会民主党が３年ぶりに政権に返り咲きましたが、それまでの自由党と同様の政策を維持しました。この意味では、デンマークでは移民や難民の受け入れに対して、右派も左派もあまり考え方は変わりません。なぜなら、労働組合を支持基盤とする左派の社会民主党もまた、自由党と同様、労働者を脅かす存在と見ているからです。移民の人には来て働いてもらってもいいが、最終的には自分たちで勝ち取ってきた社会保障の権利が脅かされるのであれば、移民には帰ってもらいたいというのが本音です。2012年をピークに、デンマークにも多くの難民がやってきました。しかしこの数年は、スウェーデンやドイツと比べるとごくわずかの人しか受け入れていません。

なぜなのか。ある意味、デンマークはとってもナショナリスティックな国だから、というのが私

主な移民難民政策の変遷

年代	政権党	主な移民難民政策	移民難民の主な出身地域
1951－1952	保守党	国連難民条約受諾（1951） 外国人法制定（1952）	ドイツ、ハンガリー移民
1953－1982	社会民主党 急進自由党 社会民主党 保守党 社会民主党	（労働移民の流入） （オイルショック、1973）	トルコ、パキスタン、ユーゴスラビア移民 東欧系移民（チェコ、ポーランド） チリ難民 ベトナム難民
1983-1992	保守党	出入国管理法改正 難民の分散居住措置 外国人法改正（家族再統合要件厳格化、1992）	中東系難民（イラン、レバノン等） スリランカ難民
1994－2001	社会民主党	統合法施行（1999）	ユーゴスラビア難民 ソマリア、コンゴ難民
2001－2012	自由党	移民難民統合庁設置（2001） 24歳ルール（2004） デンマーク語・社会文化試験導入（2005） ゲットーリストの公表（2010）	イラク難民 アフガニスタン難民 ユーゴスラビア難民
2012－2015	社会民主党	難民移民省廃止 移民2世3世の帰化手続きの軽減化	シリア難民
2016－2019 2019－	自由党	難民移民住宅省の再編 （パラレル社会、「ノーゲットー」）	

出典 Brochmann, Hagelund(2012), 加藤（2016；2018）を参考に作成

スライド20　主な移民難民の政策の変遷

出典：Jacobsen&Liversage 2010, Køn og Etnicitet I Uddannelsessystemet, SFi, pp.67-68.

スライド21　社会的統合の阻害要因（2010）

の考えです。日本ととてもよく似ています。社会的統合について、統合法ができて以降うまくいかなくなった、というのが研究者の共通の理解なので、どうしたらいいのかという研究がたくさん出ています。代表的なのがこちらです。移民としてやってきた人たちの社会的統合が何でうまくいかないのか。1．語学ができない。デンマーク語能力の不足している外国人は、無料クラスを必ず受けることになっています。2．出身国で取得した資格が通用しない。これはEUのせいですね。EUが、学歴職歴などの共通枠組みというのを決めていて、EU内部の移民にとっては大変有利ですけども、よそのところから来た国、アメリカとか、カナダ、日本、オーストラリアも含む国々から来た人達は学歴や資格が認められないため、再度、学校に通う直すなどして資格を取り直すことを強いられます。それから3．これも言い方がニュートラルに見えて、とても偏った見方なんですけども、社会的文化的スキルの不足。つまり、デンマークの社会に、適応するような社会的スキルがないじゃないか。ビール飲んで社交したり、余暇の時間にクラブに入ってサッカーやボランティア活動を楽しんだり、友達を家に招いて交流する時間を過ごさないといった、文化的な違いを意味しています。そして4．差別、もちろんあります。5．ジェンダー規範、これがものすごく大きいです。6．集住化です。

フランスの郊外で移民が集住する団地で大きな暴動が起こり、大きな社会問題になっているのを皆さんも知っていると思います。集住するということを良しとする社会もある一方で、集住化を恐れる社会もあります。ある一定以上の基準を超え「ゲットー」になると、政府が介入して「改善」させることが政策となっています。国内のいくつかの集住地における、失業率や所得水準、犯罪率などによってゲットーとなる街区のリストを作り、そのリストから外れるためには何をしたらよいかという方向で施策を実施します。集住地の一つで、コペンハーゲンのノアブロ（Nørrebro）にあるミョルナパーケン（Mjølnerparken）というところがあります。ここは移民の集住地で、かつてはギャング団がいて、殺人事件があったり治安も悪くネイティブといわれるデンマーク人がなかなかアクセスしない場所といわれていました。そこにアートで再開発をというプロジェクトが実施され、現在は人種を問わず老若男女の集まる場所としてよみがえりました。

私も向こうに行くともちろん「移民」の立場なので、デンマーク政府の閉鎖的な法律に意気消沈することも多いのですが、その一方で、移民を支えようとする人たちもいて、そのような人たちの活動に大変励まされます。例えば同じノアブロ地区に「トランポリンハウス（Trampolinehuset）」という難民支援NGOがあります。シリアやアフガニスタン、イラクから来た移民の人、そして難民センターに滞在する難民の大人たちが、自分たち

で色々な学習教室を開催するところです。この写真で先生をしている人は、イラクで英語教師だったそうです。すでにデンマークに10年くらい住んでるんですが、ボランティアとしてここへきて、難民の人たちに一生懸命英語を教える。外国人というとまず英語を喋ることが期待される社会なので、自分たちで自己紹介をしたり、職業の話をしたりして、怪しまれないようにする、という訓練をしています。こんな風に、学びをコンテンツにしながら、自主的な活動をして支え合う、そういう場所になっているところです。

トランポリンハウスでは、週末にパーティーをしたり、みんなでご飯を食べたり、映画を見たりして、時々は広場でスープキッチンを出して抗議活動にも参加します。バナーには “REFUGEES ARE NOT CRIMINALS” とありました。（**写真04**）

このような、NGOの活動に救われます。学びをコンテンツにしながら大人を惹きつけ、自立しようとする人を支える。こんなふうに生涯学習が直接に役立つんだということを、この団体から学んでいます。

写真04　トランポリンハウス

４．通学制国民学校の機能

もう一つ、私が調べている若年失業者対策の、NPOが運営しているダウホイスコーレ（Daghøjskole）という施設があるので、それについても是非お話ししたいです。デンマークには国民高等学校フォルケホイスコーレ（Folkehøjskole）という宿泊を伴うノンフォーマル教育機関があるんですけども、その通学版というもので、就労支援と成人教育を結びつける施設です。1979年に有志のプロジェクトとしてシルケボー（Silkeborg）市に設立されたのが始まりです。18歳以上であればだれでも参加できて、４週間から18週のコースを提供しています。成人準備教育を受けることができ、かつ職業訓練も一緒にできる場所です。日本でいうと夜間中学にプラス就労支援がついているという施設だと思ってください。全国にいま14ヶ所あります。全校に約1500人が在籍しています。11％の若年無業者から考えると決して十分ではないのですが、ガイダンスセンターでのカウンセリングの後、人によってはこのような学校を紹介され、就労支援と学習支援を受けることになります。

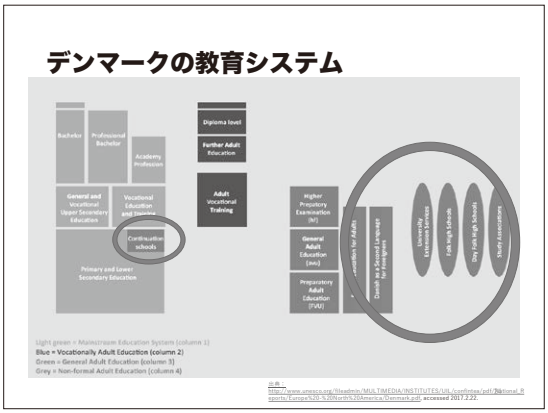
4．通学制国民高等学校の機能

- 通学制国民高等学校(daghøjskole)…デンマークのノンフォーマル教育機関
- 1979年に最初の通学制国民高等学校がシルケボーに設立される
- 18歳以上であれば誰でも参加できる4-18週間のコース。寮はない。 成人準備教育（FVU＝小学校卒業程度、一般成人教育（AVG ＝中学卒業程度）を提供
- 全国に15カ所、1,500人が在籍（2017年8月現在）

スライド22　通学制国民高等学校の機能

デンマークの教育システムは、（**スライド23**を指す）中央より左側が、いわゆる小中高大のフォーマルな学校教育に当たります。それに対して右側が、いろんなタイプのノンフォーマル教育制度です。デンマークには多様な成人教育機関があって、今お話ししているNPO立のダウホイスコーレは、自由な成人教育システムの中に位置づけられています。デンマークの教育システムのユニークなところは、フォーマルな教育以外に多様な教育の場があって、それをみんなが教育システムとして認めているところです。

ダウホイスコーレの法的根拠は「生涯学習法第２部第12章第45条第２項」であり、条文にはデモ

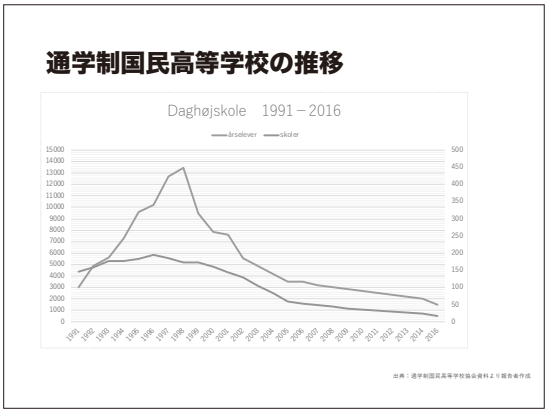


スライド23　デンマークの教育システム

生涯学習法第2部第12章第45条第2項

- 「通学制国民高等学校は、デモクラシーとアクティブシチズンシップの理解を促進し、就労機会を拡大するために、成人に対し、教育的目的のもと、訓練を提供することを目的としている」Folkeoplysninglov, Title II a, Chapter 12, §45（2）

スライド24　生涯学習法



スライド25　通学制国民高等学校の推移

クラシーとアクティブ・シティズンシップ、就労機会を拡大するために訓練を提供する、と書かれています。

数自体は減っています。在籍者数も、学校の数

AFUKs Daghøjskole	Hovedstaden	circus, art, performance
Akademiet Københavns akademi for musik, dans og teater	Hovedstaden	musik, contemporary dance, theater
Daghøjskolen For Indvandrerkvinder	Hovedstaden	for immigrant women
KBH Film & Fotoskole	Hovedstaden	film, photography
Kursustrappen Frederiksberg	Hovedstaden	traditional
Vera Skole for kunst & design	Hovedstaden	art, design
Daghøjskolen Sydvestjylland	Syddanmark	traditional
Byhøjskolen	Midtjylland	music, yoga, photography
Daghøjskolen Gimle	Midtjylland	music, yoga, writing, film
Daghøjskolen i Randers	Midtjylland	traditional
Idrætsdaghøjskolen IDA	Midtjylland	sports
Kompetencehuset - Arhus	Midtjylland	traditional , IT, design, music, jornalism
Daghøjskole		
Daghøjskolen FOKUS	Nordjylland	traditional
Kvindedaghøjskolen	Nordjylland	for women
SIND-Daghøjskole, Aalborg	Nordjylland	For psychologically vulnerable people

スライド26　通学生国民高等学校

も減っています。

でも全国にこれだけあります。これだけ回りました。

オーフス市（Aarhus）にあるコンピーテンスフーゼット（Kompetencehuset）を運営する教員たちは、68年世代の影響を受けた次の世代で、80年代に大学を卒業した人たちです。とくに社会科学を専攻していた人たちの職がなく、ダウホイスコーレを設立した最初のグループの一員だったというキアステンさんによると、「当時仕事がなかったの、わたしに」、だそうです。70年代から80年代にかけてヨーロッパは不況だったので、社会科学を専攻していると仕事がなくて、学校の先生にもなれない人が多かった。そこで、同じ失業者達を集めて、自分たちで学校作ろうとして始まったのがダウホイスコーレだったそうです。キアステンさんという方は文献で名前を目にするいわばレジェンドだったので、実際にお会いした際にびっくりして「あのキアステンさんですね」と挨拶したら、なぜ日本からのゲストが私の名前を知っているのかととてもびっくりされました。

コンピーテンスフーゼットには、建築コースがあります。建築士になるためにはもちろん専門の職業学校に進学する必要があります。ここでは建築士になるわけではなく、まずは建築周りの仕事、たとえば壁を作ったり公園の手入れをします。作曲コースもあります。本当に作曲家になるには、音楽学校にいく必要があります。でもここ

では曲を作ったらYouTubeにアップしてアクセス数をみんなで競い合うとか、街でライブを開催するとかそのようなところから経験します。ITコースがあります。本当に働くためには、各種の資格を取得する必要がありますが、コンピューターが好きな若者たちが自分のスキルがどれくらいなのかを見極めるために来るそうです。保育コースもあります。これも、本当に保育士として働くには専門学校に行って資格とる必要があるのですが、ここでは保育士の補助の仕事をします。この日は教室で、雨の日のアクティビティについてのアイデアを話し合いながら、お茶を飲むゼミのような授業でした。

別の学校では特別なニーズに対応したコースがあります。ソーシャルワーカーやキャリアガイダンスのカウンセラー、フィジオセラピストなど18名の教員がいて、難民のためのコースを提供している学校もあります。この人たちも、その学校ではとりあえず小学校程度の学習を続けて、次のステップに進む準備をします。自治体から送られてくる人もいます。ADHDのためのコースは非常にニーズが高いという話でした。教室の作りを見せてもらいましたが、一人ずつ個別対応ができるように、パーテーションがもうけられていました。

それからこちらが残念ながらなくなってしまったんですが、女性のための就労支援の学校というのがありました。10代で母親になる人のための母親学級です。デンマークは近年、少子化傾向に歯止めがかかりました。それでもデンマークでも第１子を出産する年齢は20代後半から30代前半にかけてだと言われています。その中にあって、10代で母親になるという選択をした人は、未婚でなくても孤立しがちだとのことで、同じ境遇にある女性が知り合いになれるよう、集まる場所として運営されていた学校でした。朝の９時から15時まで、６カ月から24カ月間、出産前から出産後も子連れで通えるようにと設計されていました。授業の内容は個別カウンセリングが中心で、職業訓練として服飾関連の訓練に力を入れていました。EUの補助金を獲得したり、生徒たちが共同でアート作品を作るなど、地道な活動をしていることもうかがっていたのでたいへん残念です。

もう一つの事例です。就労支援としてカフェを運営している学校もあります。（**写真05**）オルボー市立図書館の1階というとても良い立地で、高品質の商品を提供するフェアトレードのカフェを運営し、そこを同時に、支援を必要とする人たちの就労支援の場として運営する学校です。地下の書庫をパン焼きスペースに変えてもらって、接客なんかとてもできないというタイプの若者がパンやケーキを焼いていました。

写真05　カフェ

若者たちはここでのスキルをもって次の仕事場に行くことが可能となります。地下には勉強スペースもありました（**写真06**）。書庫の一角に机があって、ここに成人教育を専門とする先生がやってきて、ネイリストになりたいという女子学生に化学式を教えていました。たしかにネイリストになるには化学の知識が必要ねと話しかけると「そうなの」と得意げに答えてくれました。中学はほとんど行かなかったそうですが、ネイリストになるには中学卒業の資格をとる必要があり、ここで接客の仕事をしながら時々勉強する学校を気に入っているとのことでした。他にもこの学校ではフィットネスジムも運営していて、そこでスポー

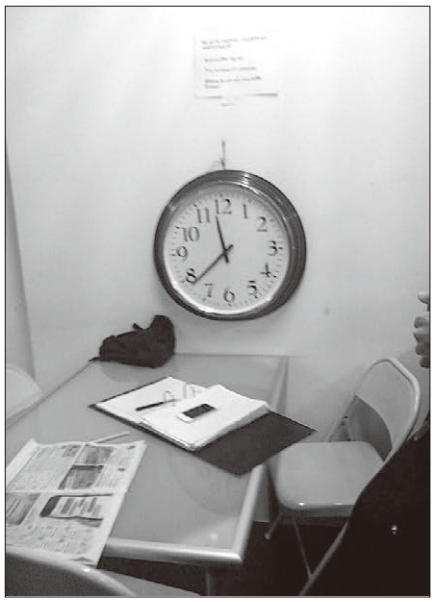


写真06　勉強スペース

ツ好きの若者がインストラクターの仕事を経験していました。

以上が私がデンマークを回って見てきたものです。何が面白かったでしょうか。何が印象に残りましたか。

Qデンマークの取り組みの中で何が一番、印象に残りましたか？

スライド27

Aさん：ありがとうございます。卒業生のAです。私も公民館で仕事をしてますがこういう移民の対策とか、若者対策っていうのは私の公民館では全然やってないので、相当反省しながら今見てるんですけれども、ずーっと見てきた中で、最後に出てきた10代の女性のための学校がなくなったとおっしゃってたんですけど、母親学級、公民館でも家庭教育学級ということで、幼児家庭教育から小学校中学生の家庭教育学級をもってるんですけど、そういう家庭教育学級みたいな母親学級を通して、就労に結びつけてくっていうのが、全然なかった視点なので、とても参考になりました。公民館でやってるのは、子育てどうしましょうとか、子どもとの対応どうしますかとか、そういう話が中心になりがちなんですが、こういう視点があるんだなというのは大変参考になりました。ありがとうございました。

坂口先生：本当にそうですね。ありがとうございます。他いかがですか。

Bさん：質問なんですけど、先ほど言った10代の母親学級なんかやってた学校が閉鎖となってしまったって、そういうニーズが求められているはずなのに、閉鎖してしまうのはやはりコストの問題なのか、利用の範囲の問題なのか、様々問題あると思うんですが、その辺詳しく知りたいなと。

坂口先生：その辺は、私が追加で調査に行かないと実はわからなくて、この前４月に閉鎖したってニュースを聞いたばかりです。この無くなりつつあるダウホイスコーレを追いかけている理由の１つは、いま言ってくださったみたいに、どんなふうに解散していくのかっていうところをもうちょっと見たいと思っていて、次回是非アポイント取って、この団体がどうなったのかを見ていきたいです。ありがとうございます。

5. 結論と考察

・教育のパイプラインの「漏れ」への対応
→ガイダンスセンター＋ノンフォーマル教育機関

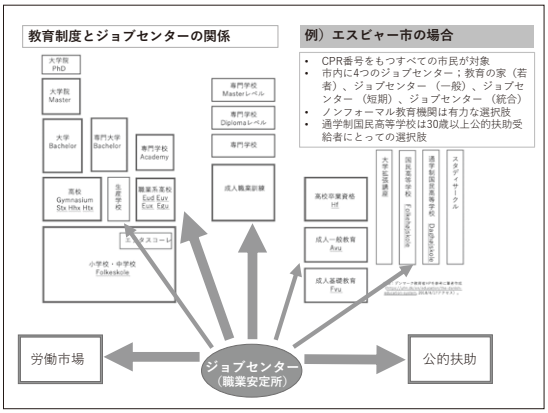
・通学制国民高等学校の機能
→①教育と訓練の準備
→②冷却機能

・ジョブセンター（職業安定所）との連携
→労働市場への＜参加＞

スライド28　結論と考察

５．結論と考察

結局誰がパイプラインをつないでいるのか。恐らく、デンマークの場合だとガイダンスセンター、プラス、ノンフォーマル教育だ、というのが結論です。学校教育だけじゃないという点が、ポイントです。それが可能になってるのは、民間の団体が活動できる補助金、法律、制度があるからだと理解しています。日本の場合、同じように団体は立ち上がりつつありますし、NPO法も整備されています。ただしかなり異なるのが、補助金のあり方ではないかと考えています。多くの自治体が、民間の団体との長期契約を避け、かつ団体の自立を目指すと言って、期間を区切っています。１年から３年という期間が指定されることが多いです。制約が大きいのは、３年目の補助金額が当初の半分に減らされることもある、あるいは団体が普段している活動をそのまま継続しようとしても補助金の申請ができず、何か新しいプロジェクトを始めることが条件とされ、せっかくそれが認められても短期間であることも多い。３年間で社会的課題に結果を出すことの難しさを思うと、あるいは団体が次の人材をどのように育成できるのかを考えると、この補助金の制度には大きな疑問が残ります。しかも３年目にはもらっていた補助金が半額になっちゃって、あとは自立しなさいというスキームが当たり前になっている。３年で自立するのは商業的なプロジェクトでも難しいのに、社会的な取り組みではほとんど無理だと思います。それなのに、補助金をうまくとってくるのがNPO運営のコツだと喧伝されているところも疑問です。その次がない状態で、いったいどうやって人を育てられるのか。その意味では、ご質問くださったように、閉鎖になった学校のその後について知ることは、私にとっても、そして恐らく日本のNPOにとっても参考になると思います。それから、いくつか事例で見ていただいた学校です。このダウホイスコーレという学校は、就労支援を中心とする教育と訓練の場です。夜間中学プラス、就労支援をしています。そうなのですが、同時に、作曲家になりたいと考え高校を辞めた生徒たちが、ダウホイスコーレの授業をとおし



スライド29　教育制度とジョブセンターの関係

てYouTubeに投稿してみるけれども、思ったより閲覧数に伸び悩む。そのような現実を見ながら自分は本当は何をやりたかったのかを考える場所でもあります。半年から１年くらいかけて情熱を冷却させる、そういう機能を担っています。今回お見せしなかったんですが、他にもダンスの学校とかサーカスの学校とかアートの学校なんていうのもあります。サーカスの学校は意外にもプロフェッショナルでそこしかないので本当にサーカス芸人になっていく人たちが曲芸を練習する。パフォーミングアートをするダンスの学校なんかは、定員がごく少数であることもあって、プロフェッショナル志向の人を育成しています。実際に、王立アカデミーやロンドンの劇団に入っていったりする人材が育っています。でもそのような人も、１年かけて、自分がどれだけ能力があるのかを見極めています。実際に、大半の人が、夢に破れるわけです。アーティストになりたいと言って展覧会をしてみたけれど、思ったような反応を得られず、自分は向いていないと気づいたりする。自分は本当はダンサーとして舞台に立つのではなく、フィジオセラピストとしてダンサーを支える方に回るのが向いているのではないか、アーティストと思い込んでいたけれども地元で子どもたちと一緒に放課後活動を進めるのはどうか、コンピュータを使って何かやりたいと思っても、すぐにはできないから自分はそれを準備するサプライヤーの方に入ろうかなっていうことも考

結論

- **社会的統合になぜ「生涯学習」が活用されるのか→ターゲット集団に対する（これ以上の）スティグマ化を回避するため**
- **普遍主義的主流化アプローチ→ターゲット集団に対し「一般市民を対象とする社会プログラムや社会政策を通して（社会的統合に向けて）アプローチしようとすること」(Jørgensen 2014:5)**

スライド30　結論

考察
「普遍主義的主流化アプローチ」が必要とされる理由

① 積極的労働市場政策による労働市場への＜参加＞要請の高まり（1994）

① 後期中等教育中退者対策の焦点化（2007）

② ポピュリズム政治を遠因とする移民に対する義務を強調する収斂モデルの普及（ヨプケ2010=2013）

スライド31　考察

えさせる。ある意味長い職業ガイダンスの期間なんだということがわかりました。それからもう一つ、実はジョブセンター（ハローワーク）と連携をしていて１人、２人、３人「労働者」が誕生するだろうという期待のもとに動いていることも重要です。

デンマークでは、人を育てることをイコール納税者を育てるという言い方をするところです。ジョブセンターの仕事というのは、一人ひとりと話をして、足りない教育を受けさせて条件を満たし、カウンセリングを通してその人のための仕事を作るところです。「わかった。じゃあ週に２日だけ、あなたのための仕事を作ってきます。なにやりたいですか？」と訪ねられます。「自動車修理工場の裏で工具を整理する仕事はどう？」とハローワークの職員が提案し、実際に、その後は自動車修理工場に行き、失業して困っているその人のための週2日の仕事を作るようお願いしてくる。その週2回だけの仕事は「フレックスジョブ」と呼ばれています。週２回でも働ける仕事があれば、その人は週７日依存していた福祉サービスを週５日に減らすことができる。そのような発想です。

結論としては、生涯学習が実に見事に活用されているんです。近隣のドイツとかスウェーデンのやり方を見ながら、デンマークが明確にとってきた戦略なのですが、移民や難民はもちろん差別されることも多いのですが、それらの人たちをターゲット集団にすることを避けて、スティグマ化を回避するために生涯学習という、デンマーク人だろうと何人だろうと、すべての人が活用する学習システムを利用して、自分の場所を見つけていってもらうように導いています。ある特定のエスニシティの人が集住してその人達向けの施策をすることに強く反対しています。これはドイツのやり方とかなり違います。デンマークの社会学者ヨーエンセンはこれを「主流化アプローチ」と呼んでいます。若年無業者であれば、移民背景があろうとなかろうと、一般の人たちが利用する枠組みを利用して、その結果、社会参加を促進される、社会的統合を進めるのがデンマークの方法としては理にかなっているという考えです。

この方法には良し悪しあるとは思います。ただし、非常にナショナリスティック傾向の強い社会においては、もしかしたら有効なのかもしれないとも思います。「フレキシキュリティ」を進め、納税者を作る、労働者を作るというアプローチがあったからこそ、主流化アプローチが受け入れられているのだろうし、後期中退者対策が2000年代後半からずっと焦点化されてきたという事実もあります。政治学者のヨプケは「軽いシティズンシップ」と呼びますが、ポピュリズム政治を遠因として移民に対するうっすらとした危機意識があると、移民が「怖い」と口に出してしまう社会も出てくるわけですが、そのようなことを許容すると「移民」が主流派と別の存在になると指摘しています。デンマークはこれを回避しようとしてい

るのだと思います。

なので、パイプラインをみんなが修理しています。ジョブセンターとか、ガイダンスセンターの人とか、NPOの人が修理をしています。日本でも、佐賀の谷口さんだけではない多くの人がいろんなところで本当は修理をしているはずで、そこにちゃんと安定的な予算と制度が構築されるよう、私としては今後も事実を集めて提言していきたいと考えています。以上です。皆さんご清聴ありがとうございました(注)。

(注)

この講演会の記録は学内学会木島夏海さんによる書き起こし原稿を元に作成いたしました。木島さんに感謝申し上げます。また本講演の内容については、坂口緑、「誰がパイプラインをつなぐのか――デンマーク・通学制国民高等学校の事例」『日本生涯教育学会論集・39』(2018年、23-82頁)をご参照ください。

エッセイ

学生のキリスト教活動と
『チャペル週報』の変遷……丸山　義王

学生のキリスト教活動と『チャペル週報』の変遷

丸　山　義　王*

1　学生のキリスト教活動と宗教委員会の発足

「大学ついに誕生す　学院の新しき出発」(『明治学院新聞』第20号昭和24年２月15日）と告げて、大学スタッフの軸として、村田四郎学長、高橋源次教授（英文学科主任)、若林龍夫教授（社会学科主任)、齋藤茂夫教授（経済学科主任）のプロフィールを挙げている。

そして1949（昭和24）年４月には、新制大学が設置される。これは専門学校の昇格によるもので、英文、社会、経済の３学科より成る文経学部として開講し、新入生は914名であった。この年の『明治学院新聞』第22号（５月21日）では、「期待される各部の動き」のトップに宗教部が挙げられた。「本学院において、長い伝統を持ち重大な責任と使命を担う宗教部は去る13日多数の新入生を迎え深き祈りの内に本年の出発をした。部長には新に齋藤茂夫教授を迎えた外、宣教師バルカー先生はじめ秋元、中島、村上、阿部各先生等多くのキリスト教の指導的教師のもとに活溌な行動を開始することになった。又宗教部は今までのYMCAを明治学院基督教青年會（別称SCA）と改称することになった」と伝えている。なお「第２部にも基督教青年會としての宗教部が別個にあったが、第１部に比べてきわめて伝道的なところに特徴があり、勤労学生であるメンバーのなかから多くの受洗者を生み出した」(『明治学院百年史』461頁）と述べられた。

宗教部発行の明治学院大学第二部「週報」(1957年９月11日№11）には礼拝順序が掲載され、司会田代吉房兄、奏楽秋元先生、奨励竹中治郎先生とある。「生命の書」と題してのコラムがあり、「毎年我が国読書界のベストセラーは、大小種々発売されている聖書で数にして二百万部という。廣くは世界のベストセラーの第一位でもある。一体、これだけ多くの人々が持っていて、そのうちのどれだけが、信者となっているのであろうか。聖書は単なるアクセサリーではない。私達が神の霊感によって書かれた『聖書』を信じつつ読む時に“生命の言”として迫るのである。日々私達は『生命の書』を愛読しよう。」この頃の大学二部の学生の宗教活動は、活溌であり明治学院の宗教活動の歩みに残るものであった。筆者が文学部社会学科に在籍したのは1960年で、その年の４月には、学生自治会常任委員会より『GUIDE FOR STUDENT LIFE』が発刊され、文連会（文化部連合会）のリストが発表されている。その時のクラブは次のようであった。

○E・S・S（総合的な英語学習）○演劇部○文芸部○児童問題研究部○藤村研究会○中国語研究部○洋楽鑑賞部○英文タイプ○経済市場調査研究部○写真部○SCA（基督教学生会）○社会学研究部○放送研究会○哲学研究部○基督教児童教育研究会○同郷人クラブ等16部であった。別に同好会としては21を数え、宗教関係としては、バイブルクラス、英語聖書研究会、ドイツ語聖書研究会等であった。学術団体としては、社会学会、英文学会、経済学会等があり、とくに各学会においては卒業生、教員、在校生の三者で形成されることに特色があり、現在迄も続いている。その他として，応援団、新聞会（『明治学院大学新聞』発行）丘の会（同窓生を中心に文芸雑誌『丘』発行）があった。生活協同組合については、「生協の大御所賀川豊

＊　1963年社会学科卒業・卒業生部会名誉会員

彦先生はじめ、教職員、学生1500名組合員の絶大なる御支援の下に発展し、今日２年数ヶ月を迎えたのである。生協の目的は組合員の出資によって組合員自らの消費生活を守り経済的文化的生活の改善向上を計ることにある」と述べられている。学生の活動は、この頃を原点とし現在に到るのである。

大学設置後の宗教活動は、教職員、学生の有志により自主的に行われて来たが、宗教委員会がキリスト教諸活動の企画、運営に当たることを目的として、正規に発足したのは、1964（昭和39）年４月であり、初代委員長はこの４月から第３代学長に就任した若林龍夫社会学科教授が担当し、初代幹事に秋元徹経済学部教授が選任された。この時点では、種々の宗教活動は、学生が企画して大学が協力するという形で進められていた。そこで、学生の宗教活動の代表が集まって、定期的に会合し、協力して伝道をしなければならないと考え、秋元徹教授に相談したところ、その同意を得て早速実行に移されたのであり、これが1967（昭和42）年の学生宗教活動懇談会の成立であり，現在も続いている。

取り決め事項には、目的は「明治学院大学における宗教活動一般についての各団体間の相互理解および相互協力」であり、構成は、キリスト教学生会（SCA）、キリスト教児童教育研究会、グリークラブ、グレゴリー・バンド、学内祈祷会、平和への祈り実行委員会、聖書研究ゼミナール実行委員会などであった。

その具体的な活動として、この年には修養会が開かれた。「1967年１月５日・６日の両日、軽井沢ニュー・ホシノ・ホテルにおいて教職員約百名が出席して，明治学院の将来を主題に教職員新年修養会が開かれた。今度の修養会を通して、教職員が、お互いにそのテーマであった『明治学院の将来』をともに考えるうえで、非常に適切な催しであったといえよう」（『明治学院大学報しろかね』1967年２月１日）と述べられた。さらに11月１日には盛大な創立90周年記念式典が挙行され、学院校庭を式場に3500名が参列している。「週報」第11号では、11月３日のチャペルでの記念礼拝は、渡辺善太先生（銀座教会名誉牧師・明治45年本学神学部卒業）による「平和への祈り」と報じている。

さらに、1971（昭和46）年５月には、明治学院全体の宗教活動を運営するために明治学院宗教活動委員会（委員長　武藤富男学院長）が発足し、全学院の宗教活動を盛んにする計画がたてられた。

２　徳永清による『チャペル週報』の発刊

1967（昭和42）年４月から約２年間宗教委員会に主事が置かれ、徳永清氏が就任した。徳永は1935年に明治学院に入学、当時の高等学部社会事業科生として、1936年の第二次学生セツルメントのセツラーとして活躍し、1938年３月に卒業、その後松山の第22連隊に入隊、少尉となって1937年７月に始まっていた日中戦争と共に苦難の道を歩むが無事に帰還、1952年に明治学院の職員となる。最初の功績は、1955年に庶務課主任として「スカーレットとシルバーグレイー」を案配したカレッジ・カラーの制作を行ったことであった。作者のことばの終わりとして次のように言う。「スカーレットと白金グレーに一線を画する白い一条の光線も忘れないでほしい。この線こそ、学問への鋭い叡智と限りなき精進を表象したものであるからだ。私は無上の喜びと感謝をこめて、この図案を学院永遠の歴史に献ずることを心から光栄に思っている。」1967年には、宗教委員会に主事が置かれたため就任して、彼の創意により６月５日の第１週からガリ版手刷りの『チャペル週報』が、創刊されたのであった。以下において、当時から今までを繋ぐ具体的な資料であるこの週報を通して、学生のキリスト教活動の歩みを見たい。内容は「今週の礼拝」プログラムを核としてその週の宗教行事や定例集会の案内等をきちんと報じた親しみのある週報なのである。第１号での定例集会は「学内祈祷会」「さんび歌をうたい祈る集い」「平和への祈り実行委勉強会」等であった。６月８日からは「学生礼拝」が発足、基児研が主催し、奉仕はグリークラブであった。

６月12日第２週の奨励者は、久世了（1998年第11代学院長）先生であり、この年の４月に経済学部の専任講師に就任したばかりで、説教は、「人を

生かすもの」（マタイ４：１～11）であった。なおこの週からは、園部順夫オルガニストによる前奏が奨励の10分前より開始されている。当初の礼拝の核となったのは、この年、４月に大学院に社会学専攻・社会福祉学専攻（修士課程）を設置した社会学部の若林龍夫学長であった。

最初の奨励は、「週報」５号（７月３日）における「One thing is necessary ルカ伝10（38～42）」であった。

10月16日の「週報」９号に於いては、渡辺栄社会学部教授の奨励は「入信のころ」であり、そして若林龍夫学長の「宗教週間に寄せて」の最初の投稿が目を惹くのである。

「学生諸君のために、学生諸君の努力によって『宗教週間』の諸行事が行われることは、なによりも喜ばしいことである。いわば学生による学生のための『宗教週間』ともいうべき企画で、これは数あるキリスト教主義大学のなかで画期的なことではないかとほこらしく思うことである」と述べている。10月２日、第１週第７号からタイプ印刷となる。

第11号（10月30日）は「創立90周年記念・特集」であり11月１日（水）朝10時より校庭で式典が行われ、祈祷、若林龍夫先生、式辞、武藤富男先生、祝典行進曲（シンパー）と告げている。

1968年２月には、若林教授が次期学長に再選されている。そして『チャペル週報』は、第22号（４月第２週、1968年４月８日）から『招き』という題名となる。

「チャペル週報・新題名」という手書きの資料が残されいる。

応募者は73名で審査員11名の集計によるもので、「入選『招き』（61点）刈部尊也　佳作１席『尖塔』（46点）２席『鐘塔』（31点）３席『活ける水』（26点）次点『みあしのあと』（23点）」とある。第23号「週報」では、「表彰式は３月23日と４月３日に行われた。入選の苅部君は今春二部を卒業された」と報じている。

1968年５月20日刊行の『招き』第27号では「第３回『宗教週間』の多彩な行事　学生によって５月27日より展開」と告げ、学生宗教懇談会加盟団体の紹介を始めている。この27号では「キリスト教学生会（SCA）は、『聖書に基づいて、イエス・キリストを神とし、救世主として仰ぎ、信仰と生活を通して、その弟子となることを望み、また青年の間に神の国を拡張するために協力する』ことを目的とした会です」と述べている。

第28号（５月27日）では「『天地創造』とグリー」として、「私達グリークラブはキリスト教建学精神にもとづき合唱を通じて音楽技術の向上と共に和の精神を学び、より豊かな人間性を築きあげることを目的とし、神を賛美し、伝道する使命をもって昭和24年に混声合唱団として発足いたしました」と告げている。このクラブは現在も続いている。

第29号（６月３日）では、「児童へ福音を！」と言うテーマで、次のように述べている。「キリスト教児童教育研究会（通称基児研）は『児童に福音を』という事をスローガンとして活動しております。本会の目的は『キリスト教に基づき、児童に伝道をなし、またそのために研究を行うこと』であります」と述べ、さらに部創立以来（今年度15周年）行って来た「土曜学校」の活動を紹介している。

第30号（６月10日）は、グレゴリーバンドの紹介である。「大正５年５月設立。聖歌隊としてスタートし、当時は、指揮者の大塚淳先生をはじめ全員がクリスチャンであったため合唱団の使命を『キリストの聖名を賛美し伝道に奉仕する』ということにおいた。戦後、1959年岡安信先生を迎えて再興し、1960年正式にグレゴリーバンドとして認可された。現在はチャペルオルガニストの園部順夫先生を迎えて創立当時の精神を受け継ぎ日々練習に活動に努力を重ねている」とある。

第31号（６月17日）「真理と自由と『学内祈祷会』」「私たちは毎週月・水・木と集会を持っているわけですが、まず20分になると賛美を始めはじめます。聖歌と讃美歌が終わると一言お祈りをします。次に各自の証しをします。これらは今自分が聖書から教えられていることや、考えていること、また悩みの問題など聞き、話し合います。最後に聖書を読み祈って終わります。水曜日には『聖書研究会』があります。場所は静思の部屋で

す。なお、土曜日９時30分から10時30分までヘボン館の中山弘正先生の研究室を借りて読書会を行っています」とある。「学内祈祷会日誌」（第１回1965年12月９日木曜日）が残されているが、「学内祈祷会の目的は（イ）学内キリスト者の交わりと信仰の確立（ロ）学内救霊である」としている。この学内祈祷会はヘボン聖書研究会の前身である。

第32号（６月24日）「神をおそれ真の『平和を祈る！』」では「知恵を尽くして戦争をなくしたところで、文化的経済的高度発展をしたところで、そこに神の愛と救いがなくては真の平和はありえません。私共は何故生きているのかを考え、何をせねばならぬのかを考え、真の平和に向かって邁進しようではありませんか。平和の祈り実行委員会は各人の魂の平安と現在そして未来の社会の平和を願い結成され今年で三年目を迎えました」とある。

第33号（７月１日）「第二部キリスト教学生会（ⅡSCA）について」では、「本会は、すでに洗礼を受けた者と求道中の者を含めて約50名で運営されています。そして機能的には三つのグループに分かれて活動を行っています。聖書入門グループ、聖書研究グループ、賀川豊彦研究グループがそれです。役員構成のほかにそれぞれのグループにはリーダーが置かれており、具体的な活動はそれらの人たちにまかされています。合同部会が必要なのはこのためですが、今年はじめて年間計画の中に組み入れられた行事なのでその成果が期待されています」と述べられた。

第35号（10月４日）の告知版では「オルガニスト園部順夫氏は、来る10月10日２時、チャペルにて福山瑠美さんと結婚式を挙げられます。新婦は日本福音ルーテル中山教会福山猛牧師の三女で、青山学院短大英文科のご出身。お二人の前途に幸多かれとご祈祷ください」と報じた。園部順夫は、1935（昭和10）年に、父・不二夫、母・房子の長男として福岡県久留米市に生まれた。園部家と明治学院とは縁が深く親子三代にわたって明治学院と拘わっている。祖父丑之介は神学部を1907（明治40）年に卒業した牧師であり、父の不二夫は1933（昭和８）年に高等学部英文科を卒業後、サンフランシスコ神学校に学び、1942年より明治学院に奉職し、キリスト教学を担当した。したがって園部家は親子三代にわたって明治学院と拘わったのであった。なお順夫は1998年、明治学院を定年退職している。

1968年10月８日にはいわゆる「立看撤去・破壊事件」が勃発する。闘うキリスト者同盟の記録「大学の十字架を担え」の10月８日（火）の記録では、「白昼、大学当局の飼犬的応援団と一部体育会系学生の手と足によって暴力的に破壊された」とある。第36号（第３週10月14日月曜日）の夕方礼拝には若林学長は「忍耐・練達・希望」（ロマ５：３～４）というテーマで奨励を行うのであった。1968年11月25日『招き』第42号で徳永清は「病床に祈る」において次のように言う。徳永は、この時「肝臓炎」の再発のために「腹膜炎」をおこし入院手術を受け、見舞客から種々の学院の情報として「全共闘の学生のヘボン館の占拠、大衆団交、学生部の主任が怪我をしたこと」などを聞き、「学院90年の歴史のなかで、どんな時にも途絶えることのなかった『礼拝』が、続けられていることを聞いて、不覚にもわたしの頬に涙が流れた。今日の学院の状況は、病床に隔絶されているわたしには、かいもく見当もつかないが、神の創り給うた学院が、人によってこわされることのないことを信じて、この試練に耐えるために、みんなの祈りがひとつになることをひたすら願っているのである」と述べるのであった。

しかし11月26日には若林学長は疲労のため入院し、天達社会学部長が学長を代行する。

第43号（第１週1968年12月２日）では、久世了専任講師が「わたしと学院」の中で、「いまこの文をしたためている時、学院はヘボン館と本館を占拠・封鎖されるという嵐のさ中にある。学院の将来を危ぶむ声も耳に入る。しかし、91年前の激動期の日本に、御心によって建てられた学院の使命は、決してまだ尽きてはいない。学院にあってわたしは何をなすべきか。想うことの多い毎日である」と述べている。この時12月８日には闘うキリスト者同盟によって、チャペルが封鎖されるのであった。翌1969年１月22日に若林教授は学長に復帰されるが、教会での奨励には参加されることな

く、３月31日には若林教授は学長を辞任されるのであった。なお、徳永清はこの1969年には広報室長となり、『白金通信』第０号を８月１日に出し、９月１日には第１号を創刊した。

1969年11月10日・第66号『招き』では、第６回「宗教週間」において、宗教活動懇談会に属する宗教団体として、「学内祈祷会」の名が見え、「イエス・キリストとの出会いを体験し、神の御言葉である聖書に生かされ、日々の生活の中で、キリストの愛を実践する人になってもらいたいと思います。12時15分から１時まで『讃美と証しの会』（月、火、木）水曜日は１時から聖書研究会があります」と述べている。これは104号へと続く。

1971年４月12日には第100号記念特集が発刊、随想「いちじくの木の下のナタナエル」で和田昌衛学長が次のように言う。「賀川豊彦の自伝的小説『死線を越えて』は、合計400万部売れたというベスト・セラー中のベスト・セラーであるが、そのはじめの部分に『ほんとうのクリスチャンは田舎のいちじくの木の下で神の国を夢見るナタナエルだよ』ということばがある。いうまでもなくそれは、ヨハネによる福音書の１の48に出てくるナタナエルをさしている。（略）賀川は明治学院を出て、やがて神戸新川の貧民窟において、身を挺して神の国の実現に努力した人物であった。田舎のいちじくの木の下において神の国を夢みるほんとうのクリスチャンの生き方は、単に小説の中のフィクションではなかった。私どもの明治学院大学の建学の精神もここに一つの実例を見出し得るであろう。」

第104号（1971年５月17日）では、宗教活動懇談会シリーズ①において、「ヘボン聖書研究会の横顔」として「ヘボン聖書研究会は今から５年前に学内祈祷会という名称で発足しました。数名のクリスチャン達が学内のために、学友が救われるようにと、また相互の信仰生活のために祈り始めたのが、きっかけだったのです」と述べた。このヘボン聖書研究会については、1968年４月「基児研の学内祈祷会が自立し『ヘボン聖研』と名付けられ植え付けられる時に、丁度私はその顧問として働くべく、主に遣わされて明治学院に来た」と中山弘正教授（1994年第10代学院長就任）は「ヘボン聖書研究会の歴史」で語っているが、中山教授のご尽力において大きく発展したこの会は、現在でも「キリスト教活動協力学生団体」として活動を続けている。

第200号は1974年11月18日に発刊され、「『招き』200号を迎えて」ではその終わりに次のように言う。「この週報は通常の礼拝プログラムや信仰理解の一助として用いられるだけでなく、あるグループでは学習会の参考資料として用いているところもある。さらに有益な内容とするため学生諸君のご意見を伺いたい。また、諸君の礼拝感想文や信仰体験、感動した話題などをご寄稿下さい。」

1978年10月16日には第300号が発刊され、次のように述べられた。「（前略）今日に至るまで、途中大学紛争を経過し、学内の他の機関誌が廃刊中断の憂き目に遭遇するような途次でも地道に毎週発行してきた。過去の週報を開いてみると往事の宗教活動の実相が偲ばれる」とある。

1980年５月26日の第343号において、『尖塔』第１集発行が告知された。

「この度チャペル週報『招き』300号発行を記念して、説教・随想集『尖塔』第一集を発刊いたしました。スカイブルーの表紙で上着のポケットに納まるサイズの素適な冊子です。只今教職員、学生の皆さんに無料にて配布しております。ご希望の方は大学宗教委員会室へおいで下さい」とある。第１集「発刊のことば」を第６代大学長、宗教委員会委員長平出宣道教授が次のように述べられた。「本学のチャペル週報『招き』は1967年６月の第１週に創刊号が発行されて以来、本年で13年を経過いたしましたが、この『招き』は前学長若林龍夫先生の在任中、当時の宗教委員会室に勤務されていた徳永清氏の創意によるものであります。（略）これまで発行されましたチャペル週報『招き』の綴りをひも解いてみますと、往時の本大学の宗教活動の模様を詳細にうかがい知ることができますが、同時に大学というアカデミックな環境のもとで各専門分野の研究者のキリスト信仰を通して語られます言葉は、私たち教職員・学生たちの信仰の養いにとりまして、まことに示唆に富んだ、

意義深いものであると思われます。今回の第一号に続いて毎年続刊する所存でありますのでご期待ください」とある。この『尖塔』は『招き』を複刻したものであったため、昭和61年３月15日発行の第７集までで終刊となった。

1980年11月10日の第354号では「サークル紹介」として、グレゴリー・バンド、グリークラブ、ヘボン聖書研究會、第Ⅱ部基督教学生会（SCA）、第Ⅱ部白金福音グループ（SFG）が紹介されている。グリークラブについては「今年、創立32周年を迎える私共グリークラブは、キリスト者の讃美歌を歌う集いから出発いたしました。現在もキリスト教建学精神に基づき、普遍なる物を求めて活動しています」とあり、現在に続いている。

第400号が1982（昭和57）年11月15日に発刊された。金井信一郎教授（元学長）は「“神の業は継続する”週報『招き』400号を迎えて」で、次のように述べる。

「これまでに積み重ねられてきた『招き』は、本学が生み出したユニークな説教集であり、宗教活動記録であるが、そこに示されるものは、福音の広さ、高さ、深さであると共に生きた生命であって、神御自身での御業の一局面をあらわしているものである。」

この時の奨励者は「月　ヘボン聖書研究會　阿部かおるさん」「火　A. Riber先生」「水　グレゴリーバンド　小林幹夫君」「水夜　白金福音グループ　小沢員子さん」「木　グリークラブ　高梨真理子さん」「金　基督教学生会　浅利和彦君」等学生が中心であった。

「招き」第401号（1982年11月22日）には、11月26日金曜の礼拝において、橋本茂社会学科主任教授（1982年４月～1984年３月）が、キリストの死（聖書ロマ　５：１～11）というテーマで奨励を行い、讃美歌（11～555）オルガン前奏（オルガン・ソナタ　メンデルスゾーン）」とある。

1984年４月433号における「宗教活動サークル」では「グリークラブ」「賀川豊彦研究会」「キリスト教学生会」「ヘボン聖書研究会」「Ⅱ部キリスト教学生会（SCA）」「Ⅱ部白金福音グループ（SFG）」が紹介されている。

チャペル週報『招き』は1985（昭和60）年４月８日の第453号より、縦版より横版になり、左表紙には新築され開校したばかりの十字架の輝く横浜校舎教会の姿が掲載されている。一方、横浜校舎においては、1996年12月８日の明治学院教会創立に際して１号を発行している。このようにして、事務上の都合から『招き』は校舎ごとに発行されることになった。内容も簡素となり、白金及び横浜キャンパスにおいての一週間の奨励の内容を告知するだけとなった。

なお、学生の宗教活動については、1999年度から加山久夫宗教部長によって「キリスト教活動ハンドブック」が発行されて、記録されるようになった。「あとがき」では「宗教部では、昨年度まで『シオンのかおり』というチャペルメッセージ集を発行してきましたが、今回内容を見直し、宗教部の活動案内等も載せた新たなハンドブックを発行することになりました」とある。この号の「宗教部活動案内」においては「学生宗教活動懇談会」として、グリークラブ、ヘボン聖書研究会が紹介されている。なお『シオンのかおり』は2010年５月に復刊されている。「1988－98年にかけて宗教部より発行していた奨励集『シオンのかおり』を復刊いたしました。タイトルは旧約聖書の詩篇とイザヤ書に出てくる『シオン』に由来しています。聖なる丘から流れ来る『かおり』をお伝えできればと願っております。（宗教部長　司馬純詩）」とある。2013年度からは「キリスト教活動協力学生団体」として「文化団体連合会」でのグリークラブ、「任意団体」としての「ヘボン聖書研究会」となった。この二つの団体のあゆみを振り返って大切にしたい。

一方で、週報『招き』は、2005年12月26日、1000号の発行に際し、横浜校舎の998、999号は欠番とし1000号で統一することにされた。2006年１月には「チャペル週報『招き』1000号記念号」が発行され、橋本茂社会学部教授（宗教部長1992年４月～1994年３月）が「週報『招き』がキリスト教主義大学の歩みの歴史」という一文を寄せている。「明治学院に勤めるようになって37年となる。チャペルでの奨励を最低年４回してきたとして、約150回

したことになる。ということは、150回週報に私の奨励の案内が出たことになる。どんなテーマで奨励してきたか、振り返ってみたい気もする。しかし、この週報に紹介されていない奨励もあった。私が大学に就職した時に大学紛争が始まり、一時学生の手によりチャペルが閉鎖された。この時は学生によって占拠された教室の中で学生の手によって礼拝が行われ、そこで奨励をした。これは勇気の要る奨励であった。ここでも、私はこの150回の奨励を貫いている私の信仰、『絶対の真理を獲得したのだという人間のうぬぼれこそが最大の罪である』という信仰について話をした。」週報『招き』の発行1000回は、キリスト教主義大学の歩みの記録であるとともに一クリスチャン教師の歩みの記録でもある。

3　明治学院教会の設立と『チャペル週報』

1982年５月には横浜校舎新築工事起工式が行われ、この年10月、教会不在のこの地区において明治学院大学の学生、教職員及び地域の住民への伝道を目指して上倉田キリスト教集会所が近隣の住宅を借用して開設された。開設者は、キリスト教学を教えていた秋元徹経済学部教授、ドナルド・ドラモンド助教授、宗教部職員の三浦正雄氏によってであり、集会所は秋元徹牧師、ドラモンド宣教師によって運営された。その後1985年４月、日本基督教団神奈川教区臨時総会で、上倉田伝道所の設立が承認され、翌年３月17日より上倉田伝道所として活動を開始した。

1985（昭和60）年３月には，横浜校舎定礎礎式・献堂式が行われ、４月には横浜校舎が開校された。『招き』452号までは、縦版であったが、1985年４月８日の第453号より横版となり、表紙ができ、創設されたばかりの横浜校舎の美しい大きな十字架の目立つ教会の姿が映し出されたのであり、横浜校舎の教会の初姿なのである。そして週報には、白金キャンパスと横浜キャンパスでの月曜日から金曜日までの奨励のスケジュールが掲載された。一方上倉田伝道所は明治学院と協議を重ね、1996年12月８日より、横浜校舎礼拝堂において、通称「明治学院教会」として活動を開始した。しかし大学の礼拝堂及び集会室はウィークデイには使用できないため、2003年５月25日には明治学院を離れ、上倉田伝道所として独立をするのであった。そのためこの日、５月25日から単立として明治学院大学内に「明治学院教会」が発足するが、この日の週報の番号は「VOL.Ⅶ－26－339」であり、その説明を次のように言う。

「週報の番号は1996年12月８日の明治学院教会創立時から数えています。Ⅶは７年目を26はアドベントから数えて26週目を（教会歴の１年はアドベントから始まります）、339は創立時からの通番をあらわしています。」この日の主の福音は金井創牧師による「手をつなぎ、胸を張って」であった。

なお1996年の横浜での「明治学院教会」の発足に対応して、「学校法人明治学院牧師（チャプレン）に関する規程」が1995年２月24日において理事会で承認され、「第１条　学校法人明治学院は、建学の精神に則り、福音主義の基督教に基づく教育事業を行うため、学院牧師を置く」として学院牧師の制度を設け、４月には金井創牧師が赴任している。当初は金井牧師が、明治学院教会の牧師を兼任していたが、2006年４月には、金井牧師の後任として、岩井健作牧師が明治学院教会主任担任教師に就任した。岩井牧師は、1933年生。同志社大学神学部卒、同大学院終了の神学博士であり、日本基督教団正教師、広島流川教会伝道師、呉山手教会、岩国教会、神戸教会の牧師を勤め、2005年９月より、単立明治学院教会協力牧師に就任するのであった。

筆者は2008年12月に岩井牧師に洗礼をうけ、明治学院教会に属することになる。なお、岩井牧師のお説教の特徴は「今日の説教、聞き手のために」と言う自作の説教書によってなされるということであり、この教会で手にした説教書は、手許においていつでも再読ができるので、宝物といってもよいのである。そのため、筆者は受洗した年の2008年度の５月18日（114号）から2013年４月14日の309号までのタイトルを書きとどめ一覧表を作ったのであり、114号のタイトルは以下のようであった。「『人格感化の連鎖を』詩篇121編『わが

助けは天地をつくりたまえる主より来る』明治学院教会創立五周年記念礼拝」。

2006年４月学校法人には学院牧師として北川一明氏が就任、岩井氏は正規に明治学院教会主任担任教師となる。そして学校法人明治学院と単立明治学院教会とは９月８日付で、明治学院との「合意書」を取り交わした。この合意書では、「教会が学院の横浜校舎を所在地とし、その聖日礼拝を同校舎チャペルで行うほか、大学の運営に支障がない限り同校舎内外において学生、同窓生、教職員、近隣住民等を対象とする諸活動を行うことを承認する」とした。学生の宗教活動は教会を通して行われ、OBを含む市民と学院関係者への伝道と奉仕を通して明治学院のキリスト教主義教育の完成を助けるという使命を目ざし教会のあゆみが始まるのであった。

2012年11月25日の「週報」には 礼拝説教者としての下村優牧師の履歴が紹介されている。「東京神学大学大学院（組織神学専攻）修了。日本基督教団なか伝道所担任教師、フェリス女学院大学非常勤講師（キリスト教学）を経て、現在教団無任所教師。日本基督教団清水ヶ丘出身」とある。そして2013年４月７日（日）には説教「わたしがここに―イザヤの応答」を下村優教師が行い、同日に牧師就任式が挙行された。一方、2013年４月に岡伸一社会学部教授が、宗教部長に就任している。

2014年３月23日の週報では、「『明治学院百五十年年史』が刊行、明治学院教会について記載」と報じている。「明治学院教会の再建」、「明治学院教会の発足」について、筆者が担当として執筆をした。2015年から2016年までは、明治学院牧師として、和田道雄師が就任されている。なお、2016年４月には、明治学院教会における岩井健作牧師が安中教会へ転籍された。

2017年２月19日の「週報」報告において「先週礼拝後、第34回運営会が集会室において開催、３月末の下村牧師退任表明と承認」と告げられ、３月には、明治学院教会の下村優牧師が退任した。４月には明治学院牧師として北川善也牧師が就任、５月には、明治学院教会協力牧師として、浅原進牧師（明治学院理事・白金教会元牧師）が就任している（「週報」2017年５月7日）。

2018年４月15日の「週報」の報告には、先週の新来者　鈴木みどり日本キリスト教団無任所牧師経済学部卒業生とある。６月３日の「週報」では、６月10日主日礼拝予告（花の日）として説教「聖霊の力」鈴木みどり牧師と告げ、７月８日の「週報」では、聖霊降臨節第８主日礼拝の説教「キリスト的価値観」を鈴木みどり牧師（日本基督団正教師、元茅ヶ崎教会担任教師）がされることを告げている。

2019年３月24日の臨時総会において、鈴木牧師を明治学院教会牧師としての招聘を承認し、2019年４月１日から鈴木みどり日本基督教団正教師を明治学院教会の牧師として招聘することになった。任期は２年間として再任を妨げない。但し、2019年４月１日～９月30日迄は協力牧師として、2019年10月１日からは担任教師（主任担任教師）として招聘するのであった。（議案第１号「牧師招聘に関する件」明治学院教会第20回臨時総会会議案資料）

６月９日（日）の礼拝後に宗教部集会室で開かれた「第21回教会総会並びに６月教会委員会資料」の活動報告においては、次のように述べられた。

「2018年度は私たちの教会にとって、無牧の状況から新たに牧師を招聘するという決断の時となりました。（略）2018年５月からは明治学院大学横浜校舎一期生でもある鈴木みどり牧師を明治学院教会の牧師として招聘することが承認されました。私たちは主の導きに驚き、また新たな教会のあゆみができることを主に感謝します」とある。

鈴木牧師は横浜キャンパス開校時の第一期生であり、明治学院教会は、明治学院の卒業生の牧師とともに歩みを始めるのであり、明治学院教会のあゆみを大切にしたいのである。

〈明治学院の宗教活動略年表 ―宗教委員会発足以降―〉

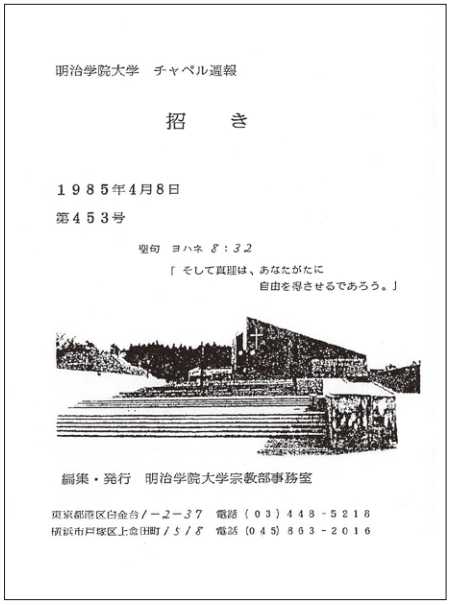
1964（昭和39）年４月　宗教委員会発足、初代委員長に若林龍男学長（社会学科教授）が就任

1966（昭和41）年９月　「明治学院宗教活動委員会」発足

1967（昭和42）年６月　徳永清広報部長により『チャペル週報』（ガリ版手刷り）創刊

1968（昭和43）年４月　『チャペル週報』（第22号４月８日）

が『招き』と改名
週報の新題名募集に応じた第２部社会学科の刈部尊也（1966年２部SCA部長）の名称が入選。10立て看板撤去事件で本館封鎖
1971（昭和46）年４月　「明治学院宗教活動委員会規約」を施行
1980（昭和55）年４月　『招き』300号を記念して、説教・随想集『尖塔』を刊行、第７集迄
1984（昭和59）年４月　「明治学院大学宗教部委員会規定」施行、宗教部委員会設置
文学部新倉俊一教授宗教部長に就任
1985（昭和60）年４月　横浜校舎が開校し、横浜校舎チャペルを設置
チャペル週報『招き』は、1985年４月８日の第453号より、横書きとなり、横浜キャンパスと白金キャンパスの礼拝について並行して記載。
1995（平成７）年２月　「学校法人明治学院（チャプレン）に関する規定」施行
1996（平成８）年４月　社会学部濱野一郎教授宗教部長に就任、金井創学院牧師着任
「宗教活動委員会規約」改正、第４条の委員会委員の拡大
1997（平成９）年４月　横浜校舎に「明治学院教会」発足
1998（平成10）年４月　文学部加山久夫教授宗教部長に就任（2000年迄）
４月　「明治学院宗教センター規定」施行
５月　1988－98年にかけ宗教部発行の奨励集『シオンのかおり』復刊
1999（平成11）年４月　『明治学院大学キリスト教ハンドブック』（宗教部）創刊
2000（平成12）年４月　社会学部 Mark. R. Mullins 教授宗教部長に就任
2002（平成14）年４月　法学部鍛冶智也教授宗教部長に就任
2003（平成15）年４月　「明治学院大学宗教委員会規定」施行
2005（平成17）年７月　国際学部司馬純詩教授宗教部長に就任
９月　明治学院教会主任担任教師に岩井健作牧師就任、退任2016年４月
2006（平成18）年１月　チャペル週報『招き』1000号の発行
４月　明治学院牧師北川一明就任
2012（平成24）年11月　明治学院教会牧師下村優就任、退任2017年３月
2014（平成26）４月　社会学部岡伸一教授宗教部長に就任
2015（平成27～28）年　明治学院牧師和田道雄就任
2017（平成29）年４月　明治学院牧師北川善也就任
５月　明治学院教会協力牧師浅原進就任
2019（令和１）年10月13日　明治学院教会牧師に鈴木みどり就任、司式和田道雄牧師


明治学院大学　チャペル週報

招　き

１９８５年4月8日
第４５３号

聖句　ヨハネ 8：32
「そして真理は、あなたがたに
自由を得させるであろう。」

編集・発行　明治学院大学宗教部事務室

東京都港区白金台1－2－37　電話（03）448－5218
横浜市戸塚区上倉田町1518　電話（045）863－2016

卒業生インタビュー

何事にも全力で取り組む
—社会調査士資格を取得した岩本菜穂さんにお話を伺う—……木島　夏海／石原　英樹

非日常をプロデュースする
—ホテルスタッフとして旅行事業を見つめる関留奈さんにお話を伺う—
……伊藤　小春／石岡里佳子

興味があることは挑戦してみる
—お笑い芸人として活躍する横井あかりさんを訪ねて—
……石岡里佳子／大川　恭子

学生時代の経験が大切
—旅行会社に勤務している谷川まりのさんを訪ねて—
……赤木小百合／佐俣　朱理

AIにはできない、人にしかできない仕事
—報道ディレクターとして奔走する小﨑亮輔さんを訪ねて—
……佐俣　朱理／西岡　晴菜

挑戦してみることの大切さ
—社会調査士資格を取得した青木海さんにお話を伺う—……木島　夏海／石岡里佳子

手当たり次第に飛び込んでみる
—留学生の日本語教育事業に携わる吉村悠さんを訪ねて—……石岡里佳子／石川　真衣

福祉の現場からジャズシンガーへ
—シンガー結城章子さんに大学時代とお仕事について伺う—……佐俣　朱理／伊藤　小春

インタビュー

何事にも全力で取り組む

――社会調査士資格を取得した岩本菜穂さんにお話を伺う――

面談者
岩本　菜穂（2019年社会学科卒業）［写真中央］
※プロフィールは本文後ろに記載

取材・構成・編集
木島　夏海（社会学科2年）
石原　英樹（社会学科教授）

インタビュー日時：2019年7月14日（日）
13時半～15時半

場所：喫茶室ルノアール新宿南口ルミネ駅前店

今回インタビューをさせていただいたのは、株式会社ニューアド社という広告代理店に勤務されている、岩本菜穂さんです。現在のお仕事や学生時代についてなど、様々なお話を伺いました。

―現在どのような仕事をされていますか

私はニューアド社という広告代理店に勤めています。広告といっても一口に扱う媒体が様々ありますが、弊社は特にSP広告をメインに取り扱っている代理店です。特に創業当時から取り扱っている交通広告は、弊社の強みのひとつです。交通広告とは多くの人が交通機関で移動する際に目にする広告のことです。具体的には駅や電車、バスの中にあるポスター、駅看板、電車内のドア上などに設置されているデジタルサイネージも交通広告に含まれます。また、屋外広告と呼ばれる「○○まで○km」という道路上にある看板も交通広告のひとつです。

このような広告は、お客様からデザインや現物を頂いて広告を掲出することもありますが、社内にデザイナーも常駐しているので、ゼロベースから広告を制作することも可能です。また、弊社は代理店ではありますが、制作の自社工場も持っているので制作会社としての一面も持っています。他の業者さんを介したりせずに、自社内だけで制作から掲出まで行うことができるのも弊社の特徴のひとつです。

私が所属している部署は新規のお客様をメインに「プロモーションプロデュース」を行う部署です。SP広告がメインにはなってきますが、ときにはラジオ広告や地方のテレビCMなど、お客様にあったプロモーションをプロデュースするためにマス媒体の広告も扱ったりもします。

具体的な仕事内容は、お客様が「何をしたいのか、何を悩んでいるのか、広告を打つにあたってどのようなゴールを目指しているのか」をヒアリングした上でソリューションにつながるプロモーションを考えていきます。例えば、「明治学院大学をブランディングしたい」という内容だとしたら、最寄り駅の品川駅や戸塚駅をはじめ多くの人の目に留まる広告を打つことを提案します。でも、「明治学院大学に入学者を増やしたい」というお話だったら、高校生に向けた広告を展開していく必要があるので、品川駅や戸塚駅だけに広告を出しても効果はあまり期待できないんです。そういったときは高校生に見てもらえるようなSNSでの広告や、高校前で配るサンプリング広告を考えて提案していきます。このようにお客様の目的に合った広告をプロデュースし、提案していくことが私の所属する部署での仕事です。

—その仕事を選んだ理由は何ですか

「人の人生にきっかけを与える仕事がしたい！」と思い、この仕事を選びました。私は人が何か行動をする時にはきっかけが必ず存在すると思っていて、パッと思いついて行動することがあるとしても、そこには何かしらのきっかけがあると思うんです。私は広告や宣伝はきっかけを与えられるツールのひとつだと考えていたので、そういった意味で強く惹かれていました。

例えば、どこかイベントや旅行に出掛けるとき、行ってみたいと思う“きっかけ”が、駅にあるポスター広告や、SNSの広告だったりすることがあると思うんです。いまだと東京オリンピックの広告をよく目にしている方も多いと思うのですが、マイナーな競技でも「観てみたい！」と思うのは、その広告がきっかけだったりしませんか？もしかしたら、その広告がきっかけで実際に競技を始めてオリンピック選手に…なんてこともあるかもしれません。

このように人の人生に何かしらのきっかけをつくる仕事がしたいという思いから広告業を選びました。

—大学時代について教えてください（どのような学生だったのか/授業・サークルに関して）

「何事も全力」な学生でした。中途半端にやることが嫌いで、アルバイトもサークルも大学も遊ぶことも、やるならちゃんとやりたい精神でスケジュールびっちりの日々を過ごしていました。

アルバイトでは資格も取得をしました。学生では珍しいランクに上げていただいたのですが、頑張ったという意識はなくて…。たとえアルバイトでも、とにかくしっかりとやっていないと気が済まなくて、ただその結果が良い評価につながったというような認識なんです。

愛好会バドミントン部というサークルに所属していたときも、サークルなので自由参加なんですけど、休んだりするのがすごく嫌で基本的に参加するようにしていました。試合に参加してもらおうとしたり、応援に来てもらおうとサークル員には結構うるさく言ったりしていたので、かなりウザかったと思います（笑）。サークルの運営に関しても全力投球でした。

ゼミナールでは、真面目な方ではなかったかもしれませんが、サボったり途中で投げ出すようなことはしませんでした。4年生になると就職活動と被ってゼミに来られない人が何人か出てくるんですが、私はどうしても被らせたくなくて…。面接時間をずらすなど、工夫をして毎週ゼミに行くようにしていました。授業でもみんなで楽しく学べるよう、コミュニケーションを積極的にとるようにしていました。

「何事も全力」だった結果、1日中暇な日がほとんどなかったので、周りからは「疲れないの？」と言われることも多かったのですが、私自身好きでやっていたことだったので、苦ではありませんでした。毎日すごく楽しく充実した学生生活を過ごしていました。

—社会調査士の資格を取得して役に立ったことはありますか

社会調査士の資格は、学生時代では就職活動と

社会学について話すときに役に立ちました。はじめは「就職活動する上で話せる資格がひとつでも多くあったらいいな」という気持ちもあって、社会調査士の資格に興味を持ちました。資格を持っていれば「社会学部って何をするの？」という質問に答えられると思い、取得することにしたのです。入学前は社会学が何をする学問なのか自分でもよくわかっていなかったので「社会学は社会学だよ」と返すことが多かったのですが、資格を取得して“社会学の使い方”を説得力のある言葉で伝えることができるようになりました。基本的に資格は大学の勉強とは別に自分の時間を割いて勉強をして、試験場に行って試験を受けなければ取得できないものですが、社会調査士は大学の授業のひとつとして単位を修得できれば取得できる資格なので、そういった意味でとてもお得な資格だと思います。

私は鬼頭先生の実習で「大学生の学習意欲は低下するのか？」というテーマで新入生を対象に調査をしたのですが、調査方法や結果の話は就職活動での面接でもかなり興味をもって聞いていただけることが多かったです。

また、私みたいな広告業だと「この場所はこのような人に見てもらいやすい」といったマーケティングの部分が大事だったりするので、社会調査士の調査の部分を活かしていけるかもしれません。私自身はまだ入社して間もないので、業務上で実際に社会調査士の資格が活きた場面はあまりありませんが、マイナスになっているようなことは絶対にないです。もしかしたら、もう既に自分が気づいていないところで役に立っていることがあるかもしれません。

—在学中に力を入れておいた方が良いことはありますか

ありきたりかもしれませんが、とにかく色んなことに挑戦してやってみることが良いと思います。それもただ単にやるのではなく、振り返ってみたときに理由付けができると良いと思います。「なぜ自分はそれをやるのか？」、あるいは「なぜ自分はそれをしたのか？」ときちんと言えるようになると、自分自身のアイデンティティも知ることができると思います。すべての行動には何かしらの理由があると思うので、その理由をきちんと自分の中で確立させて説明できるようになると良いと思います。就職活動でも「なぜ？」と問われることが多いので、根底に芯をもっておくと言葉に説得力が増すかもしれません。

—最後に社会学部生に向けてメッセージをお願いします

自分が学生時代にもっと頑張っておけばよかったなと思うことは、レポートや課題です。なので現役の皆さんには頑張って欲しいです（笑）。卒業論文は特にそう思います。自分は執筆に火が付くのが遅かったので、はじめから計画を立ててしっかりとやっていれば、もっとクオリティの高い論文になったかもしれないと思ったりもするので…。皆さんは計画的に頑張ってください！

あとは、とにかく学生生活を楽しんでください！大学生にしかできないことを楽しむ！勉強、アルバイト、遊び、色んなことをしながら全てを楽しむ能力を身につけておくと社会人になっても楽しく過ごすことができるのかなと思います。

プロフィール（岩本菜穂）

2015年　明治学院大学社会学部社会学科 入学
2019年　明治学院大学社会学部社会学科 卒業
2019年　株式会社ニューアド社 就職

インタビュー

非日常をプロデュースする

――ホテルスタッフとして旅行事業を見つめる関留奈さんにお話を伺う――

面談者
関　留奈（2019年社会学科卒業）［写真右］
※プロフィールは本文後ろに記載

取材・撮影
石岡　里佳子（社会学科2年）

取材・構成・編集
伊藤　小春（社会学科2年）

インタビュー日時：2019年8月22日（木）
10時～11時

場所：明治学院大学パレットゾーン

今回インタビューさせていただいたのは、山梨県のホテルでスタッフをされている関留奈さんです。現在のお仕事の内容についてお話を伺いました。

―どんなお仕事をなさっているか教えてください。

山梨県にあるホテルのフロントとレストランのスタッフをやっています。

私は総合職として採用されていますが、教育配置という形で1年目はみんな本社から現場に派遣されることになっていて、今はホテルに配属されています。

ホテルでは最初の３ヶ月間はフロント業務をやらせていただき、後半の3ヶ月間はホテル内にあるレストランのホールスタッフをしています。

―どうしてホテル業を選んだのですか。

本当はホテルの仕事をやりたくて今の会社に入ったわけではないんです。

私の勤めている会社ではレジャー施設の運営や交通事業、宿泊事業など色々な事業をやっていて、ホテルの仕事がやりたくて選んだというよりは非日常空間を作るお仕事がしたくて旅行関係の仕事を選びました。

―お仕事で大変なことややりがいはありますか。

富士山が近いので外国の方がとても多く、英語や中国語には苦労しています。特に中国語はわからないのでジェスチャーを使って工夫しています。

—ホテル業界は忙しいと聞いてきたんですが、どうでしょうか。

特にお盆期間や夏休みの期間は忙しくなります。

—私もホテルのレストランでアルバイトをしているんですけど、サービスが結構大変じゃないですか。結構そういうのが大変だったりするんですか。

ホテルのレストランは少し値段が高いので、VIPのお客様も多くいらっしゃるので言葉遣いや所作など難しいなと思います。

—ありがとうございます。大学時代ですが、どうして社会学部の大学へ来たんですか？

進学する時にすごくやりたいことが決まっていなくて、幅広く学べる学部がいいなと思い社会学部を選びました。

—サークルとかやられてましたか？

サークルはBreakJamというダンスサークルに所属していました。

—ダンスは前からやってたりしたんですか？

ダンスは小さい頃からやっていて、とても好きです。

—サークルは友達の輪を広げるとかの目的でサークルに入ろうとは思っていたんですか？

そうですね。大学はクラスがないので自分の居場所のようなものが欲しくて、どこかのサークルには入ろうと思っていました。

—ゼミとかって入りましたか？

卒論は書きませんでしたが３年生の時に鬼頭先生のゼミに所属していました。

—ゼミではどんなことをやっていたんですか？

ゼミではコミュニケーションについて興味があったので、外国人と日本人の初対面におけるコミュニケーションの違いを調べました。

—今の仕事につながっている感じはありますか。

外国人のお客様と関わることが多いので繋がっていると感じます。
価値観や性格などどうしても違うところが沢山あって、正直苦手だなと思うこともあるんです。でも大学時代に勉強したことで、違いを知って理解しようとすることが大切だと思えました。また毛嫌いをしないでコミュニケーションをとってみようと思うようになったので、直接的かはわからないですが活かされている部分もあると思います。

—大学時代で印象に残った授業はありますか。

ゼミに入っていたということもありますが鬼頭先生の授業が１番好きでした。
人間関係や恋愛など社会心理学を扱うことが多くてとても面白かったです。

—昔から人との関わりとかそういうのが好きだったんですか？

人間関係で悩むことが多かったので関心があったんだと思います。
どうしてうまくいかないんだろうということが知りたかったからかもしれません。

—お話が前に戻ってしまうんですけど、人との関わりで悩みが多いと言っていたじゃないですか。ホテルって結構接客ですよね。

そうですよね。でもバイトも接客をしていて接客自体はそんなに嫌いじゃないんです。色々な人

と喋ることはとても好きなので接客も好きなんだと思います。

—在学中力を入れておいたほうがいいことはありますか。

社会人になった人の殆どの人が思っていると思うんですが、大学時代の時間は本当に貴重で大切です。毎日ダンスの練習をしたり、沢山旅行に行ったり、人生でこんなに自分のために時間をかけてあげられる時期は本当にないと思います。なので自分の好きなことをなんでもやったほうがいいと思います。勉強はもちろん大事ですがそれ以外でも興味があることがあればドーンとそれに時間を費やしてやってみるのがいいと思います。

—再び話がちょっと戻っちゃうんですけど、就活のことをお聞きしたくて。今2年生で、就活のことを考えているんですが、関さんは最初から非日常を作る仕事って思ってやってたんですか？

早いですね！でも私も同じぐらいの時期にサークルを引退して、自分の好きなことやできることはなんだろうと考え始めました。

私は劇団四季や宝塚歌劇などのミュージカルやディズニーが好きで、その共通点は非日常を味わえることだと思い、そこからレジャーや娯楽、旅行などの分野に強い興味を持ちました。その頃バイトを変えて劇場とダンススタジオで働き始めました。

—もうバイトの段階から興味のある方向に。

色々やってみたんですけど特に飲食などは向いていなかったようで辞めてしまったんです。そういう理由もあって変えました。あとは漠然と就活でも言えるような経験をしなきゃと思っていたことは確かです。

—インターンシップはどうでしたか？

インターンはうまく行っていた友達は３年の夏に行っていました。私は長期のインターンは選考で落ちてしまって１日だけのインターンに参加していました。

でもインターンで落ちたおかげで自己PRを見直したりエントリーシートの表現を見直したりするきっかけになりました。それは本番の就活でも役に立ちましたし、３年生でやっておいてよかったと思いました。

—インターンで準備段階の面接とかから役立ったりするんですか。

そうですね、面接は場数が大事だと思います。すごく緊張するので慣れていないとうまく伝えられなかったりしてしまいます。

周りでもアンテナを高く張って早く準備して行動している人は、決まるのも早く、いい会社に就職が決まっていたように思います。就活は早い方がいいですね。

—インターンってキャリアセンターとかからですか？

私はネットのマイナビやリクナビなどから応募したり、企業のホームページから応募したりしていました。でも4年生の時はキャリアセンターで興味のある企業に就職しているOBOGの方の連絡先を教えてもらって連絡していました。連絡がつく方とつかない方はいますが実際に話を聞けるのはとても良かったです。

—自分の好きなことにはどんどん挑戦して行くことが大事ですか？

できればそうだと思います。もちろんしっかり調べることは大事ですが勢いも大事だと思います。タイミングを逃すと大学生活なんてすぐ終わってしまいますしね。

挑戦して失敗したら仕方がない、大学生の失敗はきっと大したことないと思うんです。

―就活で大事にしていたことってありますか？

私が受けたところに共通していたことは非日常空間を作っているということです。物を作るというよりも非日常空間や場所を提供しているところを選んで受けていました。

―現在の仕事で今レストランスタッフをやっていて苦手とおっしゃっていたじゃないですか。今後は何をやりたいですか。

今勤めている会社は幅広く事業を展開していて、やろうと思えばお客様の旅行を最初から最後までお手伝いすることができるんです。それはとても素敵なことだなと思っています。

なので今はまだ無理ですが、ゆくゆくは交通とレジャー、レジャーとホテルなど様々なものを組み合わせたプランを考えてお客様が家を出てから帰るまでの全てをプロデュースできたらいいなと思っています。

―では最後に、社会学部生にメッセージをお願いします。

繰り返しになりますが、今の大学生活を本当に大事にしてほしいなと思います。

社会人になって働くと自分のやりたいことではないこともやらなければいけないし、それにかなりの時間を取られます。なのでなんでもいいので自分のやりたいことを全力でやった方がいいと思います。全然役に立たないと思ったことも、後々役に立つこともあるので好きなことを沢山やってみたらいいと思います。それが正しいかは分かりませんが、個人的にはそれが1番伝えたいことです。

プロフィール（関　留奈）

2015年　明治学院大学社会学部社会学科 入学
2019年　明治学院大学社会学部社会学科 卒業
2019年　レジャー系会社に入社

インタビュー

興味があることは挑戦してみる

――お笑い芸人として活躍する横井あかりさんを訪ねて――

面談者
横井　あかり（2019年社会学科卒業）［写真左］
※プロフィールは本文後ろに記載

取材・構成・編集
石岡　里佳子（社会学科2年）
大川　恭子（社会学科2年）

インタビュー日時：2019年8月17日（土）
10時～10時40分

場所：中目黒駅前カフェ

今回インタビューさせていただいたのは、「フタリシズカ」の横井かりこるとして活動されている横井あかりさんです。お笑いと学業を両立していた大学生活などについてお話をお伺いしました。

―現在どのような仕事をしていますか。

現在お笑い芸人の仕事をしています。仕事の内容は、テレビに出演したり、ライブに出演したり、営業を回るということをして、人と関わって笑わせるような仕事をしています。

―その仕事を選んだ経緯を教えてください。

申し訳ないのですが、嵐に会いたくて……やりたいなと思ったのがきっかけです（笑）。でも、高校のときは文化祭とかイベントの時に前に立って人のことを笑わせることをけっこうやっていて、大学ってけっこう自由な場じゃないですか。それでなにかやってみようと思って、思い切ってワタナベ（ワタナベエンターテインメント）の養成所に入ったというのがお笑い芸人になるきっかけですね。

―昔から芸能界に憧れがあったのですか。

いや、逆に全然親にテレビを見せてもらえなくて。親が牧師でちょっと厳しくて。なので芸能界とかそういうキラキラした世界は夢のようで、逆に憧れになりましたね。テレビ見ていなかったので友達との話も全然合わなかったですね。でも、お笑い芸人でテレビを全然見ていなかった人っていないので、そこは目立てるのでよかったと思い

ますね。

—芸能人に会うというのは他の形でもできると思うのですが、そこでお笑い芸人にした理由はあるのですか。

お笑いって自分の苦手なことを笑いにできるんですよ。例えば、絵が下手だったらそれを笑いにできるじゃないですか。私はあまり得意なものがなかったので、自分の不得意を活かしたいなと思ってお笑いを選びましたね。

—仕事のやりがいはありますか。

自分が頑張ったことが直結で反応が返ってくるのがやりがいですね。あとは、友達とか家族から見たよという連絡がくるとやっていてよかったなーと思います。

—やっぱり身近な人からの反応って嬉しいですよね。

そうですね。目に見えて反応しているのが分かるのが嬉しいですね。

—TwitterとInstagramもやっていますよね。そういう反応も見ますか。

はい、やっていますね。コンビ名がフタリシズカというんですけど、コンビ名で検索して、エゴサーチっていうんですけど、そういうのをやって二人で喜んでいますね。厳しい意見はまだ今のところなくて、そういうのがあるっていうことは売れているっていうことなので、そこは考えていくところですね。

—お笑い芸人をやっていて苦労することはありますか。

それは、めちゃくちゃあります。逆に苦労しかないかもしれないです。一瞬笑わせるためだけにめちゃくちゃ苦労しなくてはいけないっていう苦労がある職業だと思います。

—ネタを作るときと人に披露するのとではどちらの方が苦労しますか。

ネタを作るのは長い時間がかかるので大変なんですけど、私は考えたりするのが好きなタイプなので舞台で披露する方がどちらかと言うと苦手です。やっぱりめちゃくちゃ緊張します。大学でも大教室での授業ではあまり発言をするほうではなかったです。でも、ゼミとかでは自分の考えを持ったら言うようにはしていました。自分の考えを伝えることからスタートだと思うので発言することは大事だと思います。

—憧れだった嵐には会えましたか。

会えました。目の前で鼻リコーダーをやらせていただいて。もう会えてしまったんですけど、もっといろんな人に会ってみたいなという意欲は湧きましたね。

—お笑いの仕事は自分でどのように活動していくか決めていくことが出来るのですか。

そうですね。マネージャーから仕事がきたりするんですけど、ライブとかは自分で単独とかできるし、YouTubeとかもやろうと思えばけっこう自由にできますね。

—今後どのように仕事をしたいと考えていますか。

今は割と現在やっているお笑い番組をけっこう一周した感じなんですよ。テレビじゃ生きていけないというのは分かっているんですけど、爆発的に人気になる人もいて。私たちの場合はネタで売れていきたいと思っているのでライブをして稼いでいくために、まずライブに人を集めるためにテレビにも出るという方法も考えていかなければいけないなと思っています。

—ここからは大学時代についてお聞きしていきたいと思います。まず、明治学院に入った理由はありますか。

高校の頃は、お笑いに入りたいと思っていなくて、養成所に入ってからお笑い芸人になりたいと思っていたんですね。なので、最初はイベントプランナーとか楽しい企画を考えるという仕事をしたかったので、それで社会学部は人とのつながりやそういうことを学べると聞いて受験しました。

—大学時代はどのような学生でしたか。

大学時代は、周りからは忙しいと思われていましたね。私の中では両立が大変で授業に出れなかったこともあったし、でもサークルには入っていましたね。割と挑戦している方ではあったのかなと思う学生でしたね。

—友達には自分はこういう活動をしているということは言わなかったのですか。

１年生の秋から養成所に入ったんで、周りには言わなかったですね。周りから見るとただサボっている奴でした。

—養成所はどのように通っていたのですか。

まず、オーディションを通過して入学して、毎日コース、土曜日だけ日曜日だけコースなどいろんなコースがあって、私は土曜だけのコースに通っていました。欠席を絶対にしてはいけないというルールがあったので、休まずに１年間通いました。でもワタナベは学業を優先してくれるところだったので、うまく工夫して卒業できるようにはしてくれました。卒業後は事務所に所属するためのオーディションがありました。実際に芸人になれるのは100組いたとしたら10組以下くらいですかね。少ないですね。

—何のサークルに入っていたのですか。

Musik Spiel（ムジークシュピール）っていう、Mスピです。アカペラサークルです。アカペラって少人数でやるじゃないですか。なので活動とか自分たちがやりたいときにやるっていう点で融通が利くっていうだけでやりました（笑）。

—歌が得意だったから選んだという訳ではないんですね。

全然歌は得意じゃなくて、ボイパ（ボイスパーカッション）をやっていました。それで、芸にあるリコーダーボイパというのをできるようになりました。だからやっててよかったなーと思っています。

—印象に残っている授業はありますか。

ゼミはやっぱり思い出に残っていますね。坂口ゼミと斎藤ゼミに入ってました。４年の時は５人くらいしかいなかったですね。お二人ともすごく理解のある先生で、私がお笑いやっているという

のを分かっている上で、お笑いをやっていく中で大事なことというか、お笑いでも役に立つ社会学っていうのを教えてくれたりしたのでありがたいと思ってました。

—ゼミではどのようなことを学んだのですか。

ゼミではまちづくりとか、地域との関わりとか環境とコミュニティコースだったので、そういうことについて学びました。４年の時はけっこう卒論にかけていたので、卒論に没頭という感じでしたね。

—両立で忙しいのに卒論も書いたんですね。

そうですね。正直単位が足りなくて取ったというのもあるんですけど、卒論って形にのこるじゃないですか。今後もどのような卒論を書きましたかっていうことをお笑いでも聞かれるんですよ。その時の証明が欲しいなと思って。「現代のモテる女性について」という卒論を書きました。

—大学で学んだことがどのように仕事に活きていますか。

社会学とは違うんですけど、心理学で。けっこうそれがネタに活きたというか、恋愛のネタでつかえたりしました。社会学の授業だと、普段自分が人とどう関わっていくかというのに役に立っていると思います。全部手につけたことは役に立っていると思いますね。Mスピもそうですし、サークルの友達もライブに来てくれたりとか。割とやったこと全部やって後悔したことはないですね。

—大学とお笑いの両立って大変だと思うんですけど、辞めたいと思ったりしなかったのですか。

そうですね、大変ではあったんですけど、一度手をつけたことって辞められないので、大学時代に辞めたいと思ったことはないですね。授業とかでもこれ諦めようかなとなったことはないですね。もったいないなという感覚がけっこう大きくて。ここまでやったのにここで辞めちゃったら全部無駄になるなと思って。

—大学時代にやっておけばよかったと思うことはありますか。

めちゃくちゃありますよ。目に見える資格は取っておけばよかったなと思いますね。資格ってやっぱりお笑いだけじゃなくて就職するときもこういうことできますって言えるじゃないですか。なので、なにか資格はとっておいたほうがよかったなと思いますね。友達とかは世界遺産検定を取っていて、面接とかで印象に残そうとしていましたね。でも、普通にTOEICとかは持っていても損はないと思いますね。

—３年とか４年になると周りが就活をすると思うのですが、その時は…？

でも、私も就活したんですよ。経験しておこうと思って。

—そうなんですね。どういう系の職にしたのですか。

本当に自分が興味のあったブライダル系とか、遊んでる訳ではないんですけど、なにかエピソードとして話せるようなサンリオを受けてみたりはしましたね。インターンシップも行きました。２年生の時に興味のあったブライダルのインターンシップに行きましたね。３、４年はちょっと忙しくて行けなかったんですけど。

—就活する面でインターンシップに行ったことがプラスになったことはありますか。

まず、行ったということがプラスになりますし、やっぱり専門的な事とか、ブライダルだったらブライダルの知識とか。専門的な知識をあらかじめ持っていると面接のときに答えやすいとかは

ありますね。興味がある職のインターンシップは行って損はないと思いますね。

—ブライダルにはなぜ興味があったのですか。

単純に結婚式に憧れがあったからですね（笑）。

—お笑い芸人のときもそうでしたが憧れとか目標から仕事を選びたいということですか。

そうですね。自分は本当にバカなので、昔から興味がないことはできないんですよ。でも、逆に興味があることはいくらでもできるので、自分の興味がある範囲で選びたいですね。

—大学を卒業して大学生のうちしかできないと感じたことはありますか。

自分で選択することですね。今はやろうと思ったら、お金と時間が許さないと思うんですけど、本当に大学の時代はなんでもできるのでそういうことですかね。大学だったらなにをしてもそういう選択をする人だと思われるだけでそんなに怒られないと思うので。

—大学の在学中にやっておいた方がいいことはありますか。

資格を取ることだったり、人との関わりはもっておいた方がいいなとは思います。後々助け合うこともあったりするので友達を多く作っておくのがいいと思います。クラスとかもないのでサークルは入っておいてよかったと思いますね。

—最後に在学生にメッセージをお願いします。

本当に何でも自由にできる時間と空間で、やらなきゃよかったと思うことはないと思うので、自分が興味あることはなんでも挑戦してみることが大事かなと思います。あとは、単位は早めに取っておいた方がいいと思いますね。

プロフィール（横井あかり）

2015年４月	明治学院大学社会学部社会学科 入学
2015年10月	ワタナベコメディースクール養成所 入学
2016年10月	ワタナベコメディースクール養成所 卒業
2016年11月	株式会社ワタナベエンターテインメント所属
2019年３月	明治学院大学社会学部社会学科 卒業

インタビュー

学生時代の経験が大切

――旅行会社に勤務している谷川まりのさんを訪ねて――

面談者
谷川　まりの（2017年社会学科卒業）［写真右］
※プロフィールは本文後ろに記載

取材班
赤木　小百合（社会学科2年）
佐俣　朱理（社会学科3年）

構成・編集
赤木　小百合（社会学科2年）

インタビュー日時：2019年7月29日（月）

場所：明治学院大学白金校舎

今回、卒業生インタビューにご協力いただいたのは、大手旅行会社に勤めている谷川まりの様です。今回のインタビューでは、大学時代をはじめ、現在のお仕事についてのお話を伺いました。

―現在どのような仕事をしていますか？

旅行代理店で働いています。旅行代理店は仕事がたくさんあり、社員旅行や修学旅行の企画・添乗をする人やツアーの作成をする人もいますが、私は、相談にきたお客様に旅行の提案をして、予約を取って、日程表を送って、旅行に行くまでの準備をしています。また、パンフレットの発注などもしています。

―なぜその仕事を選んだのですか？

カウンター業務など、人と話す仕事がしたかったので、そのような会社をたくさん選びました。旅行代理店のカウンター業務の他に、銀行の受付なども見ていました。

会社説明会や面接に行くうちに、旅行の販売・相談のように形のないものをお客様と一緒に考えて作り、お客様にそれを喜んでもらえたときに「一緒に考えて楽しんでもらえてよかった！」と思えるから、旅行の相談に乗ることは楽しそうだと思いました。もとから旅行会社に就職したかったというよりは、お客様と話す仕事がしたくてこの仕事を選びました。

―インターンはどうしていましたか？

実は、インターンはほとんどやっていなかったです。一箇所中小企業のお手伝いのようなものを

やっていましたが、意味がなかったとは思わないけれど、結局仕事選びにつながったかといわれてみればそうでもなかったです。「本当にこれがやりたい！」という仕事があって、その仕事がどういう仕事をしているかを知るためにインターンをするとしたらいいとは思うのですが「とりあえずインターンをしてみる。」ということならば、個人的にはしなくてもいいだろうと思います。

—人と話す仕事につきたいと思ったのは大学に入ってからですか？

大学生のときはアパレルバイトをしていました。アパレルバイト以前にカフェバイトをしていました。カフェバイトのときには人と喋ったりすることに興味がなかったというかあまり仕事にしたいとは思っていなかったです。アパレルに勤め始めてから、商品の話以外に世間話をすることをバイトでやって、人と喋る楽しさを知りました。コミュニケーション能力がアパレルバイトのときに養われて、それを仕事で役立てたいと思い接客業を考えました。

—コミュニケーション能力はどのように養われますか？

学生のうちに色んなことをするのがいいと思います。同じコミュニティーの人だけと仲良くするのではなく、色んなところに飛び込んでいくべきだと思います。そうすることで、自分が今まで出くわしたことのない人とも出会えるので、大学生のうちにいろんなことをしておくのがよいと思います。

—大学時代に力をいれていたことは何ですか？

サークルとバイトです。サークルは広告研究会に入っていました。役職に就いていて、大人数をまとめるのが大変でした。就活では絶対『一番力をいれていたこと』について聞かれるから、バイトでもサークルでも何かこれをやっていたということを一つでも作っておくべきだと思います。就活のときのESとかに書きました。「実際に就職したときにどういうことがあなたの強みに活かせますか？」という話の時にバイトの話を引っ張っていました。実際にESには『接客業をして、お客様が口で言っていることだけではなく、口に出してはいないけど本当は思っていることを汲みだすために、様々な話をして話を広げて引っ張ってくる能力を養うことができ、その能力を使える。』ということを書いていました。

—仕事のなかで大変なことは何ですか？

残業が多いことです。接客業だから、お客様の話が長いときには帰れないことがあります。お客様に合わせて、お客様に寄り添っていかないといけないから自分の都合で帰れないことが大変です。シフト制で土日休みではないから、友達と休みが合わなくなりました。

—在学中に力を入れておいたほうが良いことは何ですか？

色んなコミュニティーに入り、色んな人と仲良くなることをしておいたほうが良いと思います。社会人になると、自分の職場とか元の大学とか以外出会いがないので、出会える機会が多い大学生のうちにいろんな人と出会うことが今後のためには大事だと思います。１つのことだけに力を注ぐことも大事ですが、色んなことにチャレンジすることが大切です。色んなことをやるうちに、自分のやりたいことや自分の向いていることが見つかると思います。

—今はネットとかで自分で旅行を簡単に計画する人もいますが、どのような人が実際にお店で相談しに来ますか？

ご年配の方だと、パソコンの操作が分からないから組んでもらいたいという理由の方もいるのですが、若い人でもハネムーンやちょっとした記念

の旅行のときはネットではなくお店で組む人が多いです。「ちゃんと組んでもらいたい。」とか「安心して行けるようにしたい。」など色々あると思うので責任を感じます。そのようなときは金額も大きくて、夏休みの北海道旅行で100万円という代金になったときに、とても焦りました。（笑）

―観光業に勤めている上で気を付けていることは何ですか？

情報を知らないとお客様に教えられないから必然的に勉強はしないといけないです。行ったことがあるところなら記憶を引っ張り出して情報を教えられるのですが、行ったことのないところだと本当にわからないので、会社の研修として現地に行って、ホテルなどを見学して勉強しています。自分の旅行も仕事の一部になります。（笑）

１年目に長期休みをもらえてハワイに行きましたが、観光の他に、現地でホテルを２件回りました。行ったことのある人の話を聞いたり、旅行番組を見たりずっと勉強です。あとは、大学生のときに比べて時事問題や台風の動向とかをニュースで見るようになりました。時事問題などや天気の情報を知っておかないと「アナウンスがなかった。」といわれるのでニュースは見るようにしています。

―最後に社会学部生にメッセージをお願いします！

大学生活は今しかできないことがたくさんあるので、今を楽しんでください！

頑張ってください！

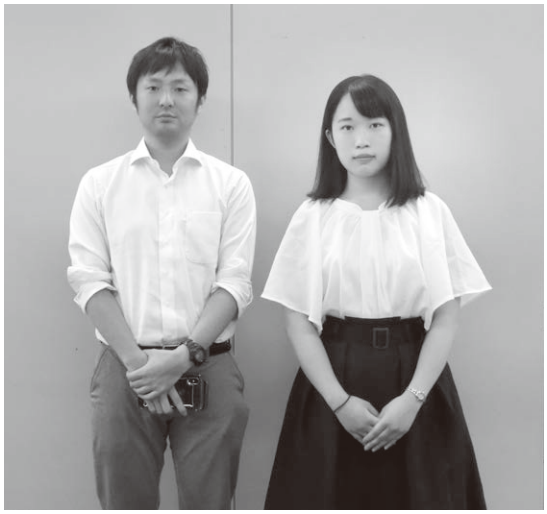
プロフィール（谷川まりの）

2013年　明治学院大学社会学部社会学科 入学
2017年　明治学院大学社会学部社会学科 卒業
2017年　大手旅行会社 入社

インタビュー

AIにはできない、人にしかできない仕事

――報道ディレクターとして奔走する小﨑亮輔さんを訪ねて――



面談者
小﨑　亮輔（2011年社会学科卒業）［写真左］
※プロフィールは本文後ろに記載

取材・構成・編集
佐俣　朱理（社会学科3年）

撮影
西岡　晴菜（社会学科3年）

インタビュー日時：2019年7月24日（水）
13時～14時

場所：TBS赤坂本社ビル内会議室

今回インタビューさせていただいたのは、TBSの報道番組「NEWS 23」のディレクターをされている小﨑亮輔さんです。現在のお仕事の内容や、制作の現場についてお話を伺いました。

―現在NEWS 23の制作をされていらっしゃると思うのですが、どのようなお仕事をしているのかについてまずお聞きしてもよろしいでしょうか。

卒業後に番組の制作会社に入社して、最初はみんなAD（アシスタント・ディレクター）から始まるのですが、最初はその会社で作っているドキュメンタリー番組をやっていて、忙しくてその間も本当にずっと帰ることが出来ないことの方が多くて、床で寝たりとかしていました。半年ぐらい経ってTBSの方に出入りするようになって、２年目からNEWS 23の現場に入って５年ぐらいかな。ADをやってから2016年にディレクターになって今に至ります。どういう仕事かというと、毎日やっている夜のニュース番組の生放送はスタジオから放送するのですが、その間にいろいろVTRを作らないといけないので、そのVTRを作るための取材をしたりだとか、あとその構成と原稿を書いたりだとか、その編集のあとVTRだけじゃなくてスタジオの演出とかそういうのを考えたりしています。

―勉強不足なところもあるのですが、TBSという会社にお勤めされている、というよりかは別の会社があってそこからという感じなのですか。

テレビ局ってどこもそうだと思うけど局員って本当少なくて、うちの番組でいっても局員は1/3ぐらいかな。それ以外は全員の制作会社の人間で、制作会社って星の数ほどあって大きいところ

がちっちゃいところまで、そういうところから人を集めてスタッフが集まっています。

—NEWS 23を制作されている方も色々な会社から集まった方たちで制作されているのですか。

そうそう。基本的には局員の指示の下でやっていて、編集長とかプロデューサーは局員で、その人達を中心にやっています。ほんといろんな会社があります。だからテレビ局に入らなければテレビを作れないってわけではないです。

—制作会社に入社してテレビ局で制作する、それぞれの番組を作り上げていくということですか。

そうそう。だから逆にテレビ局に入っちゃうと番組をプロデュースしたりする機会は多いかもしれないですが、逆に営業とか音声とかそういう色んな部署が制作以外にあって、そこに移ってしまうとテレビ制作が全然できないですね。仕事自体はテレビ制作に関わっているけど、直接はテレビ制作をすることができない。それなので制作会社に入ってディレクターになった方が制作には関わることができます。

—紹介していただいた柘植あづみ先生にもお聞きしていたのですが、元々報道に携わりたいと思っていたと伺いました。何故現在のお仕事を志されたのか教えていただけますか。

あまり人に話したことがないのでまとまってないかもしれないですが、僕が中学生の時に父親が癌になってあと半年ですっていわれてそこでショックを受けるのかもしれないけど、あっそうなんだって感じに思っていて。その後父親は７年くらい生きるのですが、７年後くらいに僕が高校３年生のときに急に容態悪くなってしまって亡くなりました。その時には元々癌になったって分かっていて、あと半年ですって言われていて、いつか父親が亡くなることは、頭ではわかっていたはずだったのですが、本当は理解できていなかったなと思います。元々もうすぐ死んじゃうかもってわかっていたのに、立ち直れないくらい悲しくて、なんでこんな悲しいんだろうなと思って。本当にこうお父さん死んじゃうかもってその時は思えなかったし、その後もずっと思えませんでした。でもその時に思えていたら少しは会話できたかもしれないし、両親は離婚していたので父にはあまり会えなかったんですけど、なんでそういうことできなかったかなと思っていて。なんかその理由についてなんとなく普段考えたりしていたりすると、多分よく新聞とかテレビとか見てしょっちゅう人が亡くなっているじゃないですか。誰々さん亡くなりましたとか、毎日誰か亡くなっているんだって。だけど自分の生活に近いところであまり人が亡くなっていない。だけどこんなにたくさん人が毎日亡くなっている。それなのに何故自分の家族が死ぬっていうことをリアルに考えられなかったのかなと思って。不思議じゃないじゃないですか。この歳になると事故とかあったりするかもしれないし、そういう時に何か隠されているなと思ったんですよ。人が死ぬということが何かの意図か分からないですけど、何となくこうタブー視するみたいなところがあるのかなと思って。本当にその日に家を出る時間が１分違うだけでもわからないじゃないですか。１分違うだけで事故に遭わなかったかもしれないし、そう考えると普段どなたか亡くなりました、事故に遭いましたとか、事件がありましたというのがどうして自分に伝わらなかったのだろうかって思いました。そうしたら父親がいつか死ぬことが母親も当然そうだけど、どうしたら普段起きていることがその身近に感じられるように伝わるのだろうかと思いました。そこからメディアの方に興味を持ち始めて、たぶんそれが最初だったと思いますね。どのタイミングかは分かんないですけど、もはや覚えていないけどそういう所だと思いますね。

—確かにそうですね。テレビで見ていると最近も大きな事件があったりして報道されても画面だとどうしてもフィクション感がすごいという

か、実際身近な自分の両親の死であったりが現実に起きるとそれは現実として受け止められると思う。

あまりも軽いなって思って。軽く伝えているつもりはないと思うけど、伝わってくる時に何か軽くなっちゃうというか、それがどうにかなればもうちょっとこう、もう少し身近に感じていたらその人との接し方も変わるんじゃないかなって思っていて、それできっかけを考えてみたらそういう事かなって思います。

―７年後にお父様が亡くなられて高校三年生というタイミングで大学に進学するわけですが、そのメディアとの関連もあって社会学科に入学されたのですか。

明学を選んだのも父親が亡くなったのが高３の８月でとっくに受験勉強を始めないといけなかったときで、でも全然できてなくて結局９月くらいから勉強を始めて、本当にたまたまですね。別にその時はそんな考える余裕なかったから、自分の学力だとこれくらいかなっていう基準で選んだのが正直なところですかね。明確な基準はないけどなんとなく武蔵大学も受験して後々考えると自分の中で基準があったかもしれないですけどね。

―それでも武蔵大学でも社会学科を受けたということですよね。

なんで社会学科を受験したのかは全く覚えていないですが、元々母親もそういう関係の仕事をしていたっていうのもあったかもしれないですね。今母親は共同通信で勤めているのですが、そういう影響もあったかもしれないですね。その時は違う仕事をしていましたが当時もそういう話はしていたので、もしかしたらそういうのも影響していたかもしれないです。

―大学に入学されてからはサークルとかに入られたりしていたのですか。

サークルは全く入ってないですね。戸塚の明学生専用アパートに住んでいてそこのやつらと大体つるんでいましたね。

―インターンはされましたか。

インターンはしなかったですね。就活もあまりしてなくて10社くらいしか受けてない。

―何月くらいに就活をやめようかなと思ったのですか。

７月くらいかな。高校の同窓会中に会社の採用通知のメールが来て。

―今勤められていらっしゃる会社の採用通知ですか。

“当時”のね。今は色々合併したので、TBSの孫会社みたいになって、今は正式に子会社になりました。

―小崎さんは2011年卒ということでそのときも社会学科はメディアが人気でしたか。

当時も人気でしたよ。佐藤先生のゼミの入室倍率は高かったです。佐藤先生の授業で凄く覚えているのは、テレビって今視聴率が出るじゃないですか。ビデオリサーチってところがサンプルの家庭に視聴率をモニターする機械を置いているのですが、そのサンプルが少なすぎて調査としての精度が低い。それで視聴率何％か出るんだけど、±５％ぐらい誤差が出ているって言っていて。へーそうなんだなって。

―視聴率は報道の番組にも影響があるのですか。

もちろんあります。みんな選挙とか大事なことってスルーしがちじゃないですか。そういう番組は数字取れないからやらないとなると、誰のためにもならないというか。ただ数字が取りたいだ

けになってしまうから、それは良しとしないというのが、このTBSの報道局のいいところです。裏番組の「NEWS ZERO」とかそういうものとかほとんどやらないんですよ。やってもなんかその“小泉進次郎と櫻井くんの対談”みたいな。それぞれのファンが勝手に見るからにこの後数字上がるでしょうみたいな魂胆が見え見えで。報道機関として本当にそれでいいのだろうかというのが割とTBSにはあります。それは放送から滲み出るものだから、学生時代とか結構色々ニュースとか見ていて、TBSは一番姿勢としていいなって思っていました。

—TBS以外のテレビ局に関連している会社も受けられたのですか。

元々僕の入った会社はTBSが中心で、どこに入社しても一緒なのですが、どの局にも人を出しているところでした。でも制作会社ってそれぞれジャンルがあって、うちの会社は報道を主にやっていて、リクナビにも報道の制作会社ですって書いてあったので、受けました。なかにはバラエティが中心のところとか、全くバラバラで、ドラマの会社もあるし、それはほんと星の数ほどあると思います。だから選ぼうと思えばいくらでも選べます。

—今時珍しくテレビが好きでニュースを見比べるのが好きなのですが、テレビ局によってもニュースの取り上げられ方が違いますよね。

見比べると面白いと思います。報道センターには壁にテレビが並んでいて、全局並行して見られるようになっているんですよ。そういうのを見ていると面白いです。並びで各局見られるようになっているというのは普通の家庭にはありませんが、速報がどこが早いかとか、あとニュース番組はだいたい10時とか11時から始まって、トップニュースにされたものが大事なニュースのはずなので、どういう風な並びでやるかとかを見比べることが出来ます。その最近の例としては、この前のジャニーズの公正取引委員会が注意したというニュースがあって、最初にNHKが放送し、独自に出したスクープだったのですが、民放に対して圧力かけたという内容だったので、その当事者である民放が、特にその日の夜の報道番組がそれぞれどのように取り上げるのかというのは分かる人には結構気になるところでした。「報道ステーション」は全く取り上げず、「NEWS ZERO」は一番番組の最後で少し取り上げた、フジテレビも少し取り上げた、うちの番組だけトップニュースで色々取材をかけてニュース内容と街の声と、あと弁護士の見解を取り上げたのがネットで結構バズっていて、TBSだけこんなに報道するんだとなっていました。

—その報道の仕方で目に見えて民放が忖度していることがわかったわけですよね。

やはりジャニーズに忖度しているのではないかって。逆にうちはしてないってことになるのですが、こういう風にツイッターで拡散されていきました。こういう風なのはジャニーズに限らず政治にも言えることで、テレビ局の姿勢が見える出来事でしたね。そうやって見て行くと面白いと思います。

—在学中に力を入れておいた方がいいことはありますか。

英語もっと勉強しておけばよかったなって思いますね。英語できるかどうかで回ってくる仕事が多分変わってきます。この前あの『FACTFULNESS』っていう今本当に売れている本があって、それは海外の著者が何人かで書いていて、そのうちの一人が来日しますっていう情報を知っている人がいました。それ取材できないかなと思ったらしく、それで僕がたまたまそれを読んでいるのを見て、「その作者が来日するんだけど取材できる？」って聞かれて、その後「英語できる？」って聞かれて、「できません」って言ったら違う人に仕事がいってしましました。英語が

出来るかできないかでそういうことがね、たまにあります。ありきたりすぎてつまらないかもしれませんが。

—現場にも行く感じですか。

昨日も国会に行ってきて普通に映っていますよ。カメラマンと行くこともあるし、京アニの事件だったら容疑者が埼玉に住んでいて、所長から連絡をもらってちょっと行ってきてって言われて行きました。カメラは常に持っているからそのまま行けたりします。そういうのはしょっちゅうありますね。

—行動力がすごいですよね。

容疑者が普段あまり近所付き合いとかしないと人とかでも、なんだかんだ結構みんな見ていたりとかするんですよ。たまたま見かけるだけの人もいるけど、例えば何時頃いつも見かけるとか、夜中に出かけるのをよく見るとか、夜中いつも電気がついているとか。何かそういう些細なことでも意外とみんな見てたりとかして、そういうのをたどっていくと結構いろいろ分かってきたりして、新聞もテレビも全部そうやって取材していますけどね。

—お話聞いて「いいですか」って伺って答えてくださる割合って多いのですか。

答えてくれない人の方が多いです。よく新橋とかで街頭インタビューもだいぶ打率は低いですね。

—すごい人数に聞いて、出たコメントの中のどれかが報道されているということですね。

よくインタビューに答えている人が劇団員だって言われるんですけど、そんな事一切ないです。聞く人数は使える時間にもよるけど、僕らは毎日やっているから限られた時間の中で、どれだけの人を捕まえて話を聞くかっていうのは、シンプルだけど難しいですね。

—歴を重ねるごとにお話を聞くことが出来る打率が上がったりするのですか。

センスにもよるし、見た目にもよるし、なんかこう全然ダメな人もいるんですよ。声をかけてダメな人いるし、上手い人もいる。それって声の出し方とか、なんとなくの雰囲気とかも違うだろうし、本人も狙ってやっているわけではないと思うから。街中で聞くだけが仕事ってわけではないので。

—取材される以外のお仕事はどういうお仕事をされているのですか。

取材した後は、それをナレーションの原稿を作って、VTRの構成を考えて、作り上げていく。それをまず原稿を書いてそれを編集長が確認して、各所が確認して、その間違いがないかとかそれ見ても誤解を与えないかとかチェックする。

—それで間違いがあると、よくニュースで見る訂正とかを出すのですか。

それで例えば事実関係が間違っていたとなると訂正したりする。そうならないようにそんないろんな人の目を通してチェックして、それで編集もしなきゃいけない。というのを毎日やっていて、

昨日は国会に取材に行って帰ってきて、この後に映像を見ながら喋ったことをテープ起こししていって、そのどの部分が一番核心をついているかを探します。今このインタビューもそうだけど話が逸れるじゃないですか。話は逸れるし、あとうまく言葉にできないところもあるし、その中でどこを抽出するか。この人が言いたいことは何か、ということを考えて、文脈も考えて、そういうことを選んでいきます。そしてインタビューの使いどころを音とか音(オン)と言っているのですが、それを抜き出していって、それが活きるようにいろんな原稿ナレーション書いたりをしています。

—メディアを勉強したい人が周りに多い中で、私自身はそんなに興味を持たずに過ごしてきてしまったのですが、実際メディアがどういうものかよくわかっていなかったように今お話を聞いて思いました。

僕はテレビの仕事をやっているから言えることかもしれないのですが、この仕事をするまではテレビってテレビ局に入ったエリートみたいな人が何か軽い気持ちでやっているのかな、簡単にVTRとか出来ちゃうものなのかなってなんとなく思っていました。そんなに苦労せずに作れるものが今流れているのだろなってなんとなく思っていて、だからミスリードもあるし、ってなんとなく思っていました。実際は全然そんなことなくて。超大変じゃんってなりました。

—そこに関わる人数と労力がすごいということですよね。

そうそう。例えばニュース番組で流れる内容が全部をその番組のスタッフが取材しているわけではありません。日本の民放だったら系列局が全国にあって、その系列局が取材したものをTBSでまとめて、放送していたりします。番組といっても番組だけがやっているわけではないんだなとか、これはその番組が取材したのかとか、よく見ると分かるようになるんですよね。ナレーションとかもそういうのが分かるようになっていて、こっちもこういう取材したんですよっていうのを見ている人にわかってもらいたいから、一応そういうナレーションになっているはずです。新聞もそうですね。発表の元があって、みんな知っているからそんなに情報の価値はそこまで高くないんだけど、我々だけこの取材ができている。我々によってこの事実が明らかになったということがあると、例えば朝日新聞だったら朝日新聞の取材によってわかったとか、誰々はなかなか取材できない人に取材できたら、誰々は何新聞の取材に対しとか必ず言います。そこに作り手は重点を置いています。この人に話を聞けたのがニュースなんです。こういう事があったからニュースなんですというのがこちらもいろいろ価値判断をしながら、どういう情報が見ている人に有益かというのを考えながらやっているから、それとかは必ず滲み出てきます。写真であれば文章とか、映像であればナレーションとか、映像そのものだけとか。そういうものを、なんかこう思いを馳せて、色んなものを見ると世の中面白いです。テレビだけではなくて、漫画の内容ももちろんそうですが、これ描くとどのくらい時間がかかるのかなとか、これを作るのにどういう過程があったのかなとか、ただ受け取るだけじゃなくて想像しながら何でも見てくと結構面白いと思います。スマホのアプリとかでもいいし、とても便利だけどどうやって作っているのだろうとか、もちろん興味の範囲内でいいと思いますが、結構意外とつぶさに見てくと、これって人が作っているんだなって結構わかります。テレビなんかまさにそう。いろんな人のいろんな選択の積み重ねで、その何を取材するかというのもそうだし、何が今日番組で使えるかということも誰かの意図が必ず入っていています。それはもう人間が作っている以上中立公平は難しい。もう学生の時はその背景を知らずにこういうのも中立公平なものだって思っているから、なんとなく自動的に事務的に並べられているものなのかなって思っていた時がありました。だからあまり深く考えずに見たりしていたのですが、今注意していろいろ見ていくと、これって人が作っている

んだって結構わかる部分って多いんだなって思います。この歳になって思っています。

—最後に社会学部生にメッセージをお願いします。

当たり前に目にしているものとか手にしているものとかがどうやって自分の元に届いているのかっていうのを考えてみると面白くなると思います。社会学部生に限らないですけど、社会学科は進路が広いし、ゼミだけでも選択肢があるし、だから色んなことに触れられるからそういうのを考えてみると今後どういう仕事をしたいかとかは、なんとなくメディアとかっていうだけではなくて、何となくってすごくもったいないというか、全てが悪いわけじゃないけど、世の中面白いなって。僕は色んな取材をしているからそう思うかもしれないだけかもしれないけど。なんでも人が作っているんだなって。僕はよくインタビューするけど、何が核心だと思ってしゃべっているか、上手く言語化できないことってあるから、それでも相手が何を思っているかを考えて、大体決まってきちゃうんですけど、そういう作業も面白いし、吉本興業の会見とかも５時間くらいあるなかでどこをピックアップして伝えるかとかそれぞれ違いがあると思うんで、そういうことを踏まえるとAI（人工知能）とかには絶対できないと思う。AIは常に合理的に判断するじゃないですか。そうなるとキー局で伝える内容が同じになっちゃう。それぞれが違って、情報も違うから、見ている人は色々考える事できるんだけど、AIだと全部横並びになっちゃうから、人にしか絶対にできない仕事だと思いますね。

プロフィール（小﨑亮輔）

2007年　明治学院大学社会学部社会学科 入学
2011年　明治学院大学社会学部社会学科 卒業
2011年　テレビ制作会社に入社
2012年　NEWS 23配属

インタビュー

挑戦してみることの大切さ

――社会調査士資格を取得した青木海さんにお話を伺う――

面談者
青木　海（2010年社会学科卒業）［写真右］
※プロフィールは本文後ろに記載

取材・構成・編集
木島　　夏海（社会学科2年）
石岡　里佳子（社会学科2年）

インタビュー日時：2019年8月10日(土)
13時～14時半

場所：モリバコーヒー目黒駅東口店

今回インタビューさせていただいたのは、全国労働委員会労働者側委員連絡協議会に勤務されている、青木海さんです。現在のお仕事や学生時代についてなど、様々なお話を伺いました。

―現在どのような仕事をされていますか

全国労働委員会労働者側委員連絡協議会というところで働いています。労委労協というのが略称です。どういうところなのかというと、労働委員会という行政委員会と関わりがあります。行政委員会とは政治的中立性を必要とする、要するにその時の政治情勢に左右されてはいけないような分野に対して、内閣とは独立した位置にあり委員で合議して決定していく機関なんです。その中で労働委員会は、労働者と会社・使用者の紛争の解決をするための機関です。労働委員会は、各都道府県の管轄で全国47か所に設置されています。そして中央労働委員会というのがあるんですが、こちらは厚生労働省の外局です。今あげたのはどちらも公益委員・労働者委員・使用者委員の三者構成になっています。その中でも私は、労働とか雇用に関する法律や状況ってどんどん変わっていきますよね、それをちゃんと勉強して対応出来るようにしていこうという労働者委員の団体なんですが、そこの事務局で働いています。

私は委員ではないので直接調停等の現場に出ていくことは無くて、事務局として運営を回す仕事をしています。会社の部署でいうとおそらく総務とか経理とかあとは秘書室も兼ねています。あとうちは会費で運営しているんですけどその会費の徴収とか、お客様の対応とか、たまに事件の当事者の方が来るんですけど、そういう人を労働委員会事務局と繋いだりだとか、色んな仕事をしてい

ます。

―その仕事を選んだ理由は何ですか

この仕事は紹介で知りました。じゃあ私自身は就活をしなかったのかというとそういう訳ではなくて、1年半とか結構長くやっていたんです。でも私が就活生だった年はリーマンショックだった年で、どの企業も採用数をすごく落としていて、かなり苦戦していました。プラス、私はワークライフバランスがしっかり取れるところに行きたいなと思っていて、どちらかというと一般職とか今就いているような職種に行きたかったんですけどまあ人気だったわけで、なかなか取れず。

あとは組織自体でいうなら公共性の高いところに行きたかったんです。私は社会学部が当時やっていた現代GP（現代的教育ニーズ取組支援プログラム。各大学が文部科学省に応募して選ばれた教育プロジェクトに対して財政支援がされる）というプロジェクトに、最後の1年だけ参加をしたんです。その時に障がい者を雇用している現場とかを見学しに行く活動をしていたんですが、やっぱり実現が難しい分野だなと思ったんです。障害者雇用促進法という、全社員に対して決められた割合で障がい者を雇わなければならないっていう法律があって、足りなかった分は足りない人数に応じて納付金を支払わないといけない。でもお金を払えばいいでしょっていう企業があったり、あとは身体障がい者の方が多く雇われていた。知的障がい者の方を雇っている企業ってやっぱり少なくて、厳しい現実を見せつけられた感じがしたんです。だから、正しいと思えることをちゃんと正しいと言えるところに行きたいなと思っていました。

あとは大学に赤十字の方が来てくださったのがきっかけで赤十字も受けましたがダメで、そんな就活を1年半ほどやっていた時に今の事務所から声を掛けて頂いたんです。当時の事務局長から紹介していただいたんですが、私の前任にあたる方が60歳以上の方で腰が辛くて辞めるので新しい人を探していると。中途よりは新卒で長くいてくれる人、なおかつお金を扱うので、全く知らない人よりかは知ってる人の方がいいということで誘っていただいて、現在に至ります。

―大学時代について教えてください（どのような学生だったのか/授業・サークルに関して）

社会学部を選んだ理由は、小学生くらいの頃から「海ちゃんて変わってるね」と言われることが多くて、でも自分ではそんな変わってるつもりはなくて。変わっているということは、みんなが定義する普通と私の普通が少しずれているということですよね。それで普通って何だろうという思いが根底にずっとあったんです。それで進学どうしようってなったときに、立教大学のオープンキャンパスで社会学部の先生の公開授業を受けたら面白くて、それで社会学部に行こうって決めたんです。受験では社会学部がある大学をバーッと受けて、大学によってはちょっと社会学部って名前ではないところもあるんですが。それでちょうど明治学院大学に受かったから通うことにしたんです。

あとは私の出身が中高一貫だったんですけど、そこが日本の学校っぽくない作りだったんです。私はクリスチャンではないんですが学校がプロテスタント系の学校で、明治学院が母校と似ているなと感じたんです。Do for Othersの精神とかが。それで明学を選びました。

授業は私は元から社会学部を希望していたので、基本最前列とかでどれも楽しみながら受けていました。サークルは最初からは入らなかったんです、とりあえず春学期は授業に集中しようと思って。それで秋学期からは乗馬サークルに入りました。週末の度に泊まりで御殿場まで行って活動していたんですが、体が持たなくて半年で辞めちゃいました。

バイトは、大学の紹介で飲食の派遣業でバイトをしていました。派遣先の一つが目黒の雅叙園の洗い場で、食器の洗い方とかスプーンやフォークの正式名称とか教えてもらって、そういう得難い経験をさせてもらえたのはとても面白かったし良

い経験だったなとは思います。あとは半蔵門にある福岡県人会館の１階のビアガーデンと、豊洲の方にある大きいビルの社員食堂にも入ったことがあります。いろんな人がいて面白かったです。

―社会調査士の資格を取得して役に立ったことはありますか

ダイレクトに取っててよかったということはなかったです。そもそも私は仕事のために取得した訳ではないので。先ほども言いましたけど私は社会学部に入りたくて入ったので、何か自分の中で社学頑張ったぞという記念というか勲章というか、そういうのが欲しくて取得したんです。なのでまあ使えなくてもいいかなという感じなんです。ただ、社会学自体他の学問と比べて「社会学って何ですか」って聞かれて説明がしにくいじゃないですか。懐が広いと言えば懐が広いんだけど。そこで何を以て社会学やりましたっていうときに分かりやすい目安かなって思って取りました。

社会調査士の資格を生かしたいなら、統計をしっかりやるといいのかなと思います。調査士のホームページとか見ても調査系の会社が多かったり、あとはマーケティングが多かったりするので。

それと、取得の過程で自分一人では出来ないことが出来たのはとても大きかったなと思います。私が実際にやったのは「川崎在住の沖縄県出身者」という括りでのインタビューだったんですけど、１人でもこのインタビューをやるかと言われたら多分やらないし、伝手もない。統計のソフトの勉強とかも独学ではきっと出来ないだろうし、独学でやったとしても確実に途中で心が折れてます。そういう取得の過程は、自分の身になっているなと感じることはあります。あと資格を取得するためには取らないといけない授業がいくつかあるじゃないですか。そうやって幅広く深く社会学を学ぶことが、自分の社会学的想像力といえるのかどうか分からないですけど、今の社会の普通と言われることに疑問を持つこととかそれが普通で本当に良いのか、自分はその道に従わなければならないのか。そういう風に考える習慣がついたのも、今の自分の生活にとても役立ってるんじゃないかと思います。

―在学中に力を入れておいた方が良いことはありますか

具体的というよりかは抽象的な話になってしまうのが申し訳ないんですけど、とりあえずやってみようか悩んでいることは、やってみて欲しいです。自分の限界とか価値観とかを知るために、興味を持ったらとりあえずやってみるっていうのが大事だと思うんです。例えば、私はどれだけがっつり社会学を学べるのかどうかとかいう真面目な方面でもいいし、私はどれだけお酒が飲めるのかどうかとかいうことでもいい。でもこれ本当に大事なんです、大人になってから潰れると本当に大変だから。あとは私はどれだけ徹夜が出来るのかどうかとか。これも自分がどれだけある物事に対して体力を削れるかどうかっていうのは、社会人になるとどうしても自分の都合だけでお休みを取りづらかったりするから、そろそろ本当に危ないぞって感じた時にここで一泊入れようとか、そういう体力調整がすごく大事になるんです。そういう面でも、自分の限界がどこまであるのか知っておくっていうのは今のうちだと思います。

やってみて初めて自分に向いてるか向いてないかとかも分かったりするんです。私が半年間だけサークルやってみたり現代GPに参加してみたり

とかいうのも、そういう気持ちでの挑戦でもあったりしたので。例えば乗馬とかは実際体力が持たなかった。だから自分にはがっつり働くのは向いてないかもしれない、やっぱり体育会系ではなかったな、いくら好きな動物が相手とは言え出来ないものは出来ないな、でもやっぱり動物は大好きだなとか。じゃあ動物が相手の仕事はどうかって考えた時に、乗馬サークルの合宿中に私がそれまで乗っていた馬が老衰で死んじゃったんです。それがすごく辛かった。仕事にするとこの辛さを何度も感じないといけないのかって思ったときに、私にはこれは仕事には出来ないなって思ったんです。

何もやらないと何も分からないので、やって学んでいってほしいですね。そうやって学んだことは、大学を卒業してからの人生の進む先の指針にもなってくると思うので。

―最後に社会学部生に向けてメッセージをお願いします

せっかく受験と学費という大きな対価を得て４年間好きなことを出来る時間を得たわけじゃないですか。なのでためらっていたら勿体ないと思います。社会に出たら大抵の人は色々なものに縛られて自分のやりたいことを自由に出来る時間ってだいぶ少なくなります。会社に就職したらその会社の就業時間に縛られる。あとは結婚したりとかすると自分以外の人の生活サイクルまで考えないといけない。そうじゃない生き方をしている人ももちろんいるんだけどね。でもやっとけばよかったって後悔する前にやってみて、大学生のうちの４年間を大事にしてほしいなと思います。

日々の生活に追われていたりすると、あの頃は楽しかったなってふと思い返したりするんです。４年間を大事にしなさいっていうのは母に言われた言葉なんです。バイトも社会経験としては大事だけど、バイトしかしないっていうのはやめなさいとも言われました。卒業したら嫌でも働かないといけないから、大学生の今しか出来ないことをした方が良いと思うと言われたし、実際私もそう思います。やりたいことを後押ししてくれる環境が周りにいっぱいあるから、それを使えるだけ、学費の元を取るつもりでやった方が良いと思います！

プロフィール（青木　海）

2006年　明治学院大学社会学部社会学科 入学
2010年　明治学院大学社会学部社会学科 卒業
2010年　全国労働委員会労働者側委員連絡協議会 就職

インタビュー

手当たり次第に飛び込んでみる

――留学生の日本語教育事業に携わる吉村悠さんを訪ねて――

面談者
吉村　悠（2007年社会学科卒業）［写真左］
※プロフィールは本文後ろに記載

取材・構成・編集
石岡　里佳子（社会学科2年）
石川　真衣（社会学科2年）

インタビュー日時：2019年7月9日（火）
9時30分～10時30分

場所：明治学院大学白金キャンパス
パレットゾーン白金　2F
インナー広場「さん・サン」

今回インタビューさせていただいたのは、教職を取得し、現在は留学生に関わる活動をしている吉村悠さんです。当時の学内学会の様子や日本語教育の現状など様々なお話をお伺いしました。

―どのようなお仕事をしているかを教えてください。

まず、現在に至る経歴からお話ししますね。私は明治学院大学に02（2002年）で入りまして、それから大学３年生の時に提携の大学でホープカレッジ（アメリカのミシガン州にある協定校）っていう学校があるの知ってますか。

―聞いたことあります。

そこに１ヶ月の短期留学をしていました。交換留学の形で行きまして、その際に現地で大学の中で日本語の授業を持たれていた先生がいらっしゃって、そのTA（ティーチングアシスタント）で日本の方がもう一人いらっしゃったんですね。そのTAの方がちょうど任期を終えて帰国されるタイミングだったので、次のTAを探していますよというタイミングで行かせていただきまして、先生が「ちょっと次探しているんだよね」って雑談のなかで言っていたんですよ。それですぐ「行きます！」って手を挙げたんです。半分冗談のようなやり取りだったんですけど、それが本当になって翌年きてくださいって話になって一度日本に帰って日本語教育の資格をダブルスクールで取りました。大学４年の夏からですかね。５月、６月ぐらいから現地で日本語のティーチングアシスタントをしながら１年間留学しました。で、帰ってきて大学をみんなより１年遅く５年かけて卒業しました。

代々木にある山野っていう美容の専門学校（山

野美容専門学校）ご存知ですかね。けっこう有名な専門学校なんですけど、そこに併設された日本語学校がありまして、そこがその当時台湾とか中国の人がメインだったんですね。その方たちを対象に日本語を約２年教えました。ご存知ないかもしれないんですけど、日本語教育業界って８割以上９割ぐらいが女性の方が従事されているんですね。その主な理由は日本語教育っていうのは非常に収入が少なくてですね、普通の日本語学校の教師では一人で家族を養っていけるほどは収入が得られないと言われているんです。なので、キャリアアップのため修士課程を取ろうと思いまして、早稲田大学大学院日本語教育研究科に進みました。その２年間、地域日本語教育研究科というところにいました。坂口ゼミ（坂口緑先生のゼミ）で学んでいたのもあって、どちらかと言うと地域の中でボランティアベースで日本語を教えるそういう活動に興味がありまして、そのテーマで勉強しました。大学院時代は研究というものがなかなか難しくて苦労しました。修士課程なので研究と呼べるような代物でもないですけど、まあそれでもなかなか大変だったので博士課程には進みませんでした。

大学院を卒業して就職しなければいけないなっていう中で、日本語学校の仕事の中で海外いろいろ行けることを知りまして。

そこで、学生を募集してくる仕事が「先生」じゃなくて日本学校の「事務職員」だったんですね。八王子の学校でそういう職員を募集していまして、たまたまそれを見つけてそちらにお世話になって海外いろいろなところ行きましたね。ベトナムは多分10回ぐらい行っているんじゃないですかね。ネパールも多分10回、そのほかスリランカ、バングラデシュ、ミャンマー、インドネシア、タイ、カンボジア、ウズベキスタン……あといくつか行っているんですけどアジアで日本語学校や日本語を勉強しに来る留学生が多い国に募集活動に行く仕事、なおかつその日本語学校の事務局長として入管手続対応や学生の生活のお世話をする仕事に６年間従事しました。

事務職員ですが、学生からは「先生」と呼ばれていました。どうしてかっていうと日本語学校に通っている学生さんがやっぱり一番大切なのはビザのことなんです。日本人はビザとかないから平気で（日本に）いられるんだけど日本語学校に通う学生さんは留学ビザ、仕事だったら就労ビザで来る…などいろいろな種類のビザがあるんですよ。日本語学校の事務職員は学生のビザ手続きの管理をするので、行政書士のように「先生」と言われるんですね。

日本では外国人が取得するビザはどれもその活動に制限があります。留学ビザの場合、留学の活動として授業を規定時間以上受けなければいけない。出席率もあって…その、「単位」のようなものですね。大学生だったら別に単位とってなくても在籍はできますよね。だけど、留学生の場合は出席をしてないと正当な留学活動をしていない、そのビザでするべき活動をしていないとされて日本に居られなくなっちゃうんですね。アルバイトも「資格外活動」。資格の外の活動として特別に許可しますよ、それが１週28時間までです。そういうアルバイトとかビザのことに関して学生の相談に乗っていたので学生からは非常に重要な存在として接していただけるのでやりがいのある仕事ですね。

—今もその仕事を続けていらっしゃるのですか。

そうですね。似たような仕事に就いています。2017年６月までその仕事をしたんですけど、７月からは日本語学校を新しく作るという仕事を始めました。これも元々の自分の志向性とか大学で学んだことに関連するんですけど、いま地方って若年層が全然足りないじゃないですか。そういう地域では小学校、中学校とかって建物が廃校になって使われなくなっているんです。あれって自治体が簡単に取り壊せるものではなくて、かといって維持管理にすごくお金が毎年かかるんですよ。なので誰か使い主いませんかっていう公募してくれるんですよ。そこに手を挙げてその学校を日本語学校にしませんかという提案をする仕事をしていました。

—やはりゼミや大学でやったこととつながっているのですか。

卒業論文で日本語教育を扱ったんですけど。今考えると恥ずかしい。自分の意見も何もない業界の概要をまとめただけのものでしたね。しかし、そこからずっと日本語教育に関わっていますね。現在は、GTNという会社ご存知ですかね。一般的には聞き馴染みはないと思うんですけど新大久保の駅にも看板とかがありまして、留学生に限らず外国人の家賃保証がメイン事業の会社です。日本に来た外国人の方が生活しやすいように住むところ、そしてモバイル、不動産情報あとはお仕事……まあ珍しいところで外国人向けのクレジットカードの提供等のサービスを幅広くしている会社です。今そちらに出向という形で呼んでいただきまして留学事業について担当をさせていただいています。自分の経歴はこんな感じです。ちなみに出身は石川県です。

―地元の大学ではなくて、明学にした理由はありますか。

いや、特になくて。高校生の時、陸上ばかりやっていたんで、勉強とかもしてなくて、いつもクラスで40人中40位とかでした。でも運よくセンター試験利用受験で合格できて入学させて頂きました。

―社会学部とかは特にこだわりはなかったということですか。

そうですね、正直何をやりたいか分からなかったので、社会学部ってそういう意味では幅広いじゃないですか。で、何か具体的に福祉関連とか保育士やりたいとか先生やりたいとかっていうのがやっぱ１本に決められなかったんで、とりあえず大学決定の時点では出口考えず社会学とあと念のため教職と、っていう形で選びましたね。

―教職の授業を受けていて役に立ちましたか。

役立ちます。教職の授業って、やっぱり現在自分が日本語教育やっていたりとか、あとは子供いるんですけど子供と接するときもやっぱりその基本的な考え方が教職と一緒だなぁと思っていて、単に怒っちゃうっていうのではなくてまあ叱るとか指導するというかそういう目線で入ると意外と子供がこちらの意図を理解してくれたりする部分があったりして。外国の学生さんも同様で、どうすればわいわい騒いでいる人達にお話を聞かせられるか、どういったお話を聞きたいと望んでいるのか、そういうポイントを押さえればけっこうみんな聞いてくれるので教職は今の仕事をする上でもそういうポイントを学ぶいい機会になったかと思います。

―留学を大学４年の時に行ったとおっしゃっていましたが、それまでは留学に行こうとは思わなかったのですか。

僕は海外に対する志向性はもともとあったんですよ。高校生の時も２週間だけどカナダに行ってるし、大学２年生のときにフィリピン行って、大学３年でホープカレッジに行きました。遅かったのはたまたま呼ばれた時期が遅かったっていう、人の縁に導かれるタイミング待ちですかね。

―留学していた時は日本語教育に興味があったのですか。

正直なところ最初は特になかったですね。少なくとも２年生の時にフィリピンに行った時にはなかったし、３年生の時に初めてホープカレッジで日本語教育と出会って、まずびっくりしました。アメリカの人がクラスに来て日本語で話しかけてくれて。それまでは向こうのハンバーガー屋さんとかで「お前英語喋れないんかい！」みたいな態度をとられていたから。「このアメリカ人は日本語話してくれる！（泣）」みたいな。嬉しくて、日本の文化とかにも興味持ってくれるのは嬉しいじゃないですか。単純に最初はそこですかね。私も彼らを知りたいし、彼らも私を知りたいし、そこのところでコミュニケーション取りやすいなと思って、そういう人たちと関係を作って将来の自分にとって居心地のいい仕事ができないかなと

思って始めたのがきっかけですかね。

—学内学会に所属していた時にスポーツ大会を実施したとお伺いしたのですが…

スポーツ大会はやりましたね。運営したのは僕じゃなくて、僕は司会をしていました。当時は民族音楽研究会でギターか何かやっている子がいて、その子が一生懸命動いてくれましたね。

—どういう感じでやっていたのですか。

普通にバスケとかやっていた気がします。でもやっぱりその目的はただスポーツをしてすかっとするっていうのもあったんですけど、スポーツを通しての交流で、社会学部としてゼミ対抗であったりとかゼミのメンバーを分解してミックスしてみたりとかそういうような工夫はしたような気がしますね。あとはもう単純に人集めですよ。人を集めるのが得意な人にアプローチして、その人を巻き込めばそこに人が何十人でも付いてくるとかあとはゼミ回りました。各ゼミで回って「スポーツ大会あるんだけどもし空いていたら来ない？」みたいなことはちょっと早め早めに伝えて、でも当日来ない人もいっぱいいるんだけど。大学生だから。けど割と集まってくれてね。40、50人集まってくれたんじゃないかな。

—学内学会の思い出はそこが大きいですか。

正直、部室でたまっていたのが一番楽しかったですね。僕、戸塚まつりをやってたんですよ。人間関係も戸塚まつり経由で広がっていきました。戸塚では戸塚まつりの部室にいて、品川ではその社会学部学内学会の部屋にいて、「たまり部屋」って感じで楽しかったですね。似たような人間が集まってるんで。品川の部室は地下の、たしかそれまで倉庫だったところを部室にして使ってたのでちょっと埃っぽい感じとか好きでしたね。

—他に企画したことはありますか。

僕はもう何もしてなかったですね。周りの人がね、やっていってそこに乗っかって、その場でやれる仕事はやりました。役職はついてなかったですね。当時は書記とかなんかいろいろ役職はあったんですけどそういうキャラじゃなかったので。でも、企画とかばんばんやればいいと思いますよ。絶対身になると思います。当時他のゼミに遊びにいけたり、いろいろな先生と交流できたり、その先生がやってるフィールドワークに参加できたり。やっぱり学内学会で活動してたことがきっかけになったいい経験も多いですね。

—現在の仕事のやりがいはありますか。

今の仕事のやりがいはですね、まず入管法改正とか法律改正の知識を得られるという部分は特殊な知識を身に着けられるので面白いです。そして何より、まだまだ日本が外国人に対しての向き合い方が雑だということに気づけたというのが自分にとってやりがいにつながっていると思います。日本という国自体はまだ外国人に対して直接向き合って、その人たちの声を聞いてその人たちに本当に合った対応ができているかと言うとまだまだだと私は思うんですよ。ニュースなどの報道を見ても「外国人がこれをした、あれをした」って、「国」や「外国人」に関する情報が断片的で事件性の高いものばかり可視化されることが多いと思うんですね。でも、国別で一緒くたに考えたりアジア系外国人を一緒くたに考えるというのが乱暴だ

ということに意外とみんな気づかなかったりね。

日常的には「不可視」の部分で、たとえば外国の方で日本語があまり分からない方が甘んじて日本の中で３K的な仕事をしてくださる。臭い、汚い、きつい仕事。もう日本人もそういう仕事からかなり離れてしまってると思いますが、一部で外国人の方がそれを肩代わりしてくださってる状況などが見られると思います。もちろん留学生も言語的なハンデを負ってそういうところに入ってきつい仕事しながら寝る時間もあまりなくてでも授業に100%出席するという、「自分だったらくじけちゃうだろうな」という生活パターンの子も多くて、日ごろ接していて尊敬せずにはいられない側面があります。やっぱり経済格差があるから。

留学生に関わるという仕事の中で、そういった個々の事例に触れて、一般的には不可視の部分に触れて、そういう貴重な経験をさせてもらいながら、「彼らのためになる仕事」への志向性が育ってきたんだと思います。ですから、そのような視点を持たせてもらえる仕事に関わり続けていることに非常に強いやりがいを感じています。

―仕事で外国の人と接する上で言葉の壁とかは感じないのですか。

私はないですね。サイアク言葉が通じなくてもそれでやってのけられちゃうと思っているので海外では問題ないです。英語が多少話せますが。なので英語とあとは身振り手振りとか指差しとかで大体の国でなんとなく生活できちゃいます。行く先々で日本人に対するリスペクトを持っていただける場合が多いのもあるし。そこは問題ないんですけど。

逆に言葉の壁を越えていけてるなって経験として。やさしい日本語で話すことができるという経験を日々していますね。どんな動詞から順に学ぶかとか日本語学習のルールがもちろんあるんですが、『みんなの日本語』っていうのがメジャーな初級～の教科書で、外国人学習者にとってその中に書いてある語彙は覚えるけどそれ以外の語彙ってなかなか触れる機会がないんです。それを現地で学んで日本に来て会話をするものだから最初日本人が話す言葉、こうやって普通に運用する言葉っていうのがその教科書に載ってもないし聞き取れないんです。理解もできない。私たちがやさしいと思う言葉でも。だけどその『みんなの日本語』に載っている語彙を教えたことがある先生はそこの語彙だけを使って話すっていうことができるんですね。

今「やさしい日本語」っていう取り組みが各自治体で普及活動されています。その「やさしい日本語」みたいなものを自身の経験から身につけて来たので学生さんとは他の日本人が話せない場面でも私だったら話せたりします。自分なりのやさしい日本語で。この点に関しては、日本語教師の方が感じられる言葉の壁を超える経験のような気がします。

今後、「日本語能力N3以上N2以上（N1からN5まであり、N1が難しくN5がやさしい）じゃないとうちに入ってくるな」じゃなくて日本人が目線を合わせて話をしにいくっていうところが絶対に必要になるかと思います。その目線は上下ではなく、このチャンネルに合わせるという意味合いで、日本人からも努力をすることで、今よりもっと「日本に来てよかった！」という感情を増やしていける、異文化交流の可能性が広がるのではないかなと私は思いますね。

―日本に来る学生さんは日本で学びたいことがあってくるのですか。

特に日本語学校について言うとそんなことないです。いま大多数の日本語学校に来ようと思っている人は出稼ぎです。日本の方が給料が高いから。日本に来て母国で借金をして日本に来てアルバイトをしてお金を貯めて母国に送金して借金を返した後に少しでも貯めて帰るというのがほとんどです。でも、なんか嫌じゃない？嫌ってその…なんだろう、彼らの意識が嫌っていうよりは、単純に日本語を覚えて、日本に長くいてどんどん貢献して欲しいじゃないですか。で、一緒に働いたら面白そうじゃないですか。だけど日本に慣れて

きたなと思ったら帰っちゃうことも多いんですね。日本の側にもそういう状況を生み出している要因はあるかなと。特定技能もそうだし。一定期間日本に来て、その後は帰ってください。でもそれをまた次から次に呼べばいいじゃんという発想があるのかなと。日本語学校でもそう。学校はどんどん学生を入れた方が学費を儲けられる。だから学生の面接もろくにせずに学生をじゃんじゃん連れてこいという学校はいっぱいある。そうじゃない学校ももちろんあるんだけど。

日本の体制としてしっかりと外国人との共生っていうのを考えるのであれば、外国人の非定着前提は改めていかなくちゃいけないと思います。今後日本では外国人と日本人の人口割合が大きく変わっていく時代が来ると思います。現状は出稼ぎというモチベーションで留学生が多く来ちゃっているのは事実。日本側でそういった人たちを呼ぶシステムができている。結論それちゃったんですが、外国人に「日本で学びたいこと」をもっと持ってもらえるような魅力的な国づくり、生活しやすい制度を整えるといったことをして初めて「留学ビザ」がその本来的に意図した目的で活用されるのかなと思います。

—政府がそういった募集の仕方をしているということですか。

国が日本語学校の学生を募集することはありません。あくまでも日本語学校の留学生募集の主体は日本語学校の職員です。ですから、日本語学校が各々しっかりと学生募集を行っていれば「留学」の質は保たれると思います。しかし、残念ながら現実には利益優先でとにかく留学生のレベルに関わらず日本に連れてくるという経営体質の日本語学校が多くあります。国の課題として言えば、日本の外国人施策についてその遅れをしっかりと課題として認識し、広く一般的な国民にも課題共有できるような周知を行い、対応するという姿勢かと思います。やっぱりそこにかける意識が弱いと思うんですよね。現場を見て問題解決をしてっていうところの動きが弱い。日本語学校って学校法人だけじゃないんですよ。株式会社立でほとんどが好き勝手にやっちゃうわけだから、悪い話にもなっちゃうんだと思う。日本に来たら月30万円アルバイトで稼げるよとかブローカーみたいな話をする日本語学校の募集の人がいっぱいいるんですよね。最近はそんな悪質募集の話はあまり聞かなくなってきましたけど昔はけっこう多かったみたいですよ。それで中国の方が連れてこられて、それが少し落ち着いて次は2011年の地震で中国の方、韓国の方、台湾の方が帰って、でも留学生30万人計画があるから人を集めなくちゃいけないよねって。それからベトナムの人たちやネパールの人がそれぞれ留学で来るようになって、中には問題を起こすような人も出てきて…。それで今年の４月から入管法改正で特定技能労働者の人が来るので、今まで３Kの仕事に就いてた留学生は「もういいよ、ご苦労様でした、さようなら」というのが現状です。意外と知られてないと思うけど関わってみると大きな問題だと思いますね。あと誤解ないよう、もちろん学びたいことを持って真面目に勉強する留学生もいっぱいいますよ。

—今後どのように仕事をしていきたいですか。

現在、入管法改正の動きがあってこの特定技能という新しい制度ができて、なぜか留学ビザの交付率が東京入管管轄で非常にシビアになっています。さっき私が言った国の中で今でも日本語学校の留学ビザが出る国っていうのは東京入管では中国とベトナム、モンゴルだけなんですよ。その他のネパールとかスリランカ、バングラデシュ、ミャンマー、インドネシア、カンボジア、ウズベキスタン、タイなんかはもう留学ビザで日本に来る道がほぼクローズされちゃっているんですね。急に入れたり急に閉じたり非常に極端ですが、入管としては大きく判断基準を変えたわけではないんです。国別に厳しく審査を行うという公表もないですし。その国と日本の間で大きな問題が起きたわけでもない。急に、ある国の学生の留学ビザ交付率が低くなる。だけど誰もその理由を明確に説明できないという異常なシステムが日本の在留

資格認定証明書交付申請という申請に係る制度だということですね。外国人の方は日本に語学留学したいと思ってもこのシステムの元だと不安と言わざるをえませんよね。

日本語学校の留学生がシビアにみられている現状で、私が今まで関わってきたことって日本語学校の留学事業だけなんですね（笑）。現在GTNで担当させていただいているのも留学事業です。だけど、国がそこを閉じてしまっていて私としても理由もはっきりしないし何ともしようがないんですね。なので、自分が持っていた知識や経験の価値が今下がってきていると感じています。一旦自分の関わることができる分野を他のビザにも広げて、包括的に外国人の方をサポートできるようこの流れの中で自分の関われるフィールドを広げたいと思います。私が好きなのはその人と直接話せる距離、「頑張ってね」、「ありがとう」って言いあえるような距離での仕事なので、行政書士の資格を取って、今までと同じフィールド＋αで経験や知識を活かした「先生」の仕事を続けていきたいと思います。その中で、自分の考えと同じベクトルの方や、企業とのめぐりあわせも多くもっていきたいです。

―同じ留学に関わる仕事をしていてもそれぞれ考えが違うものですか。

違いますね。よく言われる話ですが「日本語教師の資格がある」と誰かに言うと、「じゃあ英語できるんですね？」って返事がとても多いんです。実は日本にある日本語学校では英語等の媒介語は使わず直接法で教えているという事実は一般的には知られていないようですね。先ほども話に出ましたが、日本の外国人に関する課題、問題はなぜか必要以上に不可視化されていると感じる。ニュースで報道されるのは事件性のあるものが広く知られる機会があり、外国人の普段の生活については、その情報を選択してこちらからアクセスしなければなかなか触れる機会がない。日本の企業や日本語教育に関しても同じことが言えると思う。だから人材会社などが日本語学校の「留学ビザ」を持った学生さんの就職サポート事業などをする際に、日本語教育について十分に下調べをせずに行うと、思った以上に企業の満足感を得られない。あるいは企業側が外国人を雇う際に日本語教育的な知識から外国人社員に対する言語サポートを慎重に行うことをしなければ、やはりそれもどこかでひずみを生んで、企業も被雇用者もいずれも得をしない状況を生むことが多い。私がやる仕事は基本的にそういう層の外国人人材活用の場で、自分の経験から事業をサポートすることなので、むしろ「日本語学校」の考え・知識を持たないで「留学ビザ」に絡む事業をする企業と一緒に仕事をしていますね。そういう背景にある考え・知識が違うという場面は多いですよ。

もっと根本的に悪い意味で考えのベクトルが違ってくると、それこそ日本語教育の知識があっても一緒に仕事したくない日本語学校さんや、企業さんも多くありますね。できる限りはそういうところと一緒に仕事せず、自分の尊敬できるパートナーと仕事をしていきたいものですね。そのためには自分はもっともっと勤勉に経験値を積まなければ価値を相手に提供できないでしょうね。そのために現場での個々の事例を積む経験って本当に自分にって重要だなと思います。自分的にも現場でかかわる中で「学生やっぱすごいなー」とか、「本当に超いい子たちだな！」とか、そんな気付きをモチベーションにしている部分ありますしね。

―そういう現場に関わらないと知ることができないですね。

私は日本という国と外国人とのマージナルなとこにいるわけです。境界線のウチとソトを行ったり来たりする仕事だと思うんですね。文化、生活圏的に「ウチ」の人なんだけれども日本国内で不可視的な「ソト」に出て交流する中で、でもこれってウチソトじゃないじゃん、結局日本国内で一緒に暮らしているし問題の根は同じ社会構造上の課題だし。でも、社会的に「ウチソト」って分断されているようにどうしても自分には見える。その立ち位置でいられることは非常に自分にとっては

価値を感じます。こういう考えを人に話すのもいろんな人に少しでも自分が経験した話が伝わればいいなと思っているし、それを聞いて、他のみなさんが自分から現状マージナルなところの出入りを経験してもらって、自分たちの外国人に対するスタンスみたいなものを作って欲しい。無意識的であれ不可視的な在日外国人の現状に対してみんなが主体的にアクセスしてみる、自分のこと、ウチのこととして問題意識を持つところから始まるのかな、と。

—学生時代にやっておいた方がいいことはなんですか。

学生の時代に行政書士資格を取っといた方がいいと思う。そんな難しくないはずだから、明学生だったら十分とれる。ちゃんと勉強すれば。後は、少しでもその地域でやってるボランティアとか調べれば日本に住んでいる外国人との接点がとれるはずだし、そういったところからどういう課題を抱えているかっていうことを見てさっきも言ったんだけれども、自分なりの視点を持って、良い点も悪い点もあると思うんですよ。それが関わったケースが多ければ多いほどある程度普遍性のある視点になると思うんで、そういったものを見つけていただけると嬉しいですね。

私は流されて縁を繋いできたらこういうことになって働いてきましたけど、結果私が一番良かったのはそこです。いろんなことが見られた。他の人には見えないところが見えた。人に見えないところが見えるってことはそういう経験している人が少ないってことだからそういう経験が必要なことがあった時に吉村さん手伝ってよって呼ばれたりするんですね。そういう何か自分の一つ尖ったものを持つっていうのは留学じゃないにしろ、絶対に将来役に立つと思いますよ。新聞読んでホットなところを器用に狙う動き方はやっぱりセンスが優れている人でなきゃできない。私のように器用ではない人間はまずは得意分野を作ってその中で深いところの方に掘り下げるってことで、一本槍は少なくとも持てる。結果的に自分はそのような経験をしたので、みなさんにもお勧めできるのはそのような視点の持ち方です。 私はいいかげんで、就職なんかできるタイプじゃなかったと思うんですけど、それでも今なんとなく生きていられるのはその尖ったものがひとつあるからなのかなと思います。

あと、学生時代にとにかくいろいろやることはプラスにしかならないと思います。履歴書に響かないでしょ。履歴書に学生のときこれをしていましたってプラスのことは書いてもいいけど、別にマイナスのことは書かなくていいでしょう。でも、社会人になってこのブランクの期間なにしていたのとかそれって絶対履歴書に載るでしょう。履歴書だけ、ペーパーだけで見られるとそれは損をしてしまうので。

だから、学生のうちにやれるだけやった方がいい。学生の身分８年間に伸ばしてもそれはやったほうがいい。やりすぎても就職面接とかで減点されちゃうかもしれないけど。でも、明確な意思があって8年間学校にいましたって言いきったらその人面白いって思うじゃないですか。

だから、まあ、例えば就職の話で言うと今のうちから自分の興味ある分野の企業でインターンとかできるだけするのもいいと思う。ほかにはボランティアなら自分の興味ある分野の団体に積極的にアクセスして関わってみる。もしかしたら縁のお誘いをもらって自分でも思っていなかったワクワクする将来がそこにあるかもしれない。私は、いろんなとこで関わる人と、その場限りにしなくて、いろんな人の話を聞いてその人が悩んでいることが別にお金もらえなくてもそのために何かできればいいなと本気で思う。それが自分のためになるから。

—けっこう積極的に関わっていくことが必要なんですか。

私は元々消極的な性質で、人とのコミュニケーションとか苦手なんです。そうは見えないと思うんですが、東京出て来たばっかりの時も全然周りとのコミュニケーションがとれなくて一人でいる

ことが多かったんです。でも人とのコミュニケーションに関しては消極的だったけど、自分が興味を持ったところでいろんな団体、活動にとりあえず流れで関わってみました。YMCAの活動に関わってみたり、子供キャンプに関わってみたり、その戸塚まつりが一番大きな広がりを見せたんですけど戸塚の中学の個別支援学級っていう学習障害の子達が入る学級があって、そこの学級の先生と一緒に戸塚まつりのお神輿を作ったりしました。そういったことが本当多かった。もういろんなところにとりあえず出てみてほしい。で、いつまでも繋がりが切れないように連絡を取ったり。その中でやっぱり志向性が似ている人と巡り合うんですね。下手な弾でも数を打てば打つほど当たる玉の総数は多いじゃないですか。なので、とりあえず浅くでも、分かってからそのなかから選んで深く関わるっていう。学生時代こそ関わる幅が広げやすいと思いますので。

経験とか勉強とかでやって無駄なものはないと思っていて、悪いことがあったとしても。何でも経験じゃないですか。苦労だって絶対しないと、将来絶対どこかでするんだから先にしておいた方が。「本当にやりたいこと」っていうのが一つかどうかもまだ明確ではないのであればいろんなところに関わってみて、その中で関わる人や活動などを絞っていくっていうのは今だから出来る作業じゃないですか。

—社会人になるとそういう探る時間もなくなりますか。

私は学生時代からそういう生き方をしているので意外となくならないですね。縁もいろいろあってですが、私のそのピンポイントの知識を活かしてくださいという話で呼んでいただけたりして。呼ばれた先でまた広がってという。まあ経験則というよりはこれは結果論なんですが。私の場合そのベースは大学時代に絶対あると思います。学内学会とかもなんか面倒くさいと思われるかもしれないですが、でもやってみたら結果的に面白かったです。

—サークルは何に入っていましたか。

僕はインカレの映画を撮るサークルにも入っていました。大学1年に東京来たと同時にいくつかサークルを調べて連絡して、こういう活動していて、会費はいくらでというところに試しに行ってみて。週に１回ぐらい新宿などでみんな集まって映画談義をしたり、脚本書いたり作ったりして実際に撮影にも何回か行ったし。さっきの話からまた違う話が出てきてちょっと行動が雑食過ぎて頭おかしいなとか学生時代もよく言われたんですけど、でも頭おかしい方が得するなっていうのも思いますね。

—最後に、社会学部生にメッセージをお願いします。

私のように縁にめぐまれたなって思える人間ばかりじゃないと思うし、本当に一人一人生き方があると思うので、手当たり次第にやっても意味ないですよって言う人もいると思うんだけど、私は結局、手当たり次第、興味があることにとりあえず飛び込んでみて良かった。そういうことは意外と学生のうちしかできないというのはよく聞く話だけど、まあ本当だと思う。その下地を学生の時作って、後はその下地を作る中で一本の槍を持てるように自分の志向性を磨いていくということですかね。

プロフィール（吉村　悠）

2002年	明治学院大学社会学部社会学科 入学
2007年	明治学院大学社会学部社会学科 卒業
2007年～2009年	日本語教師非常勤講師
2009年～2011年	大学院修士課程で地域日本語教育を専攻
2011年～2017年	日本語学校で事務局長として働く
2017年～現在	地域活性化のための日本語学校立ち上げ、および日本語教育、留学生に関わる事業へのコンサル活動を行う

インタビュー

福祉の現場からジャズシンガーへ

――シンガー結城章子さんに大学時代とお仕事について伺う――

面談者
結城　章子（1998年社会福祉学科卒業）［写真中央］
※プロフィールは本文後ろに記載

取材
佐俣　朱理（社会学科3年）
伊藤　小春（社会学科3年）

構成・編集
伊藤　小春（社会学科3年）

インタビュー日時：2019年8月1日（水）
16時～18時

場所：明治学院大学本館

今回インタビューさせていただいたのは、ジャズシンガーをされている結城章子さんです。現在のお仕事の内容や、大学時代についてお話を伺いました。

―まず最初に、お仕事の内容などを教えてください。

ご紹介いただいたように、シンガーをやっておりますけども、シンガーといってもいろんなジャンルがあって、私はジャズを歌っているんですね。ジャズシンガーといっても試験とかがあるわけではなく、プロゴルファーみたいに資格があるわけでもないので、きちんとした認定はないのですが、都内のジャズクラブとか、レストランとか、そういうイベントで歌ったりしているということです。今、世の中の傾向として、こういったエンターテインメントみたいなことに皆さんお金をあまりつぎ込まないようですね。バブルのころはいろんな所でそういうイベント等を沢山やっていて、歌っていくことだけで生計を立てるってことができていたみたいですが、今は景気があまりよくないので、私は歌を歌いながら自分の実家の仕事の手伝いをしています。茨城の筑波という所で母が薬剤師をしているんですが、会社を持っていますので、私は薬剤師の免許はもちろん持っていないので調剤はできないんですけれども、そこの手伝いをしながら、歌を歌っているという状況なんです。

―実は公式サイトの、プロフィールから経歴を拝見させていただいたんですけど、そこに社会福祉関係のお仕事をされていたって書いてあって。

はい、私は社会学部社会福祉学科を卒業したの

で、４年間主に知的障害のある方に関しての勉強をして、ゼミも知的障害者福祉についてのゼミを取っていました。すでに退官されてしまいましたが、中野敏子先生という方がいらっしゃったんです。その先生の専門が知的障害者だったので。私は元々は、今でいう特別支援学校、私が大学に通ってた頃は養護学校という名称でしたが、そこの教員になりたいと思っていました。この明治学院の社会福祉学科の課程を修了すると、当時の養護学校の教員免許が取れるということだったので、普通の中学とか高校の基礎免許にプラスアルファで養護学校で実習して、養護学校の教員免許を取得したんです。中学と高校の実習と、割と明治学院のそばなのですが港南に養護学校があって、そこで実習をして、免許を取りました。

―何年くらいお勤めされてたんですか？

教員になるには教員採用試験をパスしないとならないのですが、２回受けましたが受からなくて。その試験を受けている最中は世田谷区教育委員会の中に巡回教育相談員という職業があり、いわゆる普通の小学校とか中学校の通常学級にいる障害のあるお子さんをサポートする仕事をしていました。担任の先生１人だと、ほかの児童生徒も見なきゃいけなくて、障害のあるお子さんを見るのが大変なので、全部の授業ではありませんが、ある特定の授業とか遠足や社会科見学に行く時に、世田谷区の教育委員会から私のような相談員が派遣されて、その子に一緒について行くということをしていました。その仕事をしながら教員採用試験を２回受けたけど受からなくて、当時は育成会という知的障害者の施設を運営している社会福祉法人がありまして、そこに就職しました。その施設では同じく世田谷区内で学校を卒業した方が家から直接通ってきて、ビーズの作品を作るなどの作業をするとか、日中のいろいろな訓練をしたりとか、そういった施設で生活支援員として働きました。その時たまたま、友達に誘ってもらってジャズのライブを聴きに行く機会があって、今までジャズとか全く聴いたことがなくて、すごく感激して。仕事をしながら趣味で、習い事をしたいなと思って、その時に歌うことは好きだったので、じゃあジャズボーカルというのを趣味で習い事としてやってみようと思ったわけです。普通のカルチャーセンターの講座で初心者向けの講座があったんですね。なのでその講座に、仕事をしながら夜、月１回くらいなんですけど、行ったりして。それが今の仕事につながっています。

―そこに出会われるまで、シンガーを目指したりは……。

なかったですね、別に親戚とか知り合いに音楽やってた人がいたとか、そういうのも全くなくって、本当に突然ですね。友達に誘われて行って……。仕事もそのころ施設に就職して３年くらいで、少し自分の中でも余裕が出てきたので、仕事だけじゃなくて、他にちょっと趣味でできたらいいなと思ってるときにちょうど重なって、たまたまタイミングが合って、そこの講座の先生が現役のジャズを歌ってらっしゃる歌手で、習っていくうちに先生のライブの前座という感じで1、2曲歌ったりだとかをだんだんやっているうちに、もうちょっと本格的に勉強したいなと思って、ボイストレーニングとか、もう少し本格的なレッスンを受けました。歌っているうちに仕事と両立っていうのがなかなか、正社員だったので、自分の元々の仕事場にも迷惑をかけてしまうし、自分ももやもやしながらやってるのが良くないなと思って、福祉の方の仕事をやめて、歌をやろうって決めて、それでだんだんスライドしていったという感じですかね。

―本当にそのタイミングが、運命的だったんですね。

そうですね、今思えば。その時はジャズシンガーを目指していたわけではないので、本当にめぐりあわせで機会が巡ってきたっていう感じですね。

―社会福祉学科とか、知的障害とか、そういうものに興味を持ったきっかけを教えてください。

あれは高校生くらいの時に、たまたま、東京にある私立の学校で、自閉症のお子さんばかりを受け入れている学校というのがあって、絵を描いたりだとか得意なことを生かすことをやっている学校で、アメリカにも分校があって、アメリカにいる障害を持った子どもたちと日本校の子どもたちが交流したり、日本の一般の学校ではやってないような取り組みをしてる学校を紹介するテレビ番組をやってたんですね。それまで、街中で知的障害を持った人に会うってことはあったけれど、知識もないし、自分の家族の中にそういった障害を持った人がいるわけでもなく、全然どういう世界なのかわからなかったのですが、テレビを見たときに、あ、こういう世界があるんだって思って、興味をひかれたんですよね。受験する時に知的障害の方について勉強できる学校っていうのをいくつか探して、明治学院社会福祉学科っていうのは伝統もあるし、知的障害者福祉の現場で活躍されている方がたくさんいたので、それで志望して合格したという感じですね。それも偶然と言うか、たまたまテレビでそういう番組を見たっていう単純なきっかけなんですけど、そういうことです。

—ありがとうございます。大学時代に力を入れていたことを教えてください。

大学の時は知的障害の方々のことを勉強したいという気持ちで入ってきたものの、今までそういう方々と直接接する機会もなかったので、学部でボランティア募集の情報が入ってくるのでそういうのに参加してみたりしていました。その他には１年生から４年生まで体育会の合気道部に所属していて、体育会なので日曜日以外は毎日練習があるんですよね。水曜日の午後は今もアッセンブリーアワーっていうのありますか？

—学内学会は関わりないんですけど、水曜日がサークルの日っていうのはなんとなくあります。

当時私が通っていた時は水曜の午後の時間にアッセンブリーアワーっていう名前がついてたんです。部活とかそういう活動をやろうっていう時間が。その時間には授業も設定されていたかもしれないけど積極的には履修せず、水曜日の午後は戸塚キャンパスの道場で、土曜日は白金キャンパスの道場で交互に練習があって。あと月火木金は昼休みに１・２年生は戸塚だったので戸塚で、３・４年生は白金で昼休みを練習に取られてました。体育会なので一応こういう約束事は余程の事情がない限りは守らなければならないし、上下関係とかいろいろしきたりが結構厳しくて。試験の期間は部活は休みにしなきゃいけないっていう決まりがあるので休みだったんですけど、普段の日というのは、授業にでて昼休みの練習をして、だから昼休みの後の授業っていうのはなるべく取らないようにしてたんです。なぜならお昼食べる時間がなくなるので。必修とかが入っちゃう場合は仕方がないので、その時は本当にお昼ご飯食べないで練習が終わったら急いで着替えて授業に出たり。一応勉強以外でやっていたことと言えば部活が一番時間としては多くを占めていて、４年生の夏まではやってましたね。夏で幹部交代だったのでね。

—なんでその合気道に入ろうと思ったんですか？

練習というか、模範演武をやってたりして、見に行ったんですよ。その演武がとてもかっこよくて、あんまり体育会だとかそういうことを深く考えずに入っちゃったんですね。

—凄いですね。

それも運の尽きというか（笑）。

—教職科目を取ってたんですね。それに合気道を……。

そうですね、授業は基本目一杯だったので、単位取らないと教職免許も取れないし、結構授業は厳しかったですね。興味があれば単位に換算されない科目も取ったりとか、あと当時を考えてみれ

ば英語が結構好きだったので、ジャズも英語で歌うし、明学は国際学部があるから、外国人の先生が英語で映画の音声テープを流して、それを聴いて英語を覚えるとかそういう授業があったんですよ。

―それは国際学部の先生が教えてる授業を？

はい。それは、国際学部の学生じゃなくても取れたんですよね。自分の単位にはカウントされないんですけど。『バック・トゥ・ザ・フューチャー』って映画知ってますか？若い人はあんまりわからないかな。例えばそういった映画の、当時はテープですね、それをラボ室なんかで流して、それをみんなで聴いてここの表現がどうとか教わるっていう、そういうのが結構面白かったので。だから学校には日曜日以外ほとんど毎日行っていましたね。皆さん４年生になると週に何日かしか来ないって場合もあるけど、部活があったっていうのもあり、あとは授業の関係で。

―忙しいですね。

その合間にバイトしたりもしたので。

―凄い充実してますね。

そうですね。今思えば。なんせ若いですからね。

―今学内学会に本当は社会福祉学科の人が来て欲しいんですけど、社会学科しかいなくて、社会福祉学科の人にお話聞いたの初めてで。卒業生を紹介していただくのってゼミの先生にお願いして、「こういう卒業生の方いらっしゃいませんか」「こういう職業についていらっしゃる」って感じで聞いていくので、誰も福祉学科がいない状況で。社会福祉学科と社会学科って同じ学部でもやることが全然違うじゃないですか。去年も私は社会学科の卒業生の方のお話しか聞いてなくて。

私が就職した知的障害者の方の通所施設の、施設長さんも明学の社会福祉学科の卒業生だったし、福祉の現場に行くと明治学院の社会福祉学科の方には結構お会いすることあって、「学校一緒ですね」っていうことが多いですね。福祉の専門の大学だったら違うでしょうけど、こういう一般の総合大学でそういう福祉学科はそんなに多くなくて。今はね、時代的に福祉が注目されてきているからあるかもしれないけど、私が受験した時は、総合大学で福祉学科って名前がついてるところはあんまりなかったんですよね。情報も沢山入ってきたし、私が２年生か３年生の時、夏休みを利用して海外の福祉施設を見学するツアーっていうのがあったんですよ。学校の参加者募集を見て行ったんです。学校が主催してるんじゃなくて、どこか学校と提携してる会社だったんでしょうけど。それで社会福祉学科の学生何人かで夏休みに、２週間くらいアメリカに行って、ホームステイをしながらいろんな向こうのいわゆる老人ホームみたいな所に行ったり、障害のある方の施設を見学に行ったり、そういうのはすごく面白かったです。

―今は実際福祉関係ではないですけど、アメリカに２週間くらい、福祉学科の方で、チャペルアワーとかで結構お話されてる先生がアメリカのランカスターに学生を連れていってホームステイして、っていうプログラムがあって、あれはチャペルが関係してるんですけど、でも結構社会福祉学科の先生たちはチャペルとの関わりがあります。

そうですね。やっぱり教会と福祉は結びついていますよね。海外に行くと教会が運営してる福祉施設とか活動だったりとか沢山あるんでしょうね。

―今だと３つくらい社会福祉学科のコースとかがあるんですけど、当時ってそんな感じではなく、分かれてなかったのですか。

社会福祉学科の中では、一応ゼミとか取るときに、老人関係のゼミとか、知的障害、精神障害、後

はコミュニティ、家族、そういうのはありましたけど、コースで分かれてたってことはなかったと思います。

―３年生になると、社会学科の人でも社会福祉学科の授業をいくつか取れたりするんですけど、そこで、福祉学科の授業を２つ受けてて、全然違うなと思います。視点がすごく違ってて、同じ学年の方しかいない授業中に、「ソーシャルワーカーの視点で考えてみよう」。社会学科の人は、それわからないから社会学的な視点で意見言ってくださいって大人数の中マイク回ってきて意見言うんですけど、その時の社会福祉学科の意見が、視点がソーシャルワーカー目線で的確に、こういう支援が必要で、みたいな。同じ学部なのに見てる目線が違う。触れ合う機会がほぼないので。

同じ学部でもね、違う。確かに私も、ゼミを取った時に、そのゼミは厳しいって有名なゼミで、一応ゼミ取る前に先生と面談があるんですよ。で、卒論のテーマには、こういうことをやりたいとかって。で確か私最初、割と教育の方に、教員を目指してたから、教育的な事柄をやりたかったんで、最初は、先生に断られちゃったんですよね。そういうことやりたいんだったら、うちのゼミはふさわしくないと。だけど私は、そこでどうしてもその先生のゼミを取りたかったので、一生懸命食い下がって、その結果先生から「じゃあ、心理学科でそういう障害のある子の学校の先生、そういう心理的なことがかかわってくるので、そちらの先生の話も聞きながら、並行してやった方がいい」と言われて、心理学科の先生のゼミにも行ってたんです。

―そんなことができるんですね。

そうなんですよ。テーマがそういうテーマだったので。ゼミの中でディスカッションするときも、今おっしゃったように視点がすごく違うんです。知的障害のある方に対する見方というのが。みんなゼミの中の生徒さんて、自分の兄弟が知的障害があるとか、そういう方が多かったんですよね。それで自分もそういう仕事に就きたいっていう方が多かったから、私なんか全然身の回りに障害のある人がいないからそういう意味で目線が違って、なんて言うんでしょうね、ちょっと意見を言ったらワーーってそれに対して「これはこういうことですか？」とかいろいろ言われて、「ちょっとそれは何とも言えない……」みたいな。そういう場面が結構ありましたね。

―確かに心理学部に、教育発達学科、唯一小学校の免許が取れる学科がありました。

小学校の免許が取れるんですね！？

―たぶんそうで……。私も１年の時に教職取ろうかなと思って履修してた時があって、でも実際中高しか取れないじゃないですか。この学部は。でもそれは共通科目だったので、他の学科の人もいろいろいて、唯一小学校の教員免許も取れるようになってるのが多分心理学部の教育発達学科だった気がして。

あったんだね。

―大学時代に力を入れていたことを教えてください。

そうですね。明治学院の学生さんって割とまじ

めな人が多い……ですよね。

—そうですか？

（笑）そんな印象がある。

—よく外部の講師の方や非常勤の方にそうおっしゃっていただくことが多いんですけど、いろんな大学見てきてるので、「明学の学生さんは結構まじめでちゃんとしてて」って授業中に言われたりするんですけど、そうなのかな、みたいな。

もちろん、まあね、いろんな人がいるから。全員が全員そうじゃないでしょうけど、割とまじめな学生さんが多いって感じがします。自分から積極的にこれをやったらいいんじゃないかとか興味あることを、社会に出て振り返ってからそう思うんですけど、学生時代ってすごい自由な時間が沢山あるじゃないですか。もちろん社会に出てからも仕事以外のプライベートな時間はありますが学生時代はまだ知らないことが多いから、何か出会った時に受けるインパクトが、年を取ってから同じことを経験するよりもすごく大きいと思うんですよね。だからいろんなものに出会ってほしい、人もそうですし場所もそうですね。それこそいろんな人と出会える場所とかそういうところに自分からどんどん行ってみて、ダメかもしれないなと思ってもやってみないと分からないってとこもあるし、失敗してもそこから何か別のことにつながるかもしれないし。心にふっと思ったことは何か自分の中で、きっと必要なことだと思うので、そういうことを見つけて飛び込んでほしいなって思います。

—実際先ほども、大学時代のこと聞いてとても充実して、サークルも体育会で、教職も取って、授業も、って、それでも、こういうことやっとけばよかったなということ、今のお話も含めて、ありますか。

どうしても単位取らなきゃいけないとかあるのでね、今の授業の形式と、私たちが学生の頃の形式って全然違うとは思うんですけれど、今思うと大事なこと沢山教えてもらってたなと思うので、もちろん授業は沢山取ってはいたんですけど、もっと疑問に思ったことを先生に訊いてみればよかったなとか、そういうのはあります。一方的に知識だけを受け取るのではなく、もうちょっと自分から噛み砕いて、これはどうしてこうなったのかとか。先生も忙しいかもしれないけど打てば響いてくれると思うので、先生にいろんなことを訊いてみたらよかったなって思います。

—質問とか行くの、ハードルが高いんですよね。学生から行くのって。授業の後自由に質問あったら来て下さいっていうときも、間10分しかなくて、この間に聞けなかったら先生の研究室にわざわざ行くかってなると……。特に社会学科の先生方と社会福祉学科の先生方が今一緒な気がするんですけど、1号館の7階に研究室があって、入りづらさがすごいんですよ。普段は学生は入れず、先生が設定してる「質問していいよ」っていう時間があって、その時は行っていいんですけど、もう「入りづら」っていう。本当に訊きに来てくださいっていう雰囲気じゃないんですよ。もっと開けてほしいって思います。テストもあるし。

そうですよね（笑）。時間の制約はあるし、聞きづらいっていうのはあるし。やっぱり当たり前ですけどそれぞれ専門の先生方ですから、話を聞いてみると吸収できることは沢山あるんじゃないかなと思うんですよね。

—聞かないと。私も3年生なので（笑）。

例えばこれから就職するにあたって、自分が行きたい分野の卒業生の先輩に話を聞くような機会はあるんですか？

—自分から動けば会えるっていうのもあるんですけど、関わり合いは……。あ、サークルの方が

多いのかもしれないですよね。私はサークルに入らずに、学内学会に入ってるのでないんですけど、サークルの方は結構密に、上下関係とかあって、いろんな就職される方とかもサークルによっては、舞台研究会とか。

ぶたけんってやつだ。

—ぶたけんと、広告研究会が文化会の中では多分一番雰囲気としては大きくて、広告系に就職する方が多かったりだとか、舞台関係に行くことが多いので、そことかだったらOGOBのつながりが大きかったりするんですけど、普通に企業とかだと、キャリアセンターで申込書いて、「いついつに行きます」みたいなのやっとかないとなんかあった時に、問題が発生するので。このインタビューは特殊な例で、キャリアセンターを通さずに先生のご紹介でお話を聞いています。なので実際学校に来ていただくことが一番多いです。「久しぶりに行きたい」っていう方がいらっしゃるので。

来る機会がないですもんね。

—卒業した後はなかなか来る機会がないので、久しぶりに来たい方が多いので、学校の方が多いんですけど、お仕事の兼ね合いとかの時は、「職場にいらしてください」って言われたときは出向いたりするので、OGOB訪問の時は会社に行きます。それを思うと特殊というか。あとは社会調査士の科目が、社会学部はあります。社会調査実習っていうのが３年からあって、それまでにいくつか取らないといけない授業があるんですけど、形式がほぼそれに近いですね。先生がアポを取ってくれるか、学生自身が自分たちでいろいろやり取りをして、調査対象の方に学校できいたりとか直接行ったりとか。メインは先生や学生が準備していて、それがちょっと特殊だなって。

そうですね、なかなか卒業生とお会いする機会はあんまりないですね。

—雑誌を作って、一応新入生には全員に配るようになってるので、今年から雑誌の内容を変えていきたいんです。学内学会はいろんな担当ごとに分かれてるんですけど、今年は変えていこうってなってます。

学内学会って自分で入りたいですって言って入るんですか？

—そうです。でもあんまり入り口が広くないです。（戸塚キャンパスの）遠望橋での勧誘はやらないで、ポートヘボンで戸塚会議を開催しますって告知するんですけど、あれでよく集まるなって、入ってる自分でも思うんですけど。私は私でちょっと特殊な入り方をしてるので。私の学年はアカデミックリテラシーっていう授業で、非常勤の先生におすすめされたんです。直接教授とお話しする機会が多いので、今後のゼミに響くかもよと。繋がり持っとけばということで紹介してもらったんです。

—最後に、在学生へのメッセージをお願いします。

先輩にもよく言われると思うし、私も明学の先輩とお話しする機会があると言われたことがあるんですけど、その中にいる時ってその良さがあんまりわからないですよね。明学に限らず他大学の学生さんもそうなのかもしれないですね。大学だけじゃないんですけどね。私も明学に入った時は、ぶっちゃけて言うと第一志望じゃなかったんです。

—私もそうです。

でも嫌だったわけではないです。ただ自分が明治学院に行くだろうなってことは想像してなかったんですよね。だから、明治学院に入った時は自分でも意外だったというか、「あ、こういう風になったな」という。学校自体楽しかったんですけど、「明治学院っていい学校だよな～」なんて思う

ことはなくて、卒業してから福祉の仕事をしたりとか歌を歌ってて、先輩とお会いすると皆さんすごく温かく応援してくれたりして、明治学院っていい学校だなって。伝統もあるし、外国人のヘボンさんが作った学校だから外国の香りもあるし、キリスト教の精神もあるし。今いる学生さんは、きっと将来「明治学院に行ってよかったな」って感じると思うし、あなたの選択は間違ってなかったよって言いたいです。あとは社会に出て色んな場面に遭遇すると思いますが、色んな事に気づいたりできるように、アンテナを張って頭を柔らかくしておくと、将来どんなことが起きてもやっていけるんじゃないかなと。まだそんなたいそうな事を言えたものじゃないんですけど。限りある時間を大切にしてもらいたいなということですね。

—ありがとうございます。

プロフィール（結城章子）

1994年　明治学院大学社会学部社会福祉学科 入学
1998年　明治学院大学社会学部社会福祉学科 卒業
世田谷区教育委員会に巡回教育相談員として勤務
以後約10年に渡り、世田谷区内の特別支援学級や知的障害者通所施設に勤務
2004年　ジャズシンガーとしてステージデビュー
2014年　オールサンフランシスコ録音のCD「Two For The Road」を発売
以後ジャズクラブやイベントなどで活動中
Official Website:
https://akiko-yuki.amebaownd.com

2019年度
社会学部卒業論文
タイトル一覧

2019年度　社会学科

渋谷の再開発　――1964年・2020年東京オリンピックのまちづくりの違い――

スポーツによる地域活性化について　――松本山雅FCを事例に――

東京オリンピックがもたらす都市と人口の変化

東京の都市開発　――都心三区（千代田区・中央区・港区）――

多摩ニュータウンにおける高齢者のフードデザート問題

ソーシャル・キャピタルを活用したまちづくり

公民館を拠点とした地域づくり　――地域福祉の視点から考える――

サテライトオフィスによる地域づくり　――徳島県・北海道の事例から――

まちづくりにおける公共交通の可能性

つくばエクスプレスとその開通による都市への影響

公共交通を基軸としたコンパクトなまちづくり

ホスピタリティの裏に隠される労働問題　――東京ディズニーリゾートを事例に――

殺人報道におけるジェンダー　――日本大手２紙の通時的分析から――

大都市郊外における不良少年の活動と「地元」の意味

ミスコンテストとジェンダー　――「ミスコンおじさん」へのインタビューを中心に――

日本の若者は「内向き」なのか　――大学生10人のインタビュー調査から――

地域観光振興の背景と実態　――熱海市を事例に――

プロパガンダをくぐり抜けて　――『のらくろ』における戦中と戦後――

深刻化するマンションの管理・運営　――インタビュー調査から――

地域密着型プロ野球球団の経営戦略とファン　――広島東洋カープと横浜DeNAベイスターズを事例に――

広告活動におけるジェンダー観の歴史とその実践

ストーリーズ機能のリリースによるInstagramの持つ役割の変化

Instagramの社会的役割　――ストーリーズ機能の発達と広告的側面――

化粧品の購入意思構築においてｅクチコミが担う役割　――　広告との比較を通じて――

セクシュアルマイノリティへの理解度とLGBTブームの関係

LGBT聾者のコミュニティ

「ジェンダーレス男子」からみるファッションとジェンダー観

メディアがLGBTへの寛容性に与える影響について　――LGBTを認知することと理解し受け入れること　――

Twitterのハッシュタグはファンコミュニティの形成に寄与するか

渋谷・都市空間におけるストリートの現在地はどこか　――“広告＝都市”崩壊後の分析アプローチの再検討　――

教育現場における性的マイノリティの現状と課題　――性的マイノリティに考慮した学校づくりに向けて――

量産型オタクのコミュニティの実態　――なぜ彼女たちはSNSを活動の場として選択したのか――

スケートボードと社会の関係　――スケートボードの認知拡大に有効な手段とは――

地域別空き家対策と地域活性化の関係

地方が抱える問題と地方活性化　――青森県五所川原市の取り組み――

日本の生活格差　――いまとみらい――

「まち」をつくること

日本における多文化共生の展望と課題　――インターカルチュラル・シティに加盟した浜松市の事例を通して――

地域活性化としての祭り

学校跡施設活用の可能性　――光が丘パークタウンを事例に――

地方創生の現状と今後の課題　――京都府北部７市町を事例に――

色と性別の社会的関係　――男の子はブルー、女の子はピンクが好きなのか――

「ムダ毛」を剃らない女性たち　――体毛が持つ意味の移り変わりと女性が体毛を剃らないことの意義――

女子校で身につけるものは一体何か

『HUGっと！プリキュア』におけるジェンダー表象

ゲイ表象とあわせて考える異性装が芸術作品内で持つ役割

最も親しい友人に求める要因と性格特性との関連

友人関係の維持と性格特性・投資モデルとの関係

パートナー選択における重要要因　――スピードデーティングを用いた進化心理学の観点からの検討――

美の変遷　――化粧文化に広告が与えた影響――

リアリティ番組・テラスハウスから見る日本人の男らしさ・女らしさ

テレビ広告が視聴者に与える影響力　――女優とCM――

名探偵コナン25周年を迎えて　――人気急上昇の理由とは――

天下無双の「カワイイ」文化　――ファッション・メディアから「カワイイ」を読み解く――

絶対に売れる王道漫画の定義　――『週刊少年ジャンプ』から読み解く――

スタジオジブリ作品から見る広告と宣伝　――大ヒットの裏側にあるものとは――

つくられた時代とドラマの関係性　――朝ドラはなぜ“復活”したのか――

ネットメディアが生むアイドルの新境地　――ネットにはどのような可能性が広がっているのか――

男女のアイドルの寿命の差から考えるアイドルとヲタクの関係性

日韓アイドルの比較論　――『PRODUCE48』を通して――

少女マンガで描かれる21世紀の「愛されヒロイン」の作られ方

YouTubeの世界に与える影響

ライブ・エンタテインメントは発展し続けるのか　――現代の事例や課題から見る今日の音楽ライブシーン――

黒人差別と黒人文化の歴史から読み取る未来　――黒人差別はなくなるか――

「オタク」文化とその発展　――「刀剣乱舞」ファンの影響力とは――

死の迎え方　――在宅医療を選んだ人々――

現代の「妊活推奨」への圧力　――妊活に焦点を当て、女性の生きづらさを考える――

発達障害はいかに医療化されたのか　――ADHDの増加と過剰診断を例に――

日本の移植医療の現状と課題と可能性

自己決定権は存在するのか

現代における美の商業化

「終活」と死の個人化　――「終活」は誰のためのものか――

外見の美しさの社会的評価を考察する　――評価の男女差が生じる理由の検討――

キャリア教育の視点から考える大学生ボランティア　――社会で活きる経験に必要な条件とは――

港区で活躍する高齢者の姿　――CC大学・CCクラブへの参加は何をもたらしたのか――

自分らしい「死」とは何か　――終活ビジネスが目指す支援――

地域間移動を行う大学生の友人ネットワークの変化　――物理的距離と心理的距離の関係性――

教育現場でのLGBT　――そこから見える日本に必要なアクションとは――

都心子育て女性をとりまく三つのジレンマ　――孤独な育児から脱却するために必要な変化とは――

風俗嬢が形成するネットワークとその効果

児童養護施設支援ネットワークは何をもたらすのか　――「ケア空間多元化モデル」の検証と発展――

ゲイアイドルのファン像　――ファンが求めるものとその姿勢――

越境学習の効果と実践へ向けての課題　――活躍の場を増やすキャリア開発がもたらす自己実現のあり方――

デジタル化時代の「特典」の変容　――音楽産業と出版産業の視点から――

なぜ実写化は行われるのか

日本のマンガのジャンルの多様化について

なぜジャニーズ事務所は音楽配信に慎重なのか

ブランドマーケティングを利用したキャラクターマーケティングのプロセスの考察

齟齬する家族意識　――社会化過程と離婚家庭からみえる相互行為――

大人になるために「離家」は必要か？　――インタビュー調査から見る現代の自立感――

これからの部活動に求められるものは何か

「アンパンマンは子どもに人気」なのか　――キャラクターから見る子どもへの期待とその再生産――

KPOPから学ぶ反響　――原爆Tシャツで日本ファンは何を思うのか――

日本におけるベトナム難民の適応と1.5世・２世のアイデンティティ　――郷家のライフヒストリー分析から――

日本人はなぜ日本でバレエを踊れないのか　――海外と比較するキャリア形成の在り方――

地域における幼稚園の役割と幼児教育　――寺西幼稚園の事例から――

日本の義務教育課程における外国人児童生徒の受け入れ態勢と不就学の実態　――国籍の有無が影響する日本の教育――

地方都市におけるクルマ依存の是非とより良い交通環境の実現に向けた考察

現代オリンピックのスポーツイベントとしての優位性と開催都市の戦略分析

　――オリンピックにおける過去大会の好記録比較および開催を介した都市戦略の検証――

好かれるエコと好かれないエコ　――世論調査とSNSのレジ袋有料化に対する乖離――

札幌市民は「予期せぬ」災害にどう反応したか　――中間被災者となった５名の証言を基に――

「セレブの街」のおせっかい文化　――白金台一丁目地域コミュニティ――

日本の敗戦から高度経済成長期にかけての復興と成長　――地方と都市の関係性を軸に――

女性の容姿の追求

宮崎アニメにおける少年を救う少女像

連続テレビ小説からみる働く女性の描き方の変化

日本の喫茶空間　――今も残る昔から親しまれている喫茶店の魅力――

人と花　――花が果たす社会的役割を考える――

2019年度　社会福祉学科

語られないジェンダー不平等　――性風俗の世界――

技能実習生を対象とした権利擁護と福祉開発についての提言

日本の難民受け入れがＧ７で「最低」である現状が今後受け入れていける「可能性」を問う

拡大し続ける日本の非正規雇用者の実態

高次脳機能障害者の単身生活における支援の現状と課題

聴覚障害者の就労の現状と今後の在り方について　――実習を通して――

リハビリテーション施設における社会リハビリテーションの意義と課題　――高次脳機能障害者の地域生活移行――

高次脳機能障害者の生活支援について　――当事者の生きづらさ、家族の介護負担から考える――

透析患者とその家族が抱える心理・社会的問題に関する考察

人生の最終段階における意思決定支援の在り方

日本における申請主義の課題

スクールカーストの実態と人格形成への関与

地方創生について　――若者が戻りたくなる地域とは――

身体酷形概念と（幼少期の）親子関係の関連について

日本におけるｅスポーツの発展について

遊具の必要性について

2020年の東京オリンピックの経済効果およびレガシー効果について
　――過去のオリンピックを検証し東京での五輪開催の必要性について考える――

高齢者虐待に対する取り組み　――日本と諸外国における比較――

一人暮らし高齢者の生活と地域との関わり　――専門職の取り組みと課題――

質の高い終末期ケアとは

本当に身体拘束はしてはいけないのか

超高齢社会における社会的孤立問題

生きがいのある老後を目指して　――現状及び生きがい活動の実態――

認知症の生き辛さについて　――認知症者に対して私たちが出来ることは何か？――

8050問題について　――ひきこもりの長期化と親の高齢化――

〈居場所〉充実に向けた公費投入と“公私混同”の重要性　――公共図書館を通しての考察――

モルティング期の学生におけるボランティア再考　――リフレクションによって引き起こされる学びと成長――

アイドルはなぜ社会貢献活動をするのか

ワークライフバランスがもたらす効果について　――共働き世帯を選択する人々のために　――

障害のある人が第三者とつながる居場所　――障害のある人がより生きやすい地域づくり――

幸福度ランキング上位の県　富山の秘密に迫る

母子関係と生活力の再構築に求められるソーシャルワーク　――母と子が安心と愛を感じながら生きられるように――

児童養護施設における子どもの暮らしの安心・安全を確保するために

被虐待児とその家族の抱える課題と支援　――「家族再形成」に向けて――

児童養護施設職員の在り方　――職員に求められる実践力――

児童養護施設で暮らす愛着課題を抱える子ども達への支援の在り方　――ソーシャルワークに着目して――

児童養護施設における実践の特徴と課題　――児童虐待を手がかりに――

困難を抱える女性たちと社会　――性風俗産業に従事する女性が社会に問いかけるもの――

精神障害をもつ女性の自立について

DV被害者をなくすために　――加害者の更生に目を向けて――

虐待予防対応における母親支援について

ひきこもりの家族内及び地域での理解と支援の在り方

ペットと高齢者の共生　――高齢者とともに安心して暮らすためには――

地域防災力向上のために外国人を交えた地域防災のあり方とは

　――短期滞在者へのヒアリングから在留外国人に焦点を当てた防災について考える――

発達障害のある中・高校生が天職に出会うために必要なアプローチとは何か

子どもの放課後の居場所とは何か　――放課後等子どもの遊び場見守り事業「まちとも」の居場所としての有用性と課題――

福祉資源としての空き家の活用方法と課題

婚活支援にみる社会福祉協議会の役割とは

生活大国である北欧諸国の福祉の価値観と日本の福祉の価値観を比較する

イベント化しない福祉教育のためには　――ソーシャル・インクルージョンの視点から考える福祉教育の展開――

社会福祉協議会の現状と今後の地域支援について

地方における若者の人口流出　――地方に若者を呼び戻すには――

地域のつながりが生み出す子育て支援の可能性

　――地域子育て支援拠点に求められるニーズは地域によってどのような違いがあるのか――

どの子も生きやすい学級と教師の姿勢・態度の関係について

キューサインは聴覚障害者のアイデンティティ形成にどのような影響を及ぼしたか

聴覚障害のある教員の勤務上の課題と支援内容の検討

きょうだい児支援をめぐる当事者の思い

頸髄損傷者の宿泊を伴う遠出について　――K氏の外出記録を事例に課題と支援について考える――

障害と災害　――重度身体障害から考える避難の不安――

医療観察法における社会復帰支援の在り方

精神保健福祉士に求められるエンパワーメント・アプローチの考え方と実践に関する考察

統合失調症患者の入院場面における患者家族との関わりについての考察

アルコール依存症の発症や再発予防のための改善点や問題点

長期入院の現状とこれから　――ソーシャルワーカーに何ができるのか――

福祉型障害児入所施設における自閉症児の支援方法

児童指導員の立場から見る「療育」とは　――「保育」と「療育」の違いから考える――

発達における早期療育の必要性

療育センターにおける自閉症スペクトラム障害児に対する支援に関する一考察

自閉症児における行動療法

軽度知的障害者の自己表現支援

対人援助職に求められる自己覚知　――ソーシャルワーク実習での事例を通して――

知的障害者の就労について　――実習で体験した事例を通して考えたこと――

知的障害者に対する自立生活支援の在り方とは　――障害者自立生活アシスタント事業利用者の事例から――

自閉症とその支援について　――構造化の有用性と展望の提案――

乳児院のアフターケアについて

児童虐待の現状と課題　――横浜市の重篤事例検証報告書を通して――

日本の母子家庭から見る貧困の世代間連鎖の問題とその対策

児童養護施設における自立支援の必要性について

里親委託はなぜ進まないのか　――乳児院実習から里親委託の課題を考える――

母子生活支援施設の必要性　――母子生活支援施設はなぜ減少しているのか――

集団生活治療が個人に与える影響　――児童心理治療施設の子どもたち――

児童養護施設職員が子どもに与える影響から労働環境を考える

児童養護施設における課題と地域小規模児童養護施設のメリット・デメリットの両面から考える児童養護施設のこれからについて

里親委託における不調のリスクについて

愛着障害における障害判定と児童養護施設の対応についての一考察

共生社会におけるインクルーシブ教育の可能性　――千葉県の教育現場での調査を通して――

地域共生社会と福祉教育に関する一考察　――千葉市の地域福祉計画の事例研究を通して――

大規模災害と心のケア　――東日本大震災の教訓を通して考える――

福島原発事故避難者たちの行方　――避難者たちの格差と自立の問題を通して考える――

現代日本の青年の幸福感とその変容　――時代・国際比較を通して――

ＡＩの導入と人間社会の未来

幼児期の子供の遊びが発達に与える影響

なぜいま暮らしの保健室なのか　――「暮らしの保健室よこはま」を事例に――

映画作品から捉える認知症の変容

生活保護受給者への支援における信頼関係の重要性について

更生施設における障害のある人々への支援の在り方について

Ａ生活保護更生施設はＢ地域とどのように関わりを持っているのだろうか

生活保護施設における依存症回復に向けた支援の在り方

自立とは　――生活保護受給者に焦点を当てて――

世代、性的マイノリティの視点から考える「自立」と「自立支援」

精神障害者の自立支援において支援者に求められる姿勢

福祉事務所の早期介入による就労支援の役割について

生活困窮者の自立支援における課題　――支援機関の連携を高めるためには――

アルコール依存症と家族支援について　――負の連鎖を断ち切るためには――

稼働年齢層の就労自立における問題点及び支援方法とは

貧困とＤＶ・虐待に直面する方々への支援のあり方とは　――貧困とDV・虐待の関連性から考える――

精神障害のある人に対しての自立支援とは何か

日本における外国人労働者問題　――技能実習制度と実習生・留学生の労働実態から――

幸福とフィンランド

後発開発途上国の実態と脱出

デジタル社会に必要なアナログ力とは

未婚化が進行する社会のゆくえとは　――どうすればポジティブな未婚化社会が作れるのか――

日本で働く外国人の労働環境について　――ドイツとの比較を通じて――

若者によるバイトテロはなぜ起こるのか　――SNS利用から考える――

横浜市のワークライフバランス　――横浜市に住む女性のワークライフバランスをよりよくするためには――

自律性機械に人権はあるのか　――法と倫理２つの観点から考察――

現代社会における子どもたちの居場所とは　――遊び・学びの場を考える――

〈編集後記〉

Socially 28号をお届けいたします。今号の編集は本当に本当に大変でしたが、関わってくださったみなさまのご協力により、無事に刊行できました。感無量です。

本誌は明治学院大学社会学部につながる学生、卒業生、教員みなのものですが、読者層の多くを占める在学生たちにこの雑誌の目指すところが届いているだろうかという声もありました。そこで、本年度は学生たちに向き合った雑誌とするべく誌面企画を考えました。結果、本年度は、学生部会主催で実施してきた講演会の報告、および卒業生インタビュー、ゼミアンケートを中心とした誌面となっています。

教員や事務局の負担も大きかったですが、おかげさまで学生の主体性がより強く発揮された構成になったと思います。本誌を読んだ学生たちに「おもしろそう」「いいね」と思ってもらえ、さらには学内学会の活動に参加してくれる学生が増えることを願っております。

「講演会」では、6月に実施しました講演会の報告を掲載しております。戸川貴詞氏と中川綾太郎氏による「メディアの終焉？」と、社会学科専任教員の坂口緑先生による「誰がパイプラインをつなぐのか」の二つです。これまで学内学会の講演については会報にて要約のみを掲載しておりましたが、今後はSociallyに全体を掲載することで、会員のみなさまと内容を共有できるようにしたいと考えております。

「卒業生インタビュー」では、8名の先輩たちからお話をうかがいました。社会調査士資格を取得された広告代理店勤務の方、ホテル業界勤務の方、お笑い芸人、旅行会社勤務の方、報道ディレクター、社会調査士資格を取得された労働委員会事務局勤務の方、留学生の日本語教育事業に携わる方、ジャズシンガー、と多彩な卒業生の皆様にお話をうかがいました。学生時代の様子や現在のお仕事の内容について縦横無尽に語っていただきました。これまでの倍の人数のインタビューを掲載することとなり、編集委員の負担も大きなものとなりましたが、読み応えは倍以上になっております。社会学部卒業生たちの活躍をぜひご一読ください。

「ゼミアンケート」では、これまで両学科の一部のゼミを紹介するものだったのを、できるだけ多くのゼミを紹介することにいたしました。ゼミサロンと連動することで、学生たちのゼミ選択の参考になることを企図してのことです。アンケート回答を寄せていただいたゼミ生、教員のみなさまに御礼申し上げます。

他に1本のエッセイを掲載しております。おかげで大変充実したSocially 28号を発行することができました。ご協力いただいたすべてのみなさまに感謝いたします。

これまで学会事務局をご担当いただいていた込宮美沙子さんには春学期の編集にご協力いただきました。8月末にご就職のため事務局を離れました込宮さんには、新天地でのご活躍を心よりお祈り申し上げます。新しく事務局についていただいた坂口和容さんには、新しい職場に慣れる間もなく、次から次へと編集作業をお願いしてしまい大変なご苦労をおかけしましたが、見事なサポートをしてくださいました。ここに感謝の意を記させていただきます。本当にありがとうございました。

安井大輔（社会学部教員）

令和初のSociallyということでボリュームも昨年度号に比べ多くなっております。昨年も編集委員を担当させいただいた経験を踏まえ、今年は編集委員長として頑張らなければと思い作業をしてきました。例年のやり方を少し変えたことで多くの方にご迷惑をおかけし、アクシデントも発生したのですが、無事に発行に至ることが出来ました。Sociallyの発行に向け、ご協力いただきました多くの方々には感謝してもしきれません。本当にありがとうございました。そして初めての編集作業を頑張ってくれた後輩たち4名の力が無ければ

作り上げられなかったと思っています。本当にありがとう。今回は学生に還元できる内容にすることに努め、特に卒業生インタビューに力を入れております。多くの方に読んでいただければ幸いです。Sociallyの発行に２度関わることが出来たことは私にとって大きな経験になりました。ありがとうございました。

佐俣朱理（社会学科３年／編集委員長）

今回Sociallyの編集に編集委員として携わることができてとても誇りに思います。卒業生インタビューのみの参加でしたが、普段体験できないような体験をすることができて、とても勉強になりました。Sociallyの作成でお世話になった多くの方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

赤木小百合（社会学科２年）

今回Sociallyの作成に関わり、初めて雑誌の編集というものを経験しました。卒業生インタビューでは、社会学部にはさまざまなジャンルで活躍されている卒業生がいらっしゃることを実感しました。今まで関わることがなかった貴重なお話をたくさんお伺いすることができました。おかげで学生のためになる雑誌にすることができたと思うので、ぜひ読んでいただきたいです。Socially 28号にご協力いただいた皆さまに感謝いたします。

石岡里佳子（社会学科２年）

Socciallyに関わってくださった皆さまにお礼申し上げます。委員の中でも作業が遅いために、事務局様・編集の皆様には、ご迷惑をおかけしました。

今号は従来よりも学生に役立つ雑誌にという方針のもと内容の整理や新たな試みがあり、さらに個人としても編集作業・音声の文字おこし・インタビューは初めてのことで、多くを学びました。学生の皆様にも刺激的な雑誌となっていたら嬉しいです。

伊藤小春（社会学科２年）

まずはじめに、Socially 28号の制作にご協力いただきました皆様に感謝を申し上げます。私は今回初めて編集作業というものを経験いたしました。分からないことばかりで苦労もしましたが、こうして皆様のお手元に届けられたことに、とても達成感を感じております。

今回のSociallyはより学生に有益な雑誌となるよう、編集委員一同工夫をして制作いたしました。特に卒業生インタビューには力を入れております。ぜひ多くの方に読んでいただき、「読んでよかった」と感じていただければ幸いです。本当にありがとうございました。

木島夏海（社会学科２年）

“令和最初のSocially”今号も最後までお読みいただきありがとうございます。

今回は普段以上にインタビュー記事を増やし、今年度行われました講演活動の中からいくつかを講演録として掲載するなど新たな試みを行いました。それゆえに今までの編集パターンとは異なる状況がいくつか発生し、とまどう場面もありました。しかし、学生部会の編集委員達の努力の甲斐もあり、今号も無事に刊行となりました。例年同様、編集委員メンバーには感謝しております。ありがとう！そして年度途中ではありますが、事務局担当が込宮美沙子さんから坂口和容さんへとバトンタッチとなり、お二人の事務局担当にも大変であろう編集のサポートをしていただきまして、この場をかりましてあらためて感謝いたします。

以前から本誌をお読みいただいている読者の方々には今号の多少の変化をお気づきでしょうか。これから先、徐々にSociallyも時代に呼応した変化を考えて行きたいと私は考えております。皆様の一層の御意見とご支援をこれからもどうぞよろしくお願いいたします。

和田淳一郎（2006年社会学科卒業）

〈論文・研究ノートの投稿規定〉

1. 資　　格：原則として明治学院大学社会学部学生（院生等含む）、卒業生、教員及び賛助会員とする。
2. 内　　容：社会学・社会福祉学及びそれらの関連分野に関するもので原則として未発表のもの。
3. 枚　　数：400字詰原稿用紙換算で40枚以下
4. 応募方法：執筆を希望する方は官製はがきに住所、氏名（フリガナ）、電話番号、メールアドレス、所属、内容を明記の上、「〒108-8636　東京都港区白金台1-2-37　明治学院大学社会学部付属研究所内学内学会事務局」まで送付のこと。
5. 執筆希望応募締切：９月末日
6. 原稿締切：11月末日
7. そ の 他：本誌に掲載された論文については、明治学院大学機関リポジトリに掲載され公開されるものとする。ただし、事情により執筆者が公開を希望しない場合は、この限りではない。

編　集　委　員

安　井　大　輔　　和　田　淳一郎　　佐　俣　朱　理
赤　木　小百合　　石　岡　里佳子　　伊　藤　小　春
木　島　夏　海

2020年３月１日　印刷
2020年３月16日　発行

編集者　東京都港区白金台１－２－37
明治学院大学社会学部付属研究所内
明治学院大学社会学・社会福祉学会
代表　安井大輔
電話　０３（５４２１）２９５７

発行者　東京都港区白金台１－２－37
明治学院大学社会学部付属研究所内
明治学院大学社会学・社会福祉学会
会長　柘植あづみ
電話　０３（５４２１）２９５７

印刷会社　相和印刷株式会社
電話　０３（３６３１）００４４

Socially

No. 28　March 2020

〈巻頭言〉
震災・原発事故を伝えることについて考える……柘植あづみ

〈講演会〉
明治学院大学社会学・社会福祉学会講演会
シリーズ：メディアの達人vol.1　「メディアの終焉?」……戸川　貴詞／中川綾太郎
明治学院大学社会学・社会福祉学会特別講演会
誰がパイプラインをつなぐのか……坂口　緑

〈エッセイ〉
学生のキリスト教活動と『チャペル週報』の変遷……丸山　義王

〈卒業生インタビュー〉
何事にも全力で取り組む
　―社会調査士資格を取得した岩本菜穂さんにお話を伺う―……木島　夏海／石原　英樹
非日常をプロデュースする
　―ホテルスタッフとして旅行事業を見つめる関留奈さんにお話を伺う―……伊藤　小春／石岡里佳子
興味があることは挑戦してみる
　―お笑い芸人として活躍する横井あかりさんを訪ねて―……石岡里佳子／大川　恭子
学生時代の経験が大切
　―旅行会社に勤務している谷川まりのさんを訪ねて―……赤木小百合／佐俣　朱理
AIにはできない、人にしかできない仕事
　―報道ディレクターとして奔走する小﨑亮輔さんを訪ねて―……佐俣　朱理／西岡　晴菜
挑戦してみることの大切さ
　―社会調査士資格を取得した青木海さんにお話を伺う―……木島　夏海／石岡里佳子
手当たり次第に飛び込んでみる
　―留学生の日本語教育事業に携わる吉村悠さんを訪ねて―……石岡里佳子／石川　真衣
福祉の現場からジャズシンガーへ
　―シンガー結城章子さんに大学時代とお仕事について伺う―……佐俣　朱理／伊藤　小春

2019年度社会学部卒業論文タイトル一覧

Sociology
and
Social Work